
ナジア・ハンター 2

いき♂

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ナジア・ハンター 2

【Nコード】

N7631M

【作者名】

いき
♂

【あらすじ】

イギリス人の少年ユーリと幻妖リューフィンのコンビが任務で来日。
日本の高校に編入されるが、暗中模索、孤軍奮闘の日々が待っていた。

接触

所狭しと立ち並ぶ家々の様子は、異国情緒を味わうには雑然としすぎている。

歩道を我が物顔で行き交う自転車に閉口しつつ歩を進めた。俺の目的地は名細^{なじあ}亜学園だ。

栗色の髪が額にまとわりつく。背すじに汗が流れるたび、不快感に顔をしかめてしまう。

つい数日前までイギリスで暮らしていた俺にとって、八月の日本は炎熱地獄だ。

それに何だ、このうるさい音は。日本について全くの無知というわけではない俺は、蝉の鳴き声だってことは知っている。イギリスにもいるが、これほどうるさくはない。

まとわりつく湿気に加え、このやかましい音が暑さを倍増させている。

「あつちーな、くそお。まるで、街が燃えているようだ」
繰り返し夢に現れる、火事の光景がリアルな映像と共に脳裏に甦る。

俺の実体験ではないが、街が燃える光景が目には焼き付いている。その街は、ちょうどこんな街並みではなかったか。

ふと気付くと、俺は右肩から左の腰にかけて、無意識に手でさすっていた。

* * * * *

炎熱たぎる路上。焼き尽くされる街。

取り残された幼い少年の髪は栗色だが煤で黒ずみ、白い顔も煤と涙で汚れ、服はところどころ焦げている。

すっかり展開を覚えてしまっている、いつもの悪夢。

とつくに夢だと気付いているのに、映画館にでも閉じ込められ、強制的にスクリーンを見せつけられているかのように、俺は目覚めることが出来ずにいるのだ。

やがて燃え上がる塀が少年目掛けて倒れかかってくる。

この時、俺は少年を観察することが出来ない。俺自身の視点が少年の視点となつてしまっているからだ。

今朝方の悪夢は、そこで幕を引いてはくれなかった。

銀色に光る剣が、炎の塀を両断する。

塀の向こう側に、剣を振り抜いた人物が立っている。しかし、炎と煙に遮られ、シルエツトしか見ることが出来ない。ゆらゆらと揺らめくシルエツトだけでは、大柄なのか小柄なのかさえ判然としない。

くそ、憂鬱だぜ。

俺は夢の展開を知っている。ここで目覚めることができなかった日は、俺はその剣で右肩から左の腰にかけて斬られてしまう。おそらくは実際の何十分の一、いや、もしかしたら何百分の一に過ぎないのかも知れないが、リアルな痛みを感じながら目覚めることになるのだ。

——また斬られる。

ぎゅつと目を閉じる。すると夢の中とは言え、視界を暗闇だけが支配する。

「——なさい」

頭を撫でられた。

予想外の展開に大きく目を見開いたが、俺の目に映ったのは剣を持った人物でもなければ炎に包まれる街並みでもなかった。

プロペラが回転しているのが目に入る。ここは日本での俺の家。ロフトの天井だった。

* * * * *

今朝は何故斬られなかったのだろう。お陰で痛みを感じることはない目覚めとなったのは幸いだが、俺はいつもの癖で斬られる予定だった箇所をさすってしまったている。

いかにいかに。昼間から夢のことなど考えている場合ではない。俺は軽く頭を振ると、片手でこめかみを掴んで揉んだ。

ここは日本。母が俺を生んだ場所。ここを離れてもう十年以上も経つ。母はイギリス人だが、父は日本人なのだ。

俺は日本の小学校に上がる前に、商社勤めの父の転勤によりイギリスに移り住んだ。転居後、両親は頻繁に喧嘩するようになった。幼い俺がしつこく喧嘩の理由を尋ねても、父も母もともに教えてはくれなかった。やがて両親は離婚し、俺は母に引き取られてイギリス国籍となった。日本には二度と来ないと思っていた。

十五歳になったとき、俺は独り暮らしを始めた。

日本人の父と別れた後、母はイギリス人と再婚して子供を生んだのだ。俺が独り暮らしを決めたのはそのせいではない。母には感謝しているし、彼女が幸せならそれでいい。俺は新しい父とも頻繁に連絡を取り合っているし、妹に会うのが楽しみなので用事のない週末にはなるべく帰ることにしている。

ところが、何の因果か俺は今日日本にいる。ある任務を帯びてやってきたのだ。そう、俺は世を忍ぶ組織《監視機構》のエージェント。もつとも、アルバイトみたいなものだけれども。《監視機構》が何なのか、実のところ俺自身よく理解していない。端的に言えば、異世界のテロリストと戦う組織といったところか。

任務のことはもちろん、《監視機構》の存在さえ母には一言も言えないため、説得には苦労した。

日本への滞在期間は長いが、ギャラがいいのだ。俺は日本語を勉強したいふりを装い、結構がんばった。そんな俺に、新しい父が味方についてくれた。そうでなければ、この任務は俺ではない別のスタッフが担当していたところだ。彼には感謝している。

この国には実の父親がいるかも知れないが、会ってみたいとも思

わない。写真もなければ面影も覚えていない男に対して、俺は何の感情も持ち合わせてはいない。そのことは、母にもはっきりと伝えである。

俺の名はユーリ・ウィルソン、十七歳。GCSEを受け、イギリスにおける義務教育は修了しているが、この九月から日本の高校に編入され、来年三月まで通うことになっている。

こんな俺にも、今は相棒がいる。昨日はこの国における俺たちの住み処に押し込んだ荷物——と言っても着替えやごくわずかな身の回り品だけ——を適当に整理し、今日は連れ立って街中を見物しているのだ。俺たちの住み処は日本円で月額十二万円のロフト、無駄に広い。そんな物件、《監視機構》が金を出してくれなきゃとても住めない。

俺の年齢であれば、交換留学ではない上に保護者不在の独り暮らしというのはどう考えても不自然だが、《監視機構》が何とかしてくれたいらしい。実際に何とかなったのだから、俺が深く考える必要はない。

「いつまで巻き付いている気だ、リューフィン。暑いじゃねえか」
「つれないことを言うなよ、ユーリ。この炎天下じゃ、俺の身体が乾いちまう」

一番長い部分は高さと幅が約一メートルずつの細い身体をした、観葉植物のモンステラを思わせる全身緑色の物体が姿を現した。こいつがリューフィンという名を持つ異世界の幻妖——幻夢世界の住人でありながら、俺たち現実世界の人間に協力してくれている生物——だ。リューフィンの奴、剣に変身できる以外にもいくつか特技があるらしい。

「抜かせ。人間の何十倍も丈夫な身体構造を持っていやがるくせに。透明モードになってろよ。人に見られたら厄介じゃねえか」

「もつと老人をいたわれよな。それに大丈夫だ。半不可視モードだから一般人には俺を見ることができない」

老人というのは大袈裟だが、リユーフィンは俺の倍は生きているらしい。そんなことより、リユーフィンの後半の言葉を聞き返した。「一般人には？　ってことは俺みたいなナジアには――」

「ああ、見える。つまり、リトマス試験紙だ。半不可視モードの俺が見える奴はまず間違いなくナジアだぜ」

俺は大袈裟にため息をついた。

「じゃ、何か。お前、俺が通うことになってる高校にもついてくる気なのか」

「……　ったり前だ。ナジアが何か知らない奴に“お前はナジアか”とでも聞くつもりだったのか、ユーリ」

「ぐ。できっこねえな……、ごもつとも」

くそ。返す言葉もない。

俺たちは学園生活を楽しむために日本に来たわけじゃない。

今、俺とリユーフィンのコンビは《監視機構》からの指令を受けて動いているのだ。

「おい、ユーリ。さっきから何か嫌な感じがするぜ」

そう言われても俺にはよくわからない。

「来るぞ」

リユーフィンに言われ、俺は身構えた。何がどこから来るのか全くわからないのだが……。

「――くっ」

唐突な耳鳴り。俺はうずくまった。

「気をつける、リユーフィン！　俺たち、^{ナジール}異空間に引きずり込まれる」

いきなりハンターが出てきやがったというのか。しかも、こんな街中で。

どこだ？

俺は歯を食いしばって耳鳴りに耐えつつ、気力を振り絞って目を開き続けた。

警告

耳鳴りが治まり、俺は周囲を警戒しつつ立ち上がった。まるで、床も壁面もグレーに塗り潰された半球状のドームの中に立っているかのようだ。間違いない、ここは――

「ナジールか。それもこんな昼間っから。お前ら幻夢世界の連中にしては大胆なことじゃがるじゃねえか。今までは人気のないところを選んでこそこそと襲ってきやがったくせによ」

相手の姿が見えない。俺は早鐘を打つ心臓を気力で抑え込み、相手の出方を窺った。背後はリユーフィンが警戒してくれているはずだ。

「あわてるでない、少年よ」

「うわわっ！」

真上だなんて反則だ！ いつも襲ってくる女アンドロイドの声じゃない。爺さんの囁れ声だ。俺は自分の口から飛び出した情けない叫び声に赤面しつつ三步も後退し、真上を振り仰いだ。

「なんだこのよぼよぼじじいは」

俺より先にリユーフィンが感想を述べた。俺も口が悪いが、リユーフィンほどではない。

「ほっほ。口が悪いの、お主の相棒は。まるで出来損ないの観葉植物……おっと失言じゃった」

天井から嘲笑の言葉が浴びせられた。日本語だ。そうか、ここは日本だった。

俺は改めて声の主を観察した。肩に届く白髪と鼻の下から顎までを覆い隠す白髭。アジア系の爺さんだ。俺には日本人も中国人も見分けがつかないが、おそらく日本人なのだろう。肌の艶は良く顔の皺も少な目だが、囁れた声から察するにかなりの高齢に違いない。あの青っぽい服は……そう、たしか作務衣とか言っただけ。

見た目、特に変わったところは……、いや、何考えてるんだ俺は。

変わったところ大ありじゃねえか。

この爺さん、俺の頭上三メートルほどの高さに浮いていやがる。坐禅——俺だって坐禅くらいは知っている——を組んでいるが、ナジールの天井に組んだ足を向けて逆さまに座っている。

「誰が出来損ないの観葉植物だこらあ」

うわ、リユーフィンの奴、日本語も話せるのか。

リユーフィンは俺の腕から離れ、空中に浮いた。濃い緑色に発光している。こいつが光るのを見るのは初めてではないが、憤慨しているらしい。どうやら憤慨した時にも光るようだ、今初めて知った。「つまらんのう、観葉植物。幻妖のお主がそんな調子では、ろくに少年のお守りもできまいて」

「にやにをう！」

激昂し、今にも飛び上がろうとしていたリユーフィンの尻尾——というべきか爪先というべきか——を、俺は咄嗟に掴んだ。リユーフィンの奴、呂律が回らないほど我を忘れている。

「落ち着け、リユーフィン」

俺たちはナジールに引きずり込まれた時、爺さんが真上にいることに気付かなかった。不意打ちをするつもりならできたはずだ。

「どういっつもりだ、爺さん。俺たちとやり合おうつてのか」

「たわけ。二十年早いわ、少年」

爺さんはぴしゃりと叱りつけるように言ったかと思うと、俺たちの目の前に降り立った。続けてゆっくりと告げてくる爺さんの口調は、諭すような穏やかなものに変わっていた。

「まずは話を聞きなさい」

どうにも調子が狂う。ここに引きずり込まれる前に感じた、ぴりぴりとした殺気が今は感じられない。今までは幻夢世界側の連中と言えば女性型アンドロイドばかり。例外なく問答する間も与えずに襲ってきやがった。でも、この爺さんは……。

俺はリユーフィンに目配せした。彼もうなずく。どうやら見解が一致したようだ。警戒を解くつもりはないが、ひとまず様子を見よ

う。

「何者なんだ、あんた」

俺たちは爺さんの話を聞くことにした。

* * * * *

結城怜治、八十四歳。爺さんから年齢を聞かされた俺は少なからず面食らった。かなりの高齢だろうことは予想していたが、八十を超えているとは思っていなかったのである。日本人は若く見えると言うが、それは老人にも当てはまるのだろうか。

「ここ——名細亜学園に幻夢世界の連中はおらぬよ」

「なにに」

またしても、俺より先にリユーフィンが反応した。どうもこのところ、相棒に落ち着きがない。そうは言っても、爺さんの言うことが本当なら俺たちは何のために日本に派遣されたのだろうか。

「ようこそ日本へ。わしも《監視機構》のスタッフじゃ。今回、わしらにはちと手に余る案件でな。君たちに来てもらったのはわしの意向なのじゃ」

何かを言おうとしたリユーフィンを手で制し、俺は爺さんに質問した。

「俺たちはナジア・ガードだぜ。ハンターがいないなら何のために呼んだのさ」

「うむ。今のところは、ハンターどもはおらぬ。だが、奴らは畏をしかけていきよった」

爺さんの話を聞きながらも、妙に大人しくなったリユーフィンの様子が気になった。ちらりと目を遣ると……。リユーフィンの奴、目を閉じていやがる。なんだよ、居眠りか。勘弁してくれ、後で同じこと説明するの面倒じゃねえか。

「うぬ。ぬかったわ。お主等をわしのナジールに誘い込むのが一歩遅かったようじゃ」

爺さんの言葉に謝罪の響きを感じ、俺は爺さんに視線を戻した。

「すまぬ。もつと早くお主等に接触する予定だったのじゃが……。連中の罠を最小限に抑えるために奔走しておったのでな」

「おい爺さん。生意気言うようで悪いけどさ、あんたほどの年齢ならもつと順序立てた説明くらいできるだろ。何が言いたいのかはつきりわからなくてさすがの俺も苛々してきたぜ」

もともと短気なのだが言わなきゃ判るまい。

「お主の相棒な、連中の罠に……。ウィルスに感染しておる」

編入

「ユーリ・ウィルソンです。ユーリと呼んでください」

おお、という男子の声とわあ、という女子の声が混じり、教室内に小さなどよめきが起こる。女子のひとりが「日本語うまい」と呟くのが耳に届いた。

教室中が真つ白だ。それが俺の、『二の二』という札が掲げられた教室に入室した瞬間の印象。男子は白い開襟シャツ、女子は白いセーラー服。話には聞いていたが、女子の制服は独特だ。上は海軍の軍服、下はミニスカート。ただし、スカート丈は生徒によってまちまちだ。正直に言うところ奇妙に感じるが、ここでは俺が外国人なのだから見慣れるしかない。

イギリスでもユニフォームが制定されている学校は少なくないが、大抵は私服登校も可能だ。制服の強要となると、全寮制のパブリックスクール——一流大学進学を前提とした富裕層の子弟が通う学校だ——を連想してしまう。しかしこの生徒達の様子ときたらまるで規律というものが感じられない。もちろん、俺としてもパブリックスクールのような規律など願い下げなのだが。

「ユーリは三学期の終わりまで我が校に留学する。一時間目は数学、私の授業だ。じゃあユーリ、授業に少し食い込んでも構わないから好きなだけ自己紹介してくれ」

低くて、どこか眠そうな声が聞こえてきた。中年太りの男性教師——たしか大沢先生だったな——の声だ。あまりにも気配が希薄なので、そこにいることを忘れていた。そういえば、俺は彼に連れられて職員室からこの教室まで移動してきたんだった。

大沢先生からの指示がそれで終わりだとは思っていなかった。続く言葉を待つ俺は先生に視線を向けた。皺の寄ったジャケットと同色のスラックス。薄くなった頭髮は乱れており眼鏡もどこか曇っている。全身のどこにもまるで覇気というものがない。

「……………」

彼は教師用デスクの椅子に座ったまま、動こうとしない。もう話が終わったということか。わかりづらいぜ、全く。

俺は生徒たちの方に向き直り、当たり前障りのない自己紹介をした。イギリスで義務教育を終えた後、学校に行かず働いていたこと。ところがアルバイト先の社長の好意により、日本語が上手い俺を日本の高校に留学させてくれたこと。事前に《監視機構》が用意してくれた偽情報は、一応は細部にわたって設定されている。だが俺はわざと細部をぼかし、情報を小出しにした。

あまり深く突っ込まれたらばろが出そうだ。俺は所々つかえて、少しは日本人がガイジンに対して持つイメージに沿うように喋った。あまり鋭い質問には「ニホンゴ、ヨクワカリマセーン」で逃げる魂胆なのだ。

一通り説明したら言うことが無くなったので、身長と体重を口にした。

「身長、百七十五センチ、体重、ええと、約六十キロです」

もういいかな。そろそろ席に着こう——と思った矢先、一番前に座っている男子生徒が手を挙げた。いかにもレンズの分厚そうな眼鏡をかけ、髪を七三に分けた背の低い生徒だ。何のつもりか詮索する暇も与えず、彼は俺に質問してきた。

「質問です。イギリスって、今ではセンチやキロの単位を使っているんですか」

おいおい、名乗らずに質問かよ。日本人って意外と礼儀知らずなんだな。ま、こいつの名前なんて興味ないが。

「以前EU加盟国においてヤード・ポンド法の撤廃が決定されたけど、撤回されたんだ。今も大人たちは古い単位を使っている。牛乳やビールはポイントで売られているし、道路の距離表示はマイルだけで、キロの併記もない」

眼鏡くん、なんだか大袈裟にうなずいている。決め付けるのはまだ早いけど、この見るからに人畜無害そうな眼鏡くんがナジヤだなん

て想像する気にもなれない。

眼鏡くんに興味を失った俺は、彼から目を離して言葉を続けた。

「大人たちは“フランス発祥の単位なんて使ってられるか”とでも思ってるんだろうね、きっと」

お。首を縦に振るヤツと笑い出したヤツが半々くらいいる。こんな話が受けるとは。

「俺は日本にいた間はメートル法に慣れようと思っています」

今度は拍手。それも全員同時にだ。悪い気はしない。日本人は閉鎖的だとか感情の表現が下手だとか聞いていたが、少なくともこいつらはそんなことなさそうだ。少しほっとしたぜ。

しかしこの連中、実はちゃんと規律がとれているんじゃないのか。「先生、もう席についてもいいですか」

俺の発言を受け、えーっ、と露骨に不満そうな声を上げる女子もいたが、聞こえないふりをした。何人かの生徒の視線がのろのろと大沢先生に向けられる。そう、まるで初めて気付いたかのように。

こういうの、日本語で何と言ったっけ。……そうそう、『影が薄い』だ。

「なんだ、もう終わりか。二十分はかたいたと思っていたのに。ユーリの席はあそこな。窓側の、一番後ろ」

大沢先生は露骨にあくびをかみ殺し、面倒臭そうに指さした。なるほど、その場所に空席がある。

俺が席に着くのを待たず、先生は全員に向けて声をかけた。相変わらず、覇気のない声だ。

「各自、ユーリに質問があれば休み時間にな。では授業を始める」

大沢先生は大儀そうに立ち上がると教師用デスクから教卓へと移動した。対する生徒たちはと言えば、途端に教科書を立てて壁を作り、机上に突っ伏して寝てしまう男子が数名。堂々と耳にイヤホンをつっ込み、音楽プレーヤーを操作し出す女子もちらほら。なんてこった。携帯メールをしてるヤツらもいる。無法地帯か。

教科書に隠れているヤツなんてまだマシだ。生徒の大半は堂々と

他事をしている。どれもこれも、教壇から丸見えじゃないか。

ところが大沢先生は全く注意しようとせず、独り言のようにえんえんと喋り続ける。時折黒板に板書したりはするのだが……。これって本当に数学の授業なのか。日本の文化というヤツは不可解だぜ、全く。

日本にはかつての”教育王国”の名残、名門校が多数あると聞く。もともと、この名細亜学園はお世辞にも名門校とは言えない。それにしてもこの有様は――

――さてよ。ああそうか、なるほど。

生徒たちの様子に規律が感じられないのは、大沢先生のこういう態度にも原因の一端があるってわけか。事実、大沢先生の授業には生徒たちを参加させようとする意図が微塵も感じられない。だからと言って、積極的に授業に参加しようとする生徒が一人もいないというのも不思議な光景だ。日本の高校は義務教育ではない。試験を受けてまで進学した者が集まっているはずなのに。

まあいいや、俺には関係のないことだ。俺は勉強するために留学しに来たわけではない。こっちの方が好都合ってものだ。

* * * * *

あの日、リユーフィンはどうとう目を覚まさなかった。

「少年。いや、ユーリ。この幻妖を、わしに預けなさい」
唐突だなオイ。

「どういコトだ。《監視機構》はリユーフィンに感染したウィルスの正体を掴んでいて、治療ができるとでも言うのか」

結城老人はアルカイックスマイルを浮かべ、顎の下に伸びる白髭の先端を指でつまんだ。

「ほっほっほ。それはわからん」

「……………」

ええと。聞き間違いかな、今の。

「聞き間違いではないぞ。今はまだ治療法がわからん」

こめかみあたりの皮膚がぴくりと動くのを自覚した。

俺が何かを言う前に、結城老人が言葉を続けた。

「もつとも、全く情報を掴んでおらぬという訳ではない。少なくとも、症状の悪化を止めることはできる。しかし――」

結城老人が沈黙する。なんだか、あまり続きを聞きたくなかった。だが、俺は嫌々先を促した。

「しかし、何だよ」

「この状態の幻妖を現実世界に連れ出せば、命に関わる」
「やっぱりね。」

「そこで、暇を持て余しているこのわしが、お主の大事な相棒の面倒を見て進ぜよう。そのかわり」

あー、聞きたくねえ。

「ユーリ。お主には幻妖抜きで任務をこなしてもらいたい」

任務

大沢先生の授業は淡々と進む。

きちんと勉強している連中もいるが、彼らでさえ大半は授業を聞かずに問題集を解いている。真面目に先生に顔を向け、話を聞いているのはほんの一握り。もっとも、数学の授業なのに教師が喋りっ放しというのもどうかとは思うが。

他ごとをしているヤツの中には、まだ一時間目だというのに早弁つわものしている強者もいる。

席が一番後ろだと、全部観察できて面白い。見えるのは後頭部ばかりで顔まではわからないのが難点だ。

男子の髪型はあまりバリエーションがないが、女子はストレートロングやショートボブ、ツインテールなど個性豊かだ。ただ、せっかくの綺麗な黒髪を明るい色に染めている子が何人かいる。日本には“勿体ない”という言葉があるが、それはこういう時に使うべき言葉だと思った。とは言え、俺みたいなハーフだったり、生まれつきもしくは何らかの原因で後天的に色素が薄い日本人だっているだろうから、髪の色については文句を言うまい。

——そんなことより。

俺は自然と表情が引き締まるのを自覚する。

この中にナジアがいる。このクラスにいるとは限らないが、学校のどこかに必ずいる。しかも複数だ。

クラスの連中をぼんやりと観察しながら、俺はふたたび結城老人の言葉を思い出した。彼はこう言ったのだ。

「今回はお主がナジア・ハンターとなるのじゃ、ユーリ」

* * * * *

イギリスでは、アンドロイドもと数回戦った。

異世界の連中は現実世界側にいるナジアの居場所を特定する方法を持っているらしい。しかし敵の数はごく少ないらしく、襲撃はまばらだった。毎回、連中のナジールに引き摺り込まれ、同時に否応なく戦闘開始となる。

襲撃者はいつも同じ出で立ち。ポニーテールと顔の右半分を隠す仮面。見えている方の顔面にはペイントが施されている。ジーンズを穿き、ケープを纏って武器を振り上げる。大鎌だったり、剣だったり、ヌンチャクだったり。武器だけは個性的だった。

そう、最後に戦った奴の得物はヌンチャクだった。

「どわあっ！」

仰け反った俺の鼻先を、重そうな鉄の塊がうなりを上げて通過した。

鎖の音が響いたかと思った瞬間には、アンドロイドは空振りに終わった鉄の塊を脇に挟んでいる。

「が……はっ」

ヌンチャクに氣をとられていた俺の腹に、アンドロイドの蹴りが決まった。

そう気付いた瞬間には、俺は身体をくの字に折り曲げて床に倒れていた。

「いてえじゃねえか」

立ち上がった俺を見て、アンドロイドは眼を見開いた。

「貴様、本当に人間か。私の蹴りをまともに受けて立ち上がれるとは。生体反応を見る限り、貴様がアンドロイドである確率は六パーセント未満に過ぎないが……」

こいつ、何を言っているやがる。

「一緒にするな。お前の蹴りが弱かったただけじゃねえか」

俺の頭上に浮遊していたリューフィンが会話に割り込む。

「こらユーリ！ 加速はどうした、加速はっ」

叫びつつも、リユーフィンは充分な高度を保っていた。アンドロイドが又ンチャクを華麗に振り回しているので、近付けないのだ。「加速が思い通りにできるなら、俺はいつもこんなに手間取ったりしないぜ」

アンドロイドの剥き出しの顔面が紅潮した。

「なめるな！　くらえ」

どうやらリユーフィンに答えた俺の言葉に激昂したようだ。ちゃんと感情があるってことは、アンドロイドって奴はロボットとは違うのだろう。

又ンチャクによる初撃を避けたら蹴りが来る。

「ぐあつ」

予想外の衝撃。俺はきつく目を閉じた。瞼の裏で星が瞬く。蹴りに対処すべく身構えた俺の顔面に、アンドロイドの裏拳がヒツトしたのだ。

調子が悪い。ナジール内での戦闘中に全く加速状態にならないのは、この時が初めての経験だった。

口の中に鉄の味が広がる。くそ。赤色に染まった唾を吐き、俺はアンドロイドを睨み付けた。

当のアンドロイドは、自分の拳を不審そうに見つめている。

「歯の一本も折れんとは。出力九十二パーセント以上をキープしているというのに」

二発、三発と、奴の拳が俺の顔面を捉えた。又ンチャクによる打撃も一発受けてしまった。

「やはり、貴様ほど戦える現実世界側のナジアは脅威だ。今のうちに潰しておかねば」

頭の中で、何かが切れる音が聞こえたような気がした。俺はサンドバッグじゃないぞ。

「上等だゴラア」

左右の拳を連続で繰り出す。そこまでは意識して攻撃した。その後は、何がどうなったのかよく覚えていない。

やがて、ナジールを静寂が支配する。

気付いたときには、アンドロイドは床に倒れていた。例の如く、口からオイルを吐き出して。

「す、すげえぞユーリ。俺抜きで、加速もせずに勝ちやがった……」
まるで実感の湧かないまま、俺はリューフィンが呟くのを聞き流した。

顔中が火照ってひりひりする。さすがに、パンチをもらい過ぎた。

* * * * *

「幻夢の過激派どもは、この現実世界への移住を狙っておる」
へえ、そう。

「なんじゃ、反応薄いのが。まあよい。しかし、連中が侵略するには大きな壁がある。わしらは、互いに相手の世界では生きられないのじゃ。ちようど、えら呼吸の魚が陸上では生きられないように」

その話はイギリスで《監視機構》のスタッフから聞いた。俺は無言で肩をすくめ、結城老人に先を促す。

「過激派の絶対数は、話にならんほど少ない。そのかわり、自律行動可能なアンドロイド製造技術をはじめ、我々現実世界の人類よりも進んだ科学力を誇る。しかしそんなアンドロイドたちでさえ、現実世界では行動不能となってしまう」

「例外として、両世界で行動可能な生物がいる。リューフィンたち“幻妖”だ。しかし幻妖たちは穏健派で、異世界への侵略を良しとせず、俺たちに協力してくれている——だから、そこまでは聞いているってば」

結城老人の膝の上で目を閉じたままのリューフィンを見ながら、俺が先回りして言ってる。すると結城老人は口をへの字に曲げ、不満を表明した。

「敬老の精神というものがないのか。全く、若い奴はせっかちでい

かん」

への字形をした口がすぐに笑みの形に切り替わる。

「ユーリのそういうところ、わしの若い頃そっくりじゃ」

「別に嬉しかねえよ」

俺は両手を横に広げた。どうにも扱いづらい爺さんだ。勘弁して欲しいぜ、全く。

「ここからが本題じゃ」

声のトーンが低く、真剣なものに変わる。いや、だから本題から話してくればよかったんだけど。

「名細亜学園に、普通の人間をナジア化してしまうウィルスがばら撒かれた。ハンターのアンドロイドが一体、自分の身体を犠牲にして現実世界に飛び込んできたのじゃ」

「ナジア化？　どういうことだ、爺さん。今まで連中は、俺のようなナジアを目の敵にしてたぞ」

結城老人はひとつうなずき、俺を正面に見据えて告げた。

「それはお主が現実世界属性のナジアだからだ。連中のウィルスに感染した者は幻夢世界属性のナジアとなる」

うあ。嫌な雲行きだぜ。

俺は今まで、“ナジア・ガード”の肩書きをもらいながらも現実世界側では俺以外のナジアと会ったことがない。ただ降りかかる火の粉を払っていただけだ。

日本に来た時点では、ガードとしての初仕事にテンションが上がっていたことは認める。だが、俺だって分をわきまえている。自分にできる仕事の範囲には限界がある。

「まさか……」

名細亜学園の生徒全員をガードしろってんじゃないだろうな。

「今回のお主の任務はガードではない」

俺の胸中での呟きを見透かしたかのように結城老人が告げる。

「今回はお主がナジア・ハンターとなるのじゃ、ユーリ」

初日

ねえ、という甘い声に耳をくすぐられた。悪い気はしないのだが、回想を中断させられるのはあまり愉快的気分ではない。

「ユーリってひとりで日本に来たの？」

休み時間が来るたび、俺の机の周りには人だかりができた。どちらかというと女子が多めだ。

仕方がない。自己紹介でぼかした部分をもう少しだけ話しておくか。

俺は《監視機構》が用意した設定に基づき、わざとたどたどしい日本語で説明した。要約すれば、俺の遠縁の親戚が日本人であり、その人の家で世話になっているという内容だ。

俺の答えに満足すると、クラスメイトたちは矢継ぎ早に別の質問を浴びせてくる。質問内容は他愛のないものばかりだったが、あまり嘘を重ねればぼろが出る。俺はわざと日本語に詰まり、ゆっくりと答えることで時間稼ぎをして、質問数を減らす作戦を貫いた。

「ゴメン。まだ、長い日本語は苦手」

幸い、相手の日本語をうまく聞き取れない演技は楽にできた。質問を聞き流して回想を続けていれば良いのだから。

* * * * *

結城老人のナジールの中で、俺は老人を信用すべきかどうか迷っていた。

世界の乗っ取りを目論むほどの連中が相手にするには、俺は平凡な少年に過ぎない。ヌンチャクを操るアンドロイドはああ言ったが、連中にとって本当に脅威になり得ると自惚れるには、俺はいささか非力だ。せいぜい、連中の尖兵どもを食い止めるのが俺の役目だと思っっている。

加えて、幻夢世界の連中は数が少ないのだ。俺ごときに搦め手を使っている余裕があるとは考えにくい。

しかし、リユーフィンをここに置いていくということは、俺にとって人質をとられるのと同義だ。結城老人が敵であれば、の話だが俺は深呼吸し、眼を細めた。

「俺に現実世界の人間を狩れってのか。あんたが敵でないという保証はあるのか、爺さん」

「おおっと。剣呑、剣呑」

結城老人のおどけた言い方が癪に障る。

睨み付ける俺の視線を正面から受け止めると、結城老人は表情を引き締めて静かに言った。

「残念ながら証拠はない。お主がここから出た後で確認してくれとしか言いようがない。ナジールを解くわけにいかない以上、わしは直接《監視機構》と連絡を取れないからのう。しかし、わしを疑ってお主がこの幻妖リユーフィンを現実世界に連れ出せば、こやつは程なく死に至るじやろう」

そう言ってリユーフィんに視線を落とす結城老人からは、敵意の欠片も感じられなかった。

「しかも、今回は場所が場所。それなりの年格好のエージェントでなければ潜入できん。《監視機構》としても十代のエージェントはそう多くない。お主同様、世界中からかき集めるしかなかったというわけじゃ」

たしかに、爺さんの歳では用務員として学園に潜り込むにも無理がある。おや、今「世界中からかき集める」とか言わなかったか。

「ああ、言った。幻夢の過激派ども、どうやらこの日本に限られた戦力を集めておるようだな。どういうわけか、国内いくつかの中学や高校近辺で同時多発的にアンドロイドどもの目撃および交戦の報告が上がってきておる。そこで、《監視機構》日本支部としては世界中の支部に依頼したのじゃ。十代もしくは十代に見える、戦闘能力を備えたエージェントの派遣をな」

「ふーん」

だが、戦闘能力と言われても俺には殴り合うしか能がない。相手が格闘技をかじっていて、しかもこちらは前回同様加速がきかないという状況に陥れば、俺がKOされる可能性の方が高い。

「聞いておるぞ、ユーリ。お主は拳打でアンドロイドを倒すほどのファイターだと。しかも、アンドロイドのパンチに耐えたと言うではないか」

「たまたまだろ。アンドロイドだって体調が悪い時があるんじゃないか」

「ほ」

感心したような、それでいて呆れたような響き。結城老人は、ただ一音にそれだけのニュアンスを含めてみせた。

「アンドロイドに体調などあるものか。……まあいいじやろ。そんなことより、まずは調査じや」

「調査ねえ。……にしても、もう少し情報はないのかよ。ナジア化した生徒の人数とか性別とか、さ」

結城老人は即座にかぶりを振った。

「勘弁してくれ。全校生徒を調べろってのか。九百人以上いるぞ」

「生徒にしか感染しないとは限らん。職員を入れたらほぼ千人じや。ただ、お主が飛行機に乗っておる間に少しは判明したことがある」

少しは、の部分を強調する結城老人に、俺は「何だよ」と投げ遣りに先を促した。

「ここの他に過激派の目撃および交戦情報があった学校は五校。いずれもアンドロイドが現実世界に飛び込んできて、ウィルスをばらまいて消滅した」

……なんだそりや。わかっているのはそんなことかよ。突っ込みを入れようとした途端、続きをしゃべり出す。間が長いんだよ、爺さん。

「ウィルスは誰にでも感染するというわけではなさそうなのじや。どうやら今のところ、ウィルスナジアと断定されたのはいずれも内

向的な性格の学生たち」

「で、感染者はどうなるんだ。そいつらは、俺のようなナジアを見分けることが出来て、突然性格が変わって襲ってくるのか言っんじやないだろっな」

「うーん。わからん」

俺はがつくりと肩を落としたりした。

「何もかも一から調査するしかないのじゃ。じゃが、ウィルスがばらまかれた地域を調査していた幻妖は、みなリユーフインのような症状に苦しんでおるといふ。過激派どもにはそれなりの目的と用意があると見なければならん」

向こうが人手不足ならこちらも人手不足、か。俺しかないのならしょうがねえな。

「……っしゃ！」

左の掌に右の拳を打ち込んだ時、結城老人が言葉を続けた。

「それで、だ」

「まだ続きがあんのかよ」

精一杯刺々しく返事したつもりだが、結城老人は全く頓着せずに告げた。

「お主は遠縁にあたる日本人の家で世話になつとるといふ設定じゃつたな」

結城老人の言葉に含まれる親しげな響きが気になる。

「な、なんだよ。それがどうかしたか」

「わしじゃよ」

「……は？」

「だから、その遠縁というのが、このわしという設定なのじゃ」

考えてみれば当然か。《監視機構》がどれほどの組織かよく知らないし教えてもらえないが、俺の留学にあたり、受け入れ先を架空の人物にするよりも実在の人物にした方が楽なことは間違いない。「だから何だよ。感謝でもしてほしいのか」

「逆じゃ。日本支部の仕事を押し付けているのはこちらじゃからな」

リユーフィンがこの様子ではいろいろ不便じゃろう。せめてお主にはアシスタントを付けようと思うてな」

それはありがたい。正直、何から手をつけるべきか考えあぐねていたところだ。

「結城リカ。わしの孫娘じゃ。学年はお主と違ってまだ一年生じゃが、放課後などは極力お主のサポートをするよう言いつけてある」

「爺さん、孫娘を事件に巻き込むつもりかよ。で、そいつはナジアなのか。戦闘能力は」

「ふむ。……ない。普通の人間じゃ」
殴る。

「ははは、待て待て。孫娘には、おもにお主の生活面のサポートを言いつけてある。掃除・洗濯・炊事など。お主は雑事を気にせず、存分に調査してくればよい」

「雑事って、爺さん。それって孫——リカって娘を毎晩自宅まで送れってことじゃねえか」

「必要ない」

「は？　いくら日本の治安がよいと言ってもここ最近は何騒なんだろう」

「問題ない。お主と同居するのじゃから」

「……………」

じじいの思考回路はわからん。

「爺さんがよくても親御さんはどうなんだ。年頃の娘を——」

「おらぬよ。わしとふたり暮らしじゃからな。わしらは家族ぐるみで《監視機構》のスタッフじゃった。じゃが、息子夫婦は過激派どもに敗れ、いずれも帰らぬ人となってしまったのじゃ」

淡々と話す結城老人からは、感情の色を読みとることができない。

「そうだったのか。そのことを、リカは」

「承知しておる。……ああ、それより」

俺は腕組みをし、黙って結城老人の言葉を待った。

「それ相応の覚悟があるなら、孫に手を出しても構わんよ。もっと

も、お主にも好みというものがあるじゃろうがな」

どこまで本気なんだか。……知るか、くそじじい。

「恋人とかつて、いるの」

「こいびと？ ラバー、ね。いたけど、別れた」

えー、どうしてー、などと語尾を延ばして聞いてくる。放つとい
てくれ。

「こらこら君たち。初日から人のプライバシーに踏み込むものじゃ
ないよ。ユーリが困っているじゃないか」

俺を取り囲むクラスメイトのうち数少ない男子の中から変なのが
出てきた。七三に分けた髪、黒縁で分厚いレンズの眼鏡。背が低く
痩せているが、過剰なまでの自信をアピールするかのように胸を反
らせている。さっき俺に質問した眼鏡くん^{はうだまやさす}だ。

「やあ、よろしくユーリ。学級委員の原田正康だ。大した力になれ
ないかも知れないが、困ったときはいつでも相談に来てくれたまえ」
そう言つて眼鏡を光らせた彼は、こちらの返答も待たずに歩き去
る。

あつけにとられて見送っていると、くすくす笑いながら女子のひ
とりが言つた。

「いいのいいの、ユーリは気にしなくても。ああやって言いたいこ
とを言えば満足して立ち去るのよ。彼、いつもあんな調子だから」

「……少し変わっているけれども、頼りになりそうな人デスネ」

「さあ。彼、勉強は出来るけど、それ以外は特に目立たないからよ
くわかんない」

俺はその声を聞き流しながら、別の生徒が教室から出て行くのを
目の端で追つた。

肩までの長さの髪、膝を隠すスカート丈の女子。これまでの休み
時間、誰と言葉を交わすでもなく黙ってじつと座っていた。時折こ

ちらをちらちらと盗み見ていたようなのだが、気のせいだろうか。

ウイルスナジアは内向的な学生——要チエックだな。次の授業が終われば、少し時間の長い昼休みだ。なおもあれこれと話しかけてくる女の子たちの話を聞き流し、俺は次の授業後に取り巻き連中の包囲網を突破する算段を考え始めた。

殺気

昼休みが近付いてきたが、目を付けた女子はあれつきり教室に戻ってこなかった。俺は右隣に座る男子に声をかけた。彼は多数の女子達に混じり、休み時間ごとに俺に質問をぶつけてきた数少ない男子のうちの一人だ。

「ユウジ、あの席って空席だったっけ」

ユウジが口を開くより早く、女の声が俺の質問に答えた。耳に心地よい、落ち着いたアルトだ。

「空席なのは田嶋真由美たじまゆみさんの席ね。早退したみたいよ」

声の主は俺のすぐ前の席に座っていた。そちらを向くと、吊り目がちで無表情な女子と目が合った。ツインテールの髪が揺れている。「ああ、たしかに彼女あまり目立たないけどね」

ユウジが苦笑混じりに付け加えた。俺はツインテールさんに名前を聞こうと思った。

「そう。えっと……」

言葉に詰まった。演技ではなく、相手に名前を聞く場合の適当な日本語表現が頭に浮かんでこない。だが彼女は俺の意図を察し、すぐに答えてくれた。

「兵藤ひょうとうさつき。よろしく」

どうやら彼女は無愛想というわけではないらしい。そこそこ整った顔立ちなのだが、吊り目がちで表情が乏しいことが災いし、見る者にお高くとまった印象を与えてしまうようだ。

「よろしく、さつき」

目だけで返事を寄越す彼女の様子からは、内向的な印象は感じられない。日本で流行りの“ツンデレ”とかいう種類の人物でもなさそうだ。それはさておき、取り巻き連中と同様、ウィルスナジアのリストから外しても良さそうだ。

教室の最後尾に座り、ここまでこのクラスを観察してきたところ、

誰とも話していなさそうな女子は田嶋真由美の他に一人だけだ。一方、寡黙な男子は、見た目不良っぽい生徒一名を含め三人か四人ほど見受けられる。もちろん、その連中が全員内向的な性格だと決まったわけではないが。

今日は田嶋真由美への接触を断念せざるを得ないが、このクラスに限れば思ったよりリストを絞り込めそうだ。この学校は各学年八クラスなので、仮にウイルスナジアリストをクラスあたり六人程度に絞り込めた場合、対象者はざっと百五十人となる。まだまだ多いが、九百人だの千人だのと数の多さにうんざりとしていた夏休みに比べれば随分気が楽だ。今のところ他学年どこるか他クラスの調査方法さえ思いつかないが、初日の収穫としてはまあまあだと言える。できれば、内向的な奴がひとりもないクラスがたくさんあれば嬉しいのだが。

昼休み、俺はトイレを理由にさっさと教室を飛び出した。そのまま教室へ戻らず階段付近をうろついていたら、階下から見知った顔が近付いてきた。

「ユーリ！ お弁当よ」

その高い声に、周りの生徒たちが驚いたように俺と彼女を見比べるが、彼女はまるで気にしていない。やがて階段を上がりきると、彼女は俺の正面に立ち、両手に持った弁当の包みの片方を押し付けてきた。

背は俺の肩までしかなく細身だが、肩胛骨を隠すストレートロングの持ち主だ。その漆黑でさらさらした髪は人目を引く。小ぶりな顔立ちはお人形さんのように可愛らしくておそらく日本人受けするのだろうか、俺とひとつしか違わないのが信じられないほどのあどけなさだ。彼女には悪いが、俺の新しいクラスメイトたちと比べると、その外見はどうにも幼いという印象をぬぐいきれない。

ふと気付くと、彼女は眼を細めてこちらを睨み付けていた。

「今……。なんか失礼な想像してたでしょ、ユーリ」

なかなか鋭い。さすがは結城老人の孫だ。

「いや、リカの制服姿も似合うと思ってさ。……それより、ありがとうリカ。弁当作ってもらった上に持ってきてもらっちゃまって」
途端に笑顔をはじけさせるリカ。結城老人と比べて、何と扱いやすいことか。

「もう、何言ってるのよユーリ。今朝も見——」

「だーっ！ そうだリカ、弁当、屋上で食べようぜ」

前言撤回、扱いづらいわ。無防備すぎるぞこいつ。周囲の連中に知られたら厄介だろうが。……俺たちが同じ家に住んでいるなんてこと。

「残念だけど、屋上は閉鎖されてて一般生徒は立ち入りできないの。この学校、食堂があるけど、外がいいのなら校庭に行きましょう」

言い終えるが早いかもと来た階段をさつさと下り始めるリカ。不覚にも、その背に揺れる艶やかな黒髪に見とれていると、ひそひそ声が聞こえてきた。

「ねえ、あの二人どういう関係かしら。ちょっと聞いてみてよ」

「えー。あたしいやだー。自分で聞きなよ」

まずいな。黙っていて、あとで勘繰られるのも嬉しくない話だ。

何とか誤魔化すか。

そう思っただひそひそ声の方を振り向くと、その場にいた女子生徒たちはさつとそっぽを向いた。

「……やれやれ」

俺は彼女たちの相手をするのをやめ、リカの後を追った。

しかし、踊り場まで降りたところで、俺は立ち止まった。降りてきたばかりの階段の上を振り仰ぐ。

「なにやってんの、ユーリ」

立ち止まった俺を訝しみ、リカが声をかけてきた。

「なんか、視線を感じただけだ」

俺の言葉を受け、リカも階段の上に目を懲らす。

「誰もいないわよ。……自意識過剰なんじゃないの」

視線なんてもんじゃない。アンドロイドに襲われるときと比べれば大したことはないが、どちらかというと殺気に近いものだった。

殺気……か。なんだか、何か忘れているような気がする。

「ねえユーリっ。もう。ユーリ先輩ったら。のんびりしてるとお昼休みすぐに終わっちゃうよ」

「うげ。なんだその先輩って」

耳慣れない呼ばれ方について過剰に反応すると、リカは小さく舌を出し、後頭部を掻いていた。

「あたしだって照れるわよ、普段と違う呼び方すると。でも学校の中だと、下級生が上級生を呼び捨てにすると不快に思う先輩方がたくさんいらっしやるのよ。うっかり忘れてたわ」

「勘弁してくれ。……俺が気にしないんだからいいじゃねえか」

「“郷に入れば郷に従え”と言うでしょ。なんか英語にもそういう感じの慣用句があったと思うけど」

「あるぜ。“ローマにいる時はローマ人のように振る舞え”ってのが」

どうやら、俺は耳慣れない呼ばれ方を受け入れるしかなさそうだ。

校庭の一部には芝生があり、植樹された木々や建物がいい感じに日陰を作っている。そのため、それなりに多くの生徒が弁当を広げていた。

芝生の隅っこにスペースを見つけた俺たちは、そこで弁当を食べた。なかなか快適だ。——時折盗み見る生徒達の視線を気にしなければ。

「気になるなら声をかければいいじゃないか」

「まあまあ、ユーリ先輩。日本人は人見知りが多いのよ」

リカはひらひらと手を振って俺をなだめた。

「そんなことより、ビッグニュースよ」

「なんだよ」

「リユーフィンがね、起きたの」

ちよつと待て。こいつ、ナジアじゃないはずだ。結城老人に食事を届けるのは俺の役目だったはずだし、昨夜もリユーフィンは目を閉じたままだった。

「……どういうことだ」

「あ、言つてなかったっけ。ナジアじゃない人の中には、ナジールに入れる人とそうでない人がいるの。あたしは入れる。少なくとも、おじいちゃんのナジールには」

リカが言うには、結城老人がナジールの中から呼び掛けてきた場合、十何回に一回の割合で気付くことがあるという。そういう場合は、リカは結城老人のナジールに入り込めるのだと言う。

今日からの学校への登校に先立ち、俺が先に登校してから時間差をおいてリカが登校する取り決めになっていたのだが、今朝俺が登校した後に結城老人が呼び掛けてきたらしい。

「でもね。寝起きの人が機嫌が悪いことってよくあるじゃない。リユーフィン、そんな感じだったよ」

「それなら問題ない。あいつのデフォルトだ」

なんにせよリユーフィンに会えるのなら文句はない。というか、勝手に長いこと惰眠を貪ったりリユーフィンには文句を言つてやる。

「それでね——」

リカの声が遠くなる。これは殺気。そして——

「耳鳴り……!」

まさか、これほどまでに人目に付くこの場所で。ウィルスナジアめ、向こうから接触とは手間が省けるが、いったい何を考えているがる。

敵意

視界いっぱい広がる緑色。俺は芝生に両手をつき、ほぼ四つん這いになっていた。

なんなんだ、この強烈な気配は。今までに出くわしたアンドロイドどもの比じゃない。

「耳鳴りだなんて、大丈夫？　とりあえず、保健室に行こう。歩けそう？」

遠のいていたはずのリカの声が耳許で聞こえた。動けず、呼吸が浅くなっていた俺の背を、リカがかいがいしくさすってくれているのだ。

耳鳴りは小さくなり、殺気も消えた。ひとつ深呼吸し、片膝をついて上体を起こす。

「……ありがとう、大丈夫だ。それよりリカ、あのへんが気になる。あの建物は何だ？」

リカはさすっていた手を止め、俺が指差す方を見ながら答えた。

「図書館よ。それがどうかしたの」

あの建物——図書館の裏側に、耳鳴りの原因がある。殺気が消えたとはいえ、いまだに気配が感じられるのだ。

「行くぞ」

「あ、ちょっと」

悪いとは思いつつ空になった弁当箱の片付けをリカに押し付けて、俺はさっさと歩き出した。

図書館の裏は日陰となっていて、この季節の割には涼しかった。

「こんな涼しい場所があるのに、ここで弁当食う奴はいないんだな」
小走りについてきたリカは俺の呟きにはすぐに答えず、まず不満を表明した。

「もう、ユーリったら足が速いんだからっ……」

不満のせいか“先輩”を付けるのを忘れている。

「この場所はね、詳しくは知らないんだけど、あたしたちが入学する前に自殺未遂だかなんだか、とにかく事件があったらしいの。だから、普段からあまり人が寄りつかないのよ」

「ふーん。じゃ、あいつは例外ってわけか」

俺の視線の先に、小柄な少年が倒れていた。鼻と口の端から糸のように細い赤色が覗いている。意識はあるようだ——目が合った。半身を起こした彼の首元から、ネクタイが地面に垂れた。

「あの人が着てるの、うちの制服じゃないよ。……やだ、怪我してるじゃない」

少年の存在に気付いたリカが駆け寄ろうとするのを、俺は手を広げて制止した。

「待て。俺が行く。リカは何かあった時に爺さんに連絡してくれ。いや、今すぐこの場を離れろ」

リカが息を呑む気配が伝わってきた。

「ナジアだって言うの！？でも、あたしからはおじいちゃんに連絡できないのよ」

少年は目を大きく見開き、すぐに細めてこちらを睨みつけてきた。どうやらリカが“ナジア”と言ったことに反応したようだ。

「だから、何かあったらって言うてる」

言い捨てて歩き出そうとしたが、できなかった。リカに腕を掴まれたのだ。

「ユーリ、震えてる」

邪魔するな——と言う間も与えず、リカがかぶせてきた。

「相手の力量が未知数な場合は、逃げる決断も必要だって」

「それ、お前の言葉か」

「違うよ。おじいちゃんが言ってた」

少年が立ち上がった。口元の血を拭い、絞り出すような声で告げてくる。

「……ようやくここまで調べ上げたんだ、邪魔されてたまるか」

どうやら、中国訛りの英語だ。彼はこちらへ一歩踏み出し、両手を腰の位置で握り締めて齒を剥いた。

「お前ら過激派の思い通りになんかさせるかよ」

この一言で確信を持った。こいつは仲間だ。

「やつぱり。あんたも《監視機構》の——」

「寄るな」

鋭い制止に息を呑んだ。声に驚いたのではない。彼は、右手に武器を握り締めていたのだ——黒光りする拳銃を。

「おい、落ち着けよ。同士討ちしてる場合じゃないって」

「黙れ。僕は落ち着いている」

俺は両手を頭の後ろで組み、リ力を背にかばった。イギリスでは拳銃なんて見たこともない。それをまさか日本で、しかも銃口を向けられるなんて思ってもみなかった。

「そ、それ本物かよ」

「試してみるか。もし貴様がアンドロイドだとしても、ただでは済まないぜ」

張りつめた空気を、日本語の高い声が弾く。

「サベイランス・オーガニゼーションって言ったでしょ。あたしたち仲間よ、撃たないで」

破裂音。

俺の右斜め前、距離にして一メートル程度の地面が抉れた。続いて襲ってきた暴力的な耳鳴りは、ナジールに引き込まれる瞬間のそれを上回っていたかも知れない。

「そうだな、あんたらが過激派なら、突然襲ってくるのが普通だろうな」

この言葉——

「お前、日本語しゃべれるんじゃないかっ！ わかってるなら、何故撃った」

リ力が俺の背にしがみつく。だが俺だって、銃が相手じゃ動けない。あからさまな敵意と銃口の組合せは、これまでに対峙したアン

ドロイドどもを上回る脅威だ。

そうだ、ナジールの中なら加速ができるかもしれない。一か八か、奴を俺のナジールに引きずり込むか。

いや、俺は今までアンドロイドどものナジールや結城老人のナジールに引きずり込まれたことはあっても、自分から誰かを引きずり込んだことがない。もし失敗して、少年とリカのふたりだけがこの場に取り残されたら……。

「くそ、その手は使えない」

俺の独り言を無視し、少年の銃口は俺の眉間を狙った。

「貴様が味方である可能性に賭けて任務に失敗するより、敵だと疑って任務を完遂することを選ぶ」

なかなか引き金を引かないのは迷っている証拠だと思いたい。引き金を引かれたら終わりだ。少年は賭けをしないと云うが、こちらは賭けるしかない。

「物騒なことを言うなよ。俺たちだって人手不足なんだぜ」
ふてぶてしく言い放つつもりだったが、不覚にも俺の声は震えてしまった。

「無能な人材なら頭数だけ揃えても足手纏いなだけだ」

口惜しいが、俺ときたら銃をつきつけられただけで動けないのだ。反論できず、齒を食いしばった。

「？」

少年は俺から目を離し、俺の背後を見て目を見開いた。

「伏せろ！」

その剣幕に、俺は何も考えずリ力を真横に押し倒した。

「ぐあっ」

痛え。くそ、頭を打った。

「無事か、リカ」

答がない。

「おいっ」

二、三度頭を振って目を開ける。リカを見ると、彼女は地面にペ

たと座り込み、両手を口に当てていた。

俺はリカの視線を追ってゆっくりと振り向いた。

「……………」

見た物をありのまま受け入れるのに、時間がかかった。

目を擦り、再び見る。間違いない、少年の足が地面から浮いている。

「なんの冗談だよ、こいつは」

大木の化け物が太い枝を腕のように伸ばし、少年の身体を掴み上げているのだ。

「ぐっ」

今や、俺にとってはお馴染みとなりつつある耳鳴りが再び襲ってきた。

「逃げる……」

その言葉を最後に、木の化け物ごと少年は消え去ってしまった。

その場に、俺とリカが取り残される。

「あれが、敵」

少年はナジルに引きずり込まれ、俺は取り残された。俺なんか眼中にないっていいのか。

——あんなのと戦えというのか。

ばさっ、という音が聞こえてきて、俺の耳鳴りは治まった。

視線を下げると、一冊の大学ノートが開いた状態で表紙を上にして落ちていた。拾い上げようとして、俺は手を引っ込めた。

表紙が赤く汚れている。あいつの血。

俺はいったん目を瞑り、拳を握った。

あいつ、「逃げる」と言った。俺を信用し、このノートを俺に託したんだ。

あるいは、銃を突きつけられて怖気づいた俺のことを、たとえば敵だろうと味方だろうと戦力外だと思ったただけなのかも知れないが、意気揚々と日本まで来たというのに、足手纏いのまま尻尾を巻いて逃げるなんて嫌だ。

「よし。あんたの調査、俺が引き継ぐ。そしてあんたを助けるぜ」

ノートを拾い上げ、裏返した瞬間、俺はうんざりと呟いた。

「……中国語かよ」

「あ」

リカの声が聞こえた。彼女の方を見ると、先ほどと同じ座り込んだ姿勢のまま地面を指さしている。その細い指が指す方向を目で追うと――

そこには、黒光りする拳銃が落ちていた。

報告

俺の耳元でリカが呟く。

「あ、もうおじいちゃんのナジールの中だ。本当に五秒かかんかったね」

リカが結城老人からの呼び掛けに応じてナジールに入る時は、いつも五分近くかかるとのことだった。今回、リカと一緒に行きたいと言うので連れて行くことにした。

だが、俺たちが一緒にナジールに入るには条件があることがわかった。

「いらっしやい。ほっほ。すっかり仲良くなっておるのう、しっかりと抱き合って」

結城老人が眼を細め、嬉しそうに話しかけてきた。その途端、頬を真っ赤に染めたリカが俺を突き飛ばす。

「どわっ」

尻餅をついた俺を見向きもせず、リカは結城老人に弁解した。

「ちちち違うの！　なんか、ユーリと一緒にならいつでもおじいちゃんのナジールに入れることがわかったんだけどね、そ、それにはその……」

それ以上言葉をつぐことができず、リカは俯いてしまう。

「ある程度以上ユーリと身体を密着させることが条件だということじゃな」

「わかっていたのか、爺さん」

「ふむ、わかっておった。とは言え、わしが知っておる他のナジアのケースから類推しただけじゃが。お前さんたちはチーム、仲良くなつて欲しいのじゃよ。もし仲良くなかったら、たとえ条件に気付いても抱き合うことをせず、その結果今夜もユーリがひとりであることになっておったじやろう。それを試すためにも今夜は同伴で来るよう、これに言いつけておいたのじゃ」

結城老人はリカの肩に手を置き、言葉を続けた。

「ちょうどこれも、今朝わしのナジールから出る前にもう一度リユーフィンに会いたいと言っておったしの。ほっほ」

言い終えると同時に、結城老人の肩から葉っぱが生えたかに見える。それはすぐに細長い全身を現し、結城老人の肩に座った。

「爺さん。同伴って言葉、響きがエロいぞ。それにしても、本当に自分と同程度の質量の人間を連れて来られるとはな。それだけユーリのナジール能力が強いつてことだ」

なんだこのふたり。すっかり意気投合してやがる。

「同程度ってなによ。あたしユーリの半分くらいだもん」

いや半分は言いすぎだろう、リカ。……まあいいや。

「教えてくれ。アンドロイドどもも爺さんも、ナジールの中から現実世界にいる俺を直接引きずり込んだよな。あれって俺にもできるのか」

「うむ。それはわしやアンドロイドどもの力というより、お前さんの力のなせるわざじゃ、ユーリ。平たくいえば、わしがナジールの存在をアピールすると、お前さんは耳鳴りという形で知覚することができ、正確にこの場所に飛び込むことができる」

これではつきりとした。あの中国人がさらわれたとき、俺はナジールの存在を知覚していた。その気になれば追うこともできたはずなのに、俺はそうしなかった。完全に怖じ気づいていたのだ。

「なに深刻な顔してやがる、ユーリ。まずは腹掬えさせてくれよ。持ってきてるんだろ、リカの弁当」

リユーフィンの言葉に、リカが答えた。

「うん。いっぱい食べてねー。はいおじいちゃん。はいリユーくん」

「リユーくん!？」

「そ、リユーくん」

声を裏返して聞き返すリユーフィンに、リカは満面の笑みで応じた。

今日一日の出来事を報告し終えた俺は、図書館の裏で拾ったノートと拳銃を結城老人に手渡した。

「ふーむ。《監視機構》が未確認のワームホールが出現しておる可能性がある」

「ワームホール？」

聞いたことのない単語だ。

「うむ。過激派の連中、何らかの方法で空間をねじ曲げ、その中国人エージェントが派遣された学校と名細亜学園との間を特殊な通路で繋いだ可能性がある。おそらく、ナジアだけが通ることのできる通路じゃろう」

そうか。それであいつ、他校の制服を着ていたのか。

だが今はそんなことよりも、拳銃の方が気になる。俺は結城老人に手渡した拳銃を指差して聞いた。結城老人に責任がある話ではあるまいが、つい詰問口調になってしまう。

「ところで、《監視機構》は未成年エージェントにこんなものまで支給するのかよ」

「場合による。そやつが未成年とも限らんしな。中国人も日本人同様、お主には若く見えるのじゃろう」

納得がいかない。

「でもあいつは、こんな物騒なもんが要するという認識があつたってことだろ。それに比べて、俺はなにも聞いてないぞ」

「いや、その中国人もお主と同様に事前情報などほとんど得ていないはずじゃ。普段から物騒な道具が必要な稼業に就いている可能性が高い」

もしそうだとすると、あの見た目だ。実年齢とのギャップを考慮に入れても、二十二歳より上だとは思えない。どんな職業だとしても下っ端のはずだ。

「《監視機構》に所属する人間が、一般的な職業の者ばかりとは限らん。傭兵、諜報員、さらにはマフィア。もつとも、滅多なことでは現役マフィアに《監視機構》の仕事依頼することはないがの。」

《監視機構》は各エージェントからの要請には最大限応じるが、さすがに日本の中学・高校への潜入調査という仕事で拳銃を支給することはあるまい」

結城老人の推測が正しいなら、あいつの尋常でない調査能力にも納得がいく。夏休みの間に授業のある学校にいたのかどうかは知らないが、あいつはこの数週間でかなりのことを調べ上げたに違いないのだ。

——俺とは違いすぎる。

「無能な人材なら頭数だけ揃えても足手纏いなだけだ」と言われたよ」

自虐的に呟く俺の肩に、結城老人が手を置いた。リカの時と違って両肩だ。正面に立つ結城老人を見て初めて気付いたが、日本人にしては大柄で、俺よりもほんの少し背が高い。

「わしらの目的は戦うことじゃない。極力戦いを避けることだ。圧倒的な力量の相手に無謀に立ち向かうことを勇気とは言わぬ。幸い、こちらにはノートもある。過激派どもが何を狙っておるのか突き止め、戦う必要のない状態に持ち込むことができれば我々の勝ちじゃ」

「爺さん……。あんた、まともなことも言うんだな」

茶化す俺に親しげな笑顔を向け、結城老人は声を立てて笑った。

ノートのページを捲り始めた結城老人のそばを離れ、リカの隣でいまだに弁当をついているリューフィンのところへと俺は歩いていった。

「お前、料理上手いな」

「ありがと、リューくん」

リューフィンの奴、新しい呼ばれ方を受け入れている。すっかり飼い慣らされたペットみたいだ。

「ユーリめ、こんなうまいメシを独り占めしていやがったのか」

そう呟くのと、俺がリューフィンの正面に到着するのが同時だった。

「ふざけんな。今朝までぐっすり寝ていたくせに」

「まあまあ、ユーリ先輩」

リカが割り込む。学校じゃないんだから先輩はやめてくれ……。

「ところでユーリ。その化け物——中国人をさらっていった奴のこ
と、詳しく聞かせてくれ」

詳しくと言われてもちらっと見たただけだ。あの中国人を掴み上げ
ているのを見た次の瞬間にはナジールへと消えてしまったのだ。正
直にそう告げたら、リユーフィンは「そうか」とだけ言っただけ黙り込
んでしまった。

「リユーくん？」

リカの呼びかけにも反応しない。考え事をしているようだ。

「そつとしておこう、リカ。爺さんのところに行こうぜ」

結城老人は難しい顔をしてページを捲っていた。集中している様
子だ。

「何かわかったのか、爺さん」

「うーん。わしは中国語は読めん」

「なんだと。紛らわしいポーズ見せてんじゃねえ、くそじじい」

結城老人は年齢の割には綺麗な白い歯を見せて笑う。

「じゃが、面白いぞ。何かのヒントになりそうな図が描かれたペー
ジもある。中国語はナジールを出てから調べれば訳せるからな」

「そうだ、リユーフィンは。あいつ、もうナジールから出ても大丈
夫なのか」

無言で首を振る結城老人のかわりに、後ろから声がした。リユー
フィンだ。

「ユーリ、話がある」

あれ、こいつってこんな真面目な声出せたっけ。

「お前が出くわした木の化け物。多分そいつ、幻妖だ」

「ふーん。随分でっかい奴もいるんだな」

「そっじゃねえ！」

意外に強く否定してきたので、俺は振り返りリユーフィンを正面

に見据えた。

「……そうじゃねえ。推測だが、そいつは中国人エージェントの相棒で、多分俺と同じ種族だと思うんだ」

「なぜそう思うんだ」

「だから、推測さ。それを確かめるためにも、俺は一度幻夢世界に戻った方がよさそうだ」

「気に入らねえ。はつきり言いやがれ」

リユーフィンはひとつため息をつき、観念したように告げた。

「治療法を探しに行くのさ。ここにいたら、俺もきつとお前らに迷惑をかける」

「……………」

何も言わない俺とリユーフィンを見比べ、リカが遠慮がちに割り込んできた。

「迷惑って何のこと？」

「ユーリが見たっていう木の化け物な。それ、俺たち幻妖がウィルスで暴走した姿だと思う」

別働

ナジアではないリユーフィンが、どうやって幻夢世界に戻るとい
うのだろう。……待てよ、その前に。

「なあ、リユーフィン。どうやって現実世界に来たんだ」

「来る時はナジール能力を持つ幻妖と一緒にだった。ガラって言うん
だ。だが、俺たちのナジールは過激派に見つかり、捕捉された。ア
ンドロイドの奴、俺たちのナジールに侵入してきやがったんだ」

「それで、ガラさんはどうなったの」

リカが質問した。

「わからない。あいつはナジールの一部を分離して、その中に俺を
閉じ込め、外に弾き飛ばしたんだ。無茶しやがって、あの女——」

「ガラってのは女なのか。ひとりでアンドロイドの相手をしたんだ
な。だがその様子、あまり心配しているようには見えないぜ」

感じたとおりのことを言っていると、リユーフィンは俺を見てに
やりと笑った。

「ああ、実は打ち合わせておいた行動のひとつなのさ。あいつは俺
より強いからな。アンドロイドに負けるなんて万に一つもありえな
い。だが、その一万分の一の事態が起きて、俺たちふたりともナジ
ア——つまりお前だ、ユーリ——に接触できなくなるのはまずい」
「薄々感じていたが、俺に接触するために現実世界に来たんだな、
リユーフィンは」

俺の言葉に対し、リユーフィンは実にあっさり「その通り」と返
事をした。

リユーフィンによると、ナジール能力を持つ人間のうち何割かは
《監視機構》内の調査機関により特定できているという。彼とガラ
の目的は、最初からこの俺だったのだ。

「《監視機構》は、俺たち幻妖が接触するにあたり取り乱したりせ
ずに協力してくれそうな人物をリストアップしているのさ。ところ

が俺たちはアンドロイドに邪魔された。そこで、ガラは安全策を採った。分離したナジール、つまり俺の位置をお前に知らせた上で弾き飛ばしたんだ」

その時まで、俺は耳鳴りなんて経験したことがなかった。突然大きな耳鳴りを感じた瞬間、俺は何かの病気にかかったのかと心配したものだ。

「感じたのが耳鳴りだけだったら、俺は病院に駆け込んでただろうな」

何かがいる。行かなきゃ——理屈ではなく、そう感じた。その瞬間、俺は無自覚にナジールを展開し、弾き飛ばされたリューフィンを俺のナジールの中に取り込んだのだ。意識してやったことではない。後から考えれば、そういうことだったのだ。

「幻妖二体でチームを組み、いずれか一体がナジアと接触すればよし。それが《監視機構》の任務なのさ」

「ひでえな、それ」

「なに。俺たちの意志でもあるのさ。そして今頃、ガラはきっと新たな任務についていることだろうぜ」

リューフィンの言い方は、心なしか自分に言い聞かせている風だった。

「きつと大丈夫よ、リユーくん」

突然、リカが明るい声を出した。

「おっ、おっ」

戸惑うリューフィンの様子に、俺は思わず苦笑した。判りやすいやつめ。こいつ、ガラって女に惚れていやがる。

「おし。じゃ、幻夢世界までは俺が連れて行けばいいんだな」

「いや、ユーリ。そいつはわしの仕事じゃ」

俺の提案を、結城老人が遮った。驚いて振り返ると、結城老人がゆっくりと話し出した。

「現実世界と幻夢世界との間には“壁”がある。おそらくほとんどのナジアは、これを越えることができる。しかしその際、ある影響

が出る」

「影響だと」

「さよう。壁を越える瞬間、ナジールの中の時間はほとんど経過しておらず、現実世界では長いこと時間が経ってしまうのじゃ。

……そうじゃな、一度“壁”を越える間に約一週間。リユーフィンの治療に最低一週間かかるとして、また戻ってくるまでに一か月近くかかることじゃろう」

俺の横にリカが並んだ。彼女は腕組みをして、結城老人を軽く睨み付けていた。

「そういえばおじいちゃん、あたしが小さい頃から長いこと家を留守にすることが多かったもんね。きつと“壁”を越えていたんでしょ。もう、なんで今までそれを教えてくれなかったのよ」

「すまんのう。できれば巻き込みたくないというのが息子——お前の両親の願いじゃったからな」

軽く唇を噛むリカが気になったものの、まず俺は結城老人に質問をぶつけた。

「……おい爺さん、あんた何度も両世界を行き来してんのか」

「うむ。昔から幻妖たちとの協力体制の礎を築くために奔走してた」

道理で若く見えるはずだ。六十歳と言われてもまず疑われないような見た目だからな。

「何を考えておる、ユーリ。実年齢との差など、せいぜい数年程度じゃぞ」

結城老人はノートと拳銃を俺に押し付けながら言った。

「では、行ってくる。今度戻ってくる時は、リユーフィンの治療が完璧に終わっていることを期待しておるがよい」

「何を自信満々に言ってるやがる。あてはあるのかよ。ってか、拳銃なんか渡されても使わねえぜ」

「あてなら少しはある。幻夢の住人にも知り合いがおるからな」

結城老人はさらに押し付けてきた。

「持つておれ。わしらが戻るまでの間、お主の武器が拳だけでは心許ないじゃろうが」

「冗談じゃないぜ。」

「爺さん。あの中国人、なぜあつさりと捕まっただと思う。拳銃を撃つこともなく」

「……………」

結城老人は沈黙した。どうやら、判った上で黙っているようだ。

「相棒を撃ち殺したくなかったのに決まっている。俺だって、拳銃持つてても撃てねえ。使わない武器なら持つてても邪魔だ。重いし………… 大丈夫だ、爺さんがいなくても《監視機構》への定時連絡はきっちりと入れる。それに、あの幻妖の目的は中国人ただひとりで、俺たちのことなんてまるで眼中になかった。すぐにまた襲ってくるとは限らない」

俺の目を見たまま、結城老人の沈黙が続く。いい加減焦れてきたところで、爺さんが目元を綻ばせた。

「ふ。お主ならそう言うと思ったよ。………… いいじゃろう、拳銃はわしが持つておる。じゃがユーリ、これだけは言っておくぞ」

「おう」

わがままを通す以上、こちらも言うことを聞かないとな。

「危険に際して、くれぐれも無理はするな。ナジアの数は決して多くないのじゃからな。それと、リ力を守ろうとして身を挺するのも禁止じゃ」

「なにっ、孫を見捨てるのかよ。冗談言ってる場合か、じじい」

「いいえ、ユーリ。おじいちゃんの本気よ」

リ力が硬い声で言い、俺の腕を掴んだ。なるほど、「冗談を言っている雰囲気じゃなさそうだ。」

「あたし、足手纏いになりたくない」

「………… そうか、親の仇。過激派どもに対抗できる可能性のある俺が生き残る方が優先だと言いたいんだな」

リ力がこつくりと頷く。

「だが、そんな俺の知ったことか」

わざと冷たく言い放つ。リカは表情をこわばらせ、掴んでいた腕を離した。

「過激派のターゲットになり得るのはナジアである俺の方だ。俺をさしおいてリカが狙われることはあるまい。何よりも、お前の両親はお前に仇討ちをしてほしいなんて望んでいないだろうぜ」

俺はリカの返事を待たず、結城老人を睨み付けた。

「爺さん、あんたリカと仲良くしろって言ったよな。それってリカのこと守ってほしいからなんじゃないのか」

そう言ってリカの肩を抱いてやると、リカは俺の服をきゅつと掴んできた。

「俺もリカを守りたいから守る。もっとも、武器も度胸もない俺じゃ、頼りにならないとは思うがな」

結城老人は俺の目を覗き込むように見て、満面に笑みを湛えた。

「感謝するぞ、ユーリ。リカをよろしく頼む。ただ、くれぐれも無理はするな」

「ああ。せいぜい、危険を回避するための方策を考えられるだけ考えておくぜ」

俺は結城老人からノートだけを受け取り、上目遣いにこちらを見上げてくるリカの頭の上に手を置いた。

模索

日本語に不慣れなふりを装うのは意外に疲れる。俺はしばらく、学校ではおとなしくしていた。

俺が一年生の女子とつき合っているという噂はすでにクラス中に広まっており、取り巻き連中は潮が引いたように俺に対する興味を失った。俺とリカが昼に校庭や食堂で一緒に食べている姿は、多くの生徒に目撃されていたのだ。おかげで休み時間のたびに行動を邪魔されることがなくなり、動きやすくなったのは歓迎すべきことだ。昼と一緒に食べるくらいでつきあっているというのは飛躍した見方だが、都合がいいので誤解させておけばいい。

今日は俺がこの学校に通い始めてから最初の週末だ。二学期初日に早退した田嶋真由美はあれ以来休み続けており、今日も一時間目が終わった時点で彼女の席は空席のままだった。

「なあユウジ。田嶋真由美って、身体弱いのか」

「どうだろう。あまり丈夫そうないメージはないな。というか、俺あいつとしゃべったこともないからよく知らないんだ。知ってるのは、寡黙だけど学年で一、二を争う秀才だったことくらい」

「彼女、一学期の間はほとんど休まずに来てたわよ。体育も見学せずに参加してたし。それなのに二学期になって突然、早退の翌日から三日連続欠席というのは普通じゃないわね。大沢先生は何も仰らないけど、伝染性の病気がしら」

さつきが言った。朝練のある部活に入っている連中を除けば、彼らの登校時間がクラスで一番早い。何しろ、リカより先に家を出てくる俺が教室に入る時には、必ず彼らの姿があるのだから。

「田嶋のことが気になるのか、ユーリ」

「いや、顔も見えていないクラスメイトがいるってことが気になってさ」

「こう言っちゃなんだけど、話しかけてもきつとろくに返事しない

ぜ、彼女」

なるほど、かなり内向的な性格のようだ。ますます怪しい。

このクラスのウィルスナジアリストは彼女だけではないが、あまり性急に調べ続けると過激派に勘付かれかねない。ひとりずつじっくりと調べなければ。

「ところでユーリ。あなた、たったの四日で随分日本語上達したのね」

さつき、結構鋭いな。ユウジとは違うぜ。ここは気をつけないとまずい。

「初日は緊張してたからね……。もちろん、家でも日本語を勉強してるよ。さつきやユウジとの会話が楽しいから」

「あはは、イギリス人もお世辞を言うのな。本当は授業で取り残されないためだろ」

「お世辞という概念は理解してるつもりだけど、得意じゃないな。

それに自慢じゃないが、俺は学校の勉強はあまり熱心にしない主義なんだ、ユウジ」

「確かに自慢にならないけど、このクラスには馴染んでいるわね、ユーリ」

調査活動は地味に行うのが鉄則だ。せっかく元・取り巻き連中が俺のことを飽きてくれたのだし、ここはもう少しおとなしくしている必要があるそうだな。

その時、何となく視線を感じた。振り向いた俺は、鷹のように鋭い目つきの男子生徒とたつぷり二秒ほど目が合った。彼の方が先に、しかしゆったりと視線を逸らした。

彼の名もウィルスナジアリストに載せてある。かきさきしげる 柿崎繁——百九十

センチ近い彼は、このクラスで俺を上回る身長を持つ唯一の存在だ。その筋肉は、夏の制服をはち切れんばかりに押し広げるほど。最大の特徴は、男子の中でただ一人茶髪に染めてパーマを当てている点だ。おそらく目つきのせいだろうが、見る者にスポーツマンというより不良っぽい印象を強く与える雰囲気をも身纏っている。

殺気こそ感じなかったし、寡黙と内向的な性格とはイコールでないことも承知しているものの、別の意味で彼には用心しておいた方がいいかもしれないな。

その後は何事もなく授業と放課が過ぎていき、昼休みになった。

俺とリカは何となく校庭と食堂とを交互に利用しており、今日の弁当は食堂で食べている。俺たちは長テーブルの端に向かい合って座っていたが、教室の倍近い広さの食堂は空いており、半分以上の椅子が座る者もなく置物と化していた。

「雨の日は混むんだろうな、ここ」

「そうでもないよ。弁当の子って結構自分の教室で食べる子が多いから」

さすがに四日目ともなると、こちらをちらちら盗み見る生徒はごく少数だ。邪気のない視線で見られることに慣れてしまったことも手伝って、俺はそれらの視線を一切気にせず弁当を食べ続けた。

「リカ、例のノートの翻訳ってどこまで進んだ」

「あんまり進んでない。今夜、ユーリ先輩が訳した部分と照らし合わせて確認しようと思ってる」

どうやら固有名詞やら、辞書に載っていない言葉やらが混じっている上に、あまり正しい文法で書かれてはいないようなのだ。一度インターネットの自動翻訳サイトに頼ったのだが、とてもじゃないが解読不明な暗号めいた言葉に翻訳されてしまった。そこで俺たちは辞書を使い、手分けして——こっそりと授業中にも——翻訳しているのだが、これが遅々として進まない。まさに暗中模索だ。

「手っ取り早くノートを《監視機構》に送りつけてしまった方がいような気もするが、明日の定時連絡前にせめて少しでも内容を解読しておきたいもんな」

俺は話題をウイルススナジアの件に切り替えた。

「リストの筆頭、田嶋真由美は初日の早退以来休み続けてる」

「そっいえば、あたしのクラスの井貝くん、えっと井貝泰造くんも

初日に早退してから休んでるよ」

俺は箸を止め、片眉を上げてリカを見た。

「ふむ。そいつ、内向的なのか」

「う……ん。どっちかというと」

リカの歯切れが悪い。

「ほう。リカのクラス、内向的な生徒はいないんじゃないのか」

「身内の鼻屑目って奴ね。ごめん、気をつける」

「別にリカを責めるつもりはないぜ。ところでそいつ、秀才か」

「うん。そりゃもう、学年で一、二を争うほどのね。……え、なぜわかったの？」

共通点だ。偶然とは思えないほどの。ユウジ達から聞いたばかりの田嶋真由美の情報を教えてやると、リカも箸を止めて俺を見た。

「今俺が考えてることわかるか」

「うん。なんとなく」

些細な共通点に過ぎないが、有力な手掛かりかもしれない。すぐに他のクラスのことと調べてみよう。

「おふたりさん。隣に座っていいかい。やあ、ユーリのクラスメイトの鈴木だよ。ユウジでいいからね」

俺の横からユウジが声をかけてきたのでそちらを向いたら、リカの背後から聞き慣れたアルトが聞こえてきた。

「同じく、兵藤さつきです。ごめん、迷惑だったらすぐに退散するから遠慮なく言ってね」

さつきはユウジを軽く睨み付けた後、俺とリカを交互に見ながら申し訳なさそうに言った。

リカは立ち上がり、さつきとユウジにお辞儀した。

「迷惑だなんてとんでもないです。はじめまして、結城リカです。一年四組です」

「あ、いいのいいの、別に俺ら体育会系じゃないし。学年の違いとか気にしない気にしない」

ユウジが軽く手を振りながら着席した。さつきもユウジも手ぶら

だった。

「あれ、昼飯まだなのか」

「うはは、さつきも俺も早飯喰らいなんだぜ」

「失礼ね、ユウジと一緒にしないで。あたしのお弁当は小さめなのよ」

「しっかしユーリ、さすがだな。転校初日から下級生とつき合つとは手が早い。しかも、こんなにかわいい子だったとは」

「こらユウジ」

「ありがとうございます。でもユウジ先輩、褒めすぎ」

ユウジを窺めるさつきの横で、リカはユウジに愛想笑いをしている。

仕方ない、仕事の話は今夜まで延期だ……と思ったが、この際だ。
「俺、他のクラスのことにも興味があつてさ。リカがいろいろ教えてくれてたんだ」

「ほう。たとえばどんな」

ユウジがのってきた。試しに直球を投げてみるか。

「学年で一、二を争う秀才が二学期早々休み続けていることとか」

「えっ、そうなの」

今度はさつきが反応した。

「きのう、一組の友だちからも似たような話を聞いたわよ。学年ひとけたの秀才が連続で休んでるって。えっと、確か森……森なんだっけ」

「一組の秀才なら森田だな。森田浩二」もりたこうじ

来た！ 俺の中で予感が確信に変わりつつある。その線を手繰っていけば、もしかしたら予想外に早く真のウイルススナジア感染者を割り出せるかも。見当違いかもしれないけど、中国語翻訳の暗中模索状態に比べれば百倍気持ちが良い。

「秀才欠席の話題で何にやけてんのさ、ユーリ。いくらイケメンでも、ちよつと気持ち悪いぞ」

「あ？ いや、なんでもない。ところでユウジ、イケメンって何」

ユウジが口を開くのと同時に、昼休みの終了を告げる予鈴が鳴った。

図形

放課後、俺とリカは図書館の裏で落ち合った。

「ワームホールとか言ってたけど、それらしい気配は全く感じないぜ」

あの中国人が消えた翌日から、俺たちは毎日この場所に立ち寄ってから帰るようにしている。三日目となった今、この場所で何らかの手掛かりが得られるなどという甘い期待はとうに捨てていた。

「早々に切り上げて、お家で翻訳しましょ」

俺はリカの提案に反対する理由を持ち合わせていない。

すぐに校門を出て帰路についた。一昨日までは朝だけでなく下校時間もずらしていたが、昨日から用心するのは朝だけにしたのだ。

「一年なんだけどね。一組から六組まで一人か二人ずつ休んでるみたいなの」

「七組と八組は欠席者なしか」

「そう。それで、寡黙で成績優秀って共通点がある欠席者はどのクラスも一人ずつ。二人目の欠席者は、今日たまたま休んだだけみたい。二年はどう」

俺は頭を掻いた。

「俺には他のクラスに知り合いがないからな。さつきとユウジが協力してくれたんだ……。二年一組は三人も休んでいる。二組から四組までは一人ずつ。みんな初日から連続だ。五組以降は欠席者なし。やはり、欠席者には全員例の共通点がある」

「共通点のある欠席者数は六人ね。一年と同じだわ」

「しかし、なぜ一組だけ三人も……」

「二年と三年の一組は特進クラスと言って、成績優秀な生徒を集めて大学——それもどっちかというとレベル高めのね——進学に特化した授業を行うの」

なるほど。しかしそうになると、田嶋真由美がその選に漏れた理由

がわからない。

「特進に入るかどうかは、学校側が本人の希望も聞くの」

「へえ。できるくせに特進に入りたがらないというのは珍しいな。ま、そのこと自体は俺たちには関係ないが」

どっちみち、俺は特進とは無縁だから興味ねえ。

しばらく無言で歩いていると、リカが思い出したように言った。

「そういえば、三年で学年トップの沢沼先輩は休んでないそうよ。

まあ、学園の有名人だし、内向的な要素なんて微塵も持っていない人だけだ」

おや？ リカの奴、やや上目遣いにこちらの様子を伺っている。

「リカ、もしかしてその先輩に口説かれたことでもあるのか」

「えへへー。沢沼裕一先輩さわぬまゆういちって言うの。親しい人からはユツチと呼ばれているそうよ。あたしも、先輩のことはユツチ先輩って呼んでる。……妬ける？」

「つき合ってるのか」

もしリカとユツチ先輩とやらがつき合っているとしても、俺とリカが同居を始めてから約一か月間、一切連絡を取り合った様子がない。もつとも、メールで遣り取りをしているのかも知れないが。

「もしそうだとしたら、どう思う？」

「……………」

なんだ、こいつ。一步譲って俺たちが今現在恋愛関係にあるとして、なぜわざわざ相手が嫉妬するのを期待するかのような態度を示すんだろ。

「あ、少なくとも今はユツチ先輩とは何でもないわよ」

焦ったように付け加えるリカの様子を見て、俺は堪えきれずに噴き出してしまった。

「……よくわからんが、取り敢えず妬けることにしておいてやるぜ」
「ふーんだ」

リカは渋面を作って舌を出した。

「この気分、今夜の料理の味に影響するかもっ」

そう言い残して歩調を速めたり力は、先はずんずん歩いていく。過去に何があったにせよ、今つき合っていないなら何の問題もないじゃないか。……いや、何を考えているんだろう、俺は。

リカの背で左右に揺れる漆黒の髪の毛のうち一房が、一陣の風に煽られふわりと広がった。

「……………」

不覚。つい場違いな感想が口をついて出た。

「ああ、君の言う通り、確かに彼女の黒髪は綺麗だ。見事なまでに」

「わあっ、原田！ どこから湧いて出た」

「失敬な」

本気で驚いた。背が低く黒縁眼鏡をかけた男がいつの間にか俺の真横に立っていたのだ。学級委員の原田正康か……。参ったな、独り言を聞かれてしまうとは。

そんなことより、まずいな。さっきリカの奴“今夜の料理”と口走ってしまったし。こいつ、どこまで聞いていたんだろう。

「心配せんでよろしい。僕は君たちの味方だ。いや、味方になりたいのだ、と言っておこう」

「……は？ 何言ってる」

「公開するべきか、秘匿するべきか。僕なら後者を選ぶがね。ここはひとつ、慎重に検討することを提案しておくよ」

聞き返すそばから、原田はさらに意味不明な言葉を寄越す。俺は彼の言葉を脳内で慎重に分析した。

原田は“味方”という言葉を使ったのだ。俺たちのことを何か知っている可能性がある。もし原田が過激派側のスパイか何かなのだとしたら。何の確証もないままに、俺たちのことを《監視機構》の関係者と疑って鎌をかけているのだとしたら。

ここは、迂闊なりアクションを返すわけにはいかない。

微塵の悪意も感じられない原田の横顔。俺は睨み付けたところを堪え、呆けた顔で凝視した。原田はさらに言葉を重ねる。

「良くも悪くも、君たち——特に君はひとつの鍵を握っている。少

なくとも、僕はそう信じているのだ。くれぐれも慎重に、そして時には大胆に。頑張り給え、期待しているよ」

「だから、何を言っているのか」

「この二学期は学祭もあれば修学旅行もある。イベント目白押しだからね。君という存在は、我が二組にとってのカンフル剤となり得る」

本当に、原田は何を言っているのだろう。俺は判断に迷った。二組云々というのはいわゆる方便のようなもので、こちらの状況を洞察した上での暗喩のように聞こえなくもない。だが、こういう微妙にずれた物の言い方こそが原田のキャラだとも思える。学級委員としての責任感か。もしそうだとすると、学級委員という役職は日本の高校生にとってどんな位置付けだというのだろう。

「何ぼさつとしてる。クラスメイトの色恋沙汰にまで干渉するつもりはないが、彼女は君にとって大事な人なのだろう。早く追わないか」

原田の言葉遣いは、教室でのそれを上回る珍妙さだった。

「あ、ああ。かたじけない」

咄嗟に俺の口について出たのは、昨夜の深夜テレビ番組で放送されていた日本の時代劇に出てくるフレーズだった。俺は原田の持つて回った言い方に影響を受けてしまったようだ。調子狂うぜ、全く。

その夜、俺とリカは予定通り食卓を囲んだ。心配していた料理の味は、いつも通りのおいしさだった。ほっとしながら褒めてやると、リカは胸を反らした。

「あたしそこまで子どもじゃないもん」

はいはい。まあ、そういうことにしておいた方が平和でいいな。

「あの……ね、ユーリ」

「うん」

「あたし……、一学期にユッチ先輩に告られたけど、ね。すぐその場で断ったの」

リカは俺にどんなリアクションを求めているのだろうか。俺たちはつき合っているわけではないというのに――。しかし、俺の口から滑り出たのは別の言葉だった。

「そうか。それ聞いて、なんかほっとしたぜ」

リカの笑顔が眩しい。俺はつい眼を細めてしまった。

なんだ、この流れは。仕事しなきゃ。

「さ、仕事、仕事。しかしこのノート、全然意味がわからねえな。もしかして……」

「もしかして？」

俺は、帰り道で出会った原田との会話を思い浮かべていた。あいつの言葉、俺にとってはこのノートと同じくらい意味不明だった。まるで――

「暗号か何かのように思えてきた」

普通の中国語でさえ翻訳が大変なので、暗号である可能性など俺は端から考えてもいなかったのだ。一度そう思うと、まともに翻訳しようとしていた作業が全て無駄だったような気がしてくる。俺は徒労感に苛まれ、思わず溜息を吐いてしまった。

「とりあえず、途中のページにあった図が何を意味するのか、それを先に考えてみない？」

リカの言う図とは、直線で五芒星が描かれ、それぞれの頂点および中央にひとつずつ、合計六つの丸印が配置された図形である。中央の丸印は左右の丸印を結ぶ直線を左右二本に切り分ける形で線上に配置されている。

「どの丸印も、自分以外の二つの丸印と直線で繋がっていることになるわけか」

リカは、ノートを覗き込む俺の正面から額をぶつけるようにして覗き込んできた。

もし俺たちが牡鹿同士なら、雌を取り合って角突き合わせるの図だな。

「なに笑ってんのよユーリ、最近そういうこと多いっ。ちょっと気

持ち悪いぞ」

リカはユウジの口真似をして言ってきた。いかんいかん、集中しなければ。

丸印が、六つ。……待てよ、六つということは。

「リカ。爺さんが言ってた、ウィルスをばらまかれた学校の位置なんだけどさ。今、それ全部わかるか」

パソコンで調べないとわからないと言って、リカはノートパソコンを操作し始めた。手持ち無沙汰になった俺は、気分転換に二人分のコーヒーを淹れた。

「おっけー。全部わかったよ、ユーリ」

「流石、早いぜ。悪いが、学校が全部ひとつの地図内に収まるようにして位置を表示してくれないか」

淹れたばかりのコーヒーを持っていき、リカに頼んだ。

「はい。あ、ありがとう」

しばらく静かにしていたら、リカがキーボードを叩く音だけが家の中に響いた。やがて、リカの独り言が始まる。

「えーと、名細亜がここでしょ。北部高校がここで、真南高校がこっちよね。中西中学はこっちで、あとは、矢間中学校と、大東高校……」

予想通り、リカが息を呑む音が聞こえてきた。

「何よこれ!」

叫ぶリカの後ろから、俺もパソコンの画面を覗き込んだ。

「ビンゴ」

名細亜学園を中心に、ノートの丸印と全く同じ位置関係にそれぞれの学校が並んでいた。

休日

俺たちは地図をプリントアウトし、直線で繋いでみた。隣接する複数の県にまたがる五芒星。名細亜学園以外の各校を結ぶ直線の距離は、全て百八十キロという巨大な図形だ。名細亜学園から東端の大東高校までの距離と、西端の中西中学校までの距離はそれぞれ九十キロずつである。

「まるで魔法陣ね」

「リカ、大東高校の男子の制服ってわかるか」

「ちよつと待って」

リカが検索サイトを利用して検索をかけると、大東高校のホームページにつながった。どうやらこの春に制服の更新が行われたばかりのようで、新制服を着て並んだ男子と女子の画像が夏用と冬用に分けて表示されていた。

「これだわ、あの中国人ナジアが着てた制服」

「ふむ。すると、少なくとも名細亜と大東はすでにワームホールでつながっていると見るべきだな。爺さんによると、ワームホールつてのはナジアが使うことの出来る通路で、俺もそこに入れば一瞬で目的地に移動できるというんだが……」

この三日間の調査では何の収穫も得られていない。どうすればワームホールに入れるのだろうか。

「お爺ちゃん、《監視機構》が未確認のワームホールって言ったわよね。きっと、まだ繋がったばかりだと思うの」

「誰がどうやって繋げているのか皆目見当がつかないが、六校が全部繋がっちゃう前に阻止しないとまずいんだろっな」

「全部繋がると、何が起きるのかしら」

「わからんが、何も起きないと考える方が不自然だぜ」

過激派どもの科学力がどれほどのものか未知数だが、九十キロも離れた場所を繋ごうというのだ。そう簡単な作業ではあるまい。そ

うである以上、連中の目的がただ単に離れた場所を繋ぐだけではないかとは思えない。

阻止すべきだとは思うが、どうやって。俺は苛々しながらテーブルの上に肘をのせ、組み合わせた両手の上に顎をのせた。

「わからないことだらけで、なんだかもやもやするな……」

ウィルスナジア。内向的な秀才。暴走した幻妖。連れ去られた同業者。ワームホール。魔法陣。

思いつくまま言葉を並べてみたが、俺の思考は凍結し、あろうことか眠気に襲われた。考えるのは苦手だ。動き回っていた方が数倍いい。

正面からこちらの様子を覗き込み、おとなしくしていたリカが遠慮がちに言った。

「気分転換が必要だと思うの。……明日はお休みだし、定時報告も夜でいいから——」

「……………」

続く言葉はなんとなく想像がつく。だが俺は、休日には休日ならではの調査プランを考えていたのだ。何と返答すべきか迷っていたら、リカが先に言葉を続けた。

「近くに、割と大きな遊園地があるの。行ってみない」

首を傾げ、控え目に笑う。それを見た俺は、開きかけた口を閉じ、微笑笑と共に言おうとしていた言葉を呑み込んだ。

仕方があるまい。リカのこの笑顔に心を動かされない奴なんているだろうか。もしいるとしたら、俺はそいつとは友だちになれない。そして本来、おそらくほとんどのリカのクラスメイトたちにとって、この時間は一家団欒の最中なのだ。中には自室に籠もりきりの者もいるだろうが、少なくともリカは——リカの笑顔が本当に向けられるべきは、彼女の両親であつたはずなのだ。

健気という日本語が脳裏に浮かぶ。気付いたときには、俺は用意した言葉とは別の返答をしていた。

「そいつは奇遇だな。実は今、俺も似たような提案をしようと思っ

てたんだ。明日が楽しみだぜ」

「うん！」

花が開いた。そうとしか言い様の無い、無垢で明るいいり力の笑顔が輝いた。

翌朝、予想外の展開に俺は少しだけ戸惑った。

海沿いにある遊園地までは電車とバスを乗り継いで約一時間半。

それを「近く」と表現するり力の感性には驚かされた。遊園地には開園前に到着したが、開園直後、り力は俺を真つ先に売店に連れて行く。普段は見せないり力の積極的な一面に感心していると、彼女は一目散にある売り場へと向かう。目的は俺用の水着だと言っただ。「ここ遊園地だろ。なんで水着を」

「プールとアトラクションが融合したテーマパークなの。水着のままでプールと絶叫マシン、両方遊べるのよ」

「あ、そ」

努めて表情を変えなかったが、正直なところ少々落胆した。どっちつかずの中途半端な遊び場じゃないか——俺はそう判断し、なめてかかったのだ。

それから三十分と経たず、俺は自分の予想が完全に外れたことを思い知った。

「ぎゃあああ」

「ユーリ、叫びすぎっ」

喉が痛い。日本の絶叫マシン、侮れない。たしかに俺は、り力の黄色い悲鳴——いやもうほんと快哉というべきか——を掻き消すほどの大声で叫び続けたのだ。

乗り物から降りてなおふわふわと揺れる視界の片隅で、り力は黒髪を風になびかせ颯爽と歩いている。

「どうして平気でいられるんだよ……」

「次、あれ乗ろう。ほら、並ぶよっ」

おいおい、また絶叫マシンかよ。

「……若いな、リカ。じゃ、あれに乗ったら休憩させてくれ」

どうやらリカのことを、俺は今まで郷里の妹と重ねて見てしまっていたようだ。その意味でも軽く予想外の驚きを感じていた。考えてみれば当然だ。妹はまだ十一歳、リカとは五つも違う。

小柄で細身のリカがビキニ姿で俺の隣を歩いている。普段着の時には気付かなかったが、意外にもバランス良く適度な曲線を備えたセクシーなプロポーションだ。それを惜しげもなく披露しており、予想外だが何というか嬉しい。いや、ここは眩しいと形容するべきか。

「もう休憩だなんて、ユーリじじくさーい」

そう言って、リカが俺の背をばんばんと叩く。結構痛い。しばらく手形がくつきりと残りそうだ。せっかく褒めようと思ったのに、それは延期することに決めた。まだまだ図に乗らせてなるものか。

こういうところは俺の妹と大差ない。いや、たしかに妹も興奮するとたまに俺のことを叩くが、もう少し手加減してくれる——いや待てよ、妹の方が力が弱いだけか。そこまで考えて、おれは思わず「ごめん」と呟いてしまった。

「ん？ なにが」

「あ、いや、なんでもねえ」

妹と比べることがリカに対して失礼な気がしたのだ。それはもうやめておこう。

結局、昼メシ以外はろくに休憩も取らないまま、日が傾き始めた。休憩替わりに観覧車に乗り、園内を見下ろしてみると、九月に入っているとは言えかなり多くの人が集まっていることがわかる。普段は家族連れが大半を占めているであろう園内は、夏休みが終わった今、カップルの比率が若干多いように感じられる。

それって……。いや、今はそれを考えるのはやめておこう。

整然と、しかしどこか迷路のような乱雑さをわざと演出するかのよう、プールや各アトラクションが緻密な計算のもとに配置され

た遊園地。それを黙って見下ろしていた俺は、ある考えに思い至った。

押してもだめなら引けばいいんだ。

「リカ」

すぐに返事が返ってこない。

「リカ……？」

リカの様子がいつもと違う。どこか物憂げなリカの横顔。大人の女性のような眼差しを園内に注いでいる。

観覧車のゴンドラが頂点に到達する。その瞬間、風が止まり、光さえもが凍り付いたように静止した。やはり、亡くした両親への追慕なのか。夏休み中でなく、わざわざ九月になってからここに来た理由は、少しでも家族連れが減る時期を狙ったことなのか。俺はかけるべき言葉もないままりカの横顔を見つめた。

ゴンドラが頂点を過ぎた時、突然強めの風が吹き込んでリカの髪を弄んだ。手で髪を押さえた彼女の視線がゆっくりとこちらを向く。目が合う。微笑む。

それが合図だと言わんばかりに、風が再び優しく穏やかになり、光の粒が熱を取り戻した。

「あ」

いつの間にか、息がかかるほど間近にリカの顔があった。

小さく、それでいてふつくらとしたリカの唇から目が離せない。

不覚にも、呆けたように見とれてしまった。

「……………」

フレンチ・キス。ほんの一瞬——いつ重なり、いつ離れたかも定かでないほど。だがそれは、普段のリカからは想像しづらい一瞬でもあった。

唇に残る感触を確かめつつ、鋼の自制心を総動員した。俺から求めることはしない。今は、まだ。

「今日はありがと、ユーリ」

声が震えている。こいつ、背伸びしやがって。誤解しているよう

だが、俺はそんなに経験豊富じゃないんだぜ。

「上出来だ、リカ」

肩を抱き、頭を優しく叩いてやると、リカは震えを止め、いつもの笑顔に戻った。

「全部終わったら、また絶対ふたりで楽しもうな」

「うん！」

今は考えないことにした。

全部終わった時は、俺がイギリスに帰る時だということを。

地面へゆっくりと降りていくゴンドラの中を茜色の日射しが満たす。

リカの頬が夕日と同じ色に染まっていた。

解説

午後十一時。予定通り、俺は通信機の正面にどっかりと腰を下ろした。

「こちら日本支部。応答せよ」

声だけでは年格好の想像がつかないが、無機質な男の声が俺の耳に届く。

知らない者には声の出所を探すのは難しいだろう。何しろ、通信機の外見は卓上型電気スタンドと何ら変わらないのだ。と言うより、そう見えるように擬装されている。この通信機は音声信号を超空間振動波に変換し、ナジールを応用した空間を通って双方の端末上で元通りの音声として再生する装置なのだ。幻妖が現実世界にもたらした幻夢世界側の技術のひとつであり、現実世界に既存の諜報機関とさえ盗聴するのは絶対に不可能——少なくとも、俺はそう聞いている。

「こちらZー〇七、ユーリ・ウィルソンだ。前回の報告以降めばしい進展はないぜ。それより、聞きたいことがあるんだけど、いいか」
「そういう場合は調査過程だけでいいから報告しろ。質問はその後だ」

へいへい。偉そうな野郎だぜ、まったく。

「幻妖リユーフィンはウィルスに感染したため幻夢世界へ治療法を探しに行った。N〇一六、結城怜治がこれに同行。従って報告はしばらく俺が代行する。校内、通学路ともにナジールを感知せず。ウィルスナジアとしてリストアップした生徒の多くは九月一日ないし二日以来今週末まで欠席が続いている。月曜になっても登校しないようなら、放課後にそれぞれの自宅まで順次調査に行く」

少し迷うが、こいつも報告しておくか。

「あとこれは些細な点だと思うけどよ、校内で殺気っぽいものを感じたぜ。今んとこ一度つきりだな」

「調査方針、了解だ。ただし、貴様の曖昧な感覚など報告不要。……以上か」

なんて無愛想な。イギリス支部のスタッフはもう少しフレンドリ―だったぞ。俺は何か「ああ」と返事をしたが、もしかしたら唸り声と聞き分けがつかなかったかもしれない。

「質問は何だ」

「その前に、あんたのこと何て呼べばいいんだよ」

「知る必要はない。通信担当はいつも私だとは限らない」

やれやれ、とりつく島もないぜ。イギリスのスタッフは名前で呼び合ってたつてのに。もつとも、本名かどうかまでは知らないが。

「ちえ、愛想のない。しゃあない、質問するぜ。さつきも報告した通り、ウィルスナジアリストの中でも目を付けた連中な、みんな成績優秀者で、しかも連続で学校を休んでいる。共通点としてはできすぎだろ。他の学校はどうなのか聞きたいね。あとできれば、各校のお仲間の名前を教えてくんないかな」

「共通点については興味深いが、今は他校のことは気にするな。スツッフの名前も無闇に教えるわけにはいかん。任務上、必要が生じた場合に限りこちらから教える」

「じゃあ、これだけでも教える。ウィルスに感染した幻妖は俺の相棒だけじゃないはずだ。そいつらは今どうしてる」

「ナジール能力を持つ幻妖は自ら幻夢世界に戻った。それ以外はそちらのリューフィンと同じ。つまりはどのスタッフも幻妖抜きで動いているのが現状だ。他に質問は」

「……ねえよ」

沈黙。知らない者には見分けづらい、通話中を示す電気スタンド型通信機のパイロットランプが消える。野郎、本当に通信を切りやがった。今回の通信時間、一分弱か。無愛想なだけじゃなく、とんでもなくせっかちな野郎だ。同じ日本支部なのに結城の爺さんとはえらい違いだぜ。

俺は振り向き、背後で大人しく控えていたリカと目を合わせた。

彼女は微笑んだが、その顔には隠しきれない緊張が滲んでいるように見えた。当然だ。

ほんの小一時間前までと今とでは、俺たちの《監視機構》に対する印象が天と地ほども違うのだから。

* * * * *

遊園地から帰り、俺たちはまず風呂に入った。先に風呂からあがった俺がプリンターのコピー機能を使って中国人のノートをコピーし、内容に集中している間にリカが入浴した。

文字が書き込まれていたページは十ページほどだ。俺はそれらのコピーを重ねた状態で机上に置き、矯めつ眇めつ眺めていると、いつの間に風呂からあがったのかリカが料理を始めており、台所からいい匂いが漂ってきた。

リカの入浴は短時間とはいえない。俺は時間も忘れるほど集中していたのか。時計を見ると八時半。定時報告の刻限が思った以上に迫っていた。

食事中、俺は焼き茄子の甘辛に舌鼓を打ちつつも、時折コピーを捲っていた。その甲斐あつてか、なんとなく光明が見えてきた気がする。

そんな俺に、リカは呆れたように声をかけてきた。

「もう、行儀悪いなあ、ユーリ。そんなんじゃ味もわかんないでしょ」

俺はリカの目を見て謝罪した。ここはきちんと謝っておかなければ。

「ごめん、リカ。悪かった」

言い終えてリカを見ると、彼女は柔らかに微笑んでいた。

「嘘よ。報告時間が近付いてるんだし、がんばってね」

「ありがとう」

礼を言いながら、俺はにやりと笑った。

「ところで、今日行ってきた遊園地、迷路みたいに建物が並んでた
だろ。上から見下ろした時と、園内を歩いている時とで印象が違っ
たのはそのせいだったんだよな」

「うん。それがどうかしたの」

「つまり、建物がなくなると見晴らしが良くなるだろうな、と思っ
たのさ」

リカは小首を傾げた。

「それとこの日記と、どんな関係があるのよ」

「余計なものを取り除けば、何か見えてくるんじゃないかってこと」
俺の言葉に無言で頷いたものの、リカはまだ腑に落ちない顔をし
ている。

そこで、「ちょっと見てくれ」と言いながら、俺は重ねたコピー
をぺらぺら捲って見せた。最初は一枚目と二枚目であり、次は一
枚目と三枚目である。そんな具合に、いくつかの組合せをリカに
示した。

短く「あ」と呟き、興奮した面持ちのリカが俺をまじまじと見つ
めた。……近すぎる。あれからまだ半日と経っていない。つい、リ
カの形の良い唇に目を奪われ、俺は咳払いして気を鎮めた。

「気付いたか、リカ」

「うん。なんかたくさん、どのページも同じ文字が同じ位置にかぶ
ってる」

「たぶん、そいつらが“余計な建物”だ」

食事を終えた後、俺は各ページのかぶっている文字の上に線を引
いて消していった。すると、各ページとも短文が三つずつ残った。
縦方向の文字列が一つ、横方向が二つだ。そのうちの一文をリカが
読み上げる。

「なにこれ。“電気容量百海里”？」

明らかに無意味と判る文章は保留。ただし、何らかの符牒である
可能性は否定できない。まずは意味のありそうな文字列を優先翻訳
候補としてピンク色のマーカーでチェック。中には符牒らしき文字

列しか残らないページもあったが、とりあえずの翻訳候補は六つか七つほどに絞られた。

それにしてもあの中国人エージェント、明らかに素人ではない。なにしろ拳銃を持ち歩いていたほどだ。俺と違って、翻訳してすぐに誰にでも読めるような物を書くほど不用心ではなかったということなのだろう。

そんなことを考えていると、リカがピンクマーカーをつけた文字列の一つを指差した。

「これは何かしら。“ 諜間有里組織在”」

「よし、翻訳サイトで翻訳してみようぜ」

「あたし、やってみていい？ えっと、“ 諜間有里は組がいることを織る”」

言うが早いかパソコンを操作したリカがとんちんかんな訳を読み上げた。

「これも符牒か。しかし、諜間有里ってのは固有名詞かも……女かな？」

「待って」

リカは俺の推測を制し、訳す前の文字列を一字ずつ並べ替え始めた。どうやら、文字の並びを逆にしようとしているようだ。

「よし、“ 在組織里有間諜”、と。えい、翻訳。なになに、“ スパイは組織しています”」

「なにっ」

画面を覗いた俺はリカからマウスを借りて並べ替えた文字列をコピーすると、ブックマークしておいた別の翻訳サイトに移動した。こいつはもしかして。

「こっちこっち。このサイトで翻訳してみな」

翻訳用のフレームにコピーした文字列をペースト。再びリカが翻訳ボタンを押す。

「……！」

画面にはこう表示された。

——組織の中にスパイがいます。

訪問

炎熱たぎる路上。焼き尽くされる街。

また、あの夢だ。

燃え上がる塀が俺の視界いっぱい迫る。

展開のわかつている夢。夢と気付いているのに、なかなか醒めてくれない。今日も、ここで目覚めることはできないのか。

銀色の剣が、炎の壁を両断した。

炎の向こうに揺らめく影が、次第に人の形へと像を結んでいく。意外に背が低い。

「な……、お前は」

夢だ。夢なのだから何でもありだ。

剣を持つて立っていたのは、分厚いレンズの眼鏡をかけ、髪を七三に分けた学生服の男。

「原田！」

夢だとわかっているからという条件付きではあるが、正体不明の殺人鬼に斬られるならまだいい。だが、知り合い——それもよりによってクラスメイト——に斬られるなんて、たとえ夢でも何か嫌だ。幸いと言うべきか、いつもと違う奴が夢に出てきたんだから、この後の展開だっていつもと同じとは限らないじゃないか。現に、前回見たこの夢の中で、俺は斬られていないのだ。

「だったら」

——このままおとなしく斬られてたまるか。

続く言葉を胸中につぶやき、俺は原田が持つ剣の切っ先に意識を集中した。

光る剣筋が俺の肩口に迫る。

スローモーション。俺はナジールの中での時間支配に成功した時と酷似した感覚を味わった。これなら楽に避けられる。しかし……。やめろ、くそっ」

金縛りにあつたように体が動かない。せつかく剣筋が見えているというのに、斬られるしかないのか。夢だというのに、斬られたら痛覚に苛まれることになる。それは現実の斬り傷には遠く及ばない些細なものだが、不愉快な痛覚には違いないのだ。

しかし、どうせ夢だ。避けられないのなら仕方がない。俺は嘆息しながら正面の原田を観察した。原田の奴、どこことなく恍惚の表情を浮かべていやがる。夢なのだから原田本人には責任がないとは言え、気味が悪い。

突然、俺の髪が揺れたかと思うと、原田の顔が——姿が見えなくなった。

一陣の風。何かが、俺の視界を遮る。

閉じるも伏せるもままならない視界の隅から、新たな影が飛び込んできたのだ。

次いで、肉を裂くおぞましい音が俺の鼓膜に突き刺さる。

何が起きているのか、冷静に観察する間を俺に与えることなく、矢継ぎ早に状況が変化していく。

その直後、視界を染める鮮やかな赤。

「……！」

何者かが、俺をかばって銀色の剣で斬られた——そう理解するまでに時間がかかった。

視界を遮る影が、地面へと崩れ落ちる。仰向けに倒れ込んだのはセーラー服の少女。

長い漆黒の髪が放射状に広がっており、先ほど俺の視界を染めた鮮やかな赤色もまた、彼女の肩口を中心に放射状に広がっている。

それを見下ろした俺の時間が、止まった。

「う」

嘘だ。こんな、ことが。

「リカ、リカあ！」

声を限りに張り上げようとしたが、掠れ声しか出てこない。

「……リ。ユーリ」

リカの顔が間近にある。彼女はしっかりと目を開けている。どこにも怪我をしていない。

「リカ。ゆ……め？」

そうだ、夢だ。判っていたはずなのに。あまりにリアルだったので、俺は取り乱してしまっただよう。俺は今、ベッドの上で上体を起こして、リカに顔を覗き込まれている。

「大丈夫？　だいぶうなされて——え、ちょ、なに」

リカのあわてる声を聞き、俺は自分がリカに抱きついたのだと知った。考える間もない、反射的な行動。

「よかった、リカ。なんともなくて」

そう言えば、日本に来てからこの夢を見たのは、これで二回目だ。二回とも炎の壁が崩れる時点で目覚めることはなく、しかし、それにもかかわらず俺自身は二回とも斬られずに済んだ。……済んだのだが。

——くそつたれ。俺自身が斬られる夢より、ずっと痛えじゃねえか。

「もう。一体どんな夢を見たのよ、ユーリ」

微かな笑いを含む声とともに、リカの手が俺の背を優しくたたき、俺は心底安心した。

俺は、結城老人の前で宣言したのだ。リカを守る、と。これじゃ逆じゃないか。こんなんじゃダメだ。

「俺は、強くなる。リカを、守るんだ」

息を呑む気配。リカの手が止まり——、俺の背に巻き付いた。とても強く。

——なさい。強く、なりなさい。

リカ？　いや、違う。リカは黙っている。……空耳か。

しばらく黙っていたリカが、遠慮がちに口を開いた。

「あのさ、ユーリ。いつまでこうしてるの……かな。そろそろ朝ご飯食べないと、遅刻しちゃうよ」

「うん。あと一分だけ」

疲れていたのだろうか、俺は。不覚にも寝惚けてしまった。たとえ一瞬とは言え、夢と現実を混同してしまうとは。

俺は《監視機構》の関係者であるリカというパートナーを得ている上、事情を知らない一般生徒とは言えクラスメイトのさつきとユウジにも、いつも助けてもらっている。そんな俺の環境は、各校に潜入中のエージェントの中でもきつと恵まれている部類に入るに違いない。

中国人エージェントとリユーフィンの安否も気になるし、恵まれた環境にいる俺が疲れたなどと言っている場合じゃない。

「結城老人とリユーフィンが戻ってくるまでに、できるだけのことはやっておかないとな」

「うん」

体を離す一瞬、頬に感じたのは、柔らかくて暖かい感触。

「ありがと、ユーリ」

もう一度抱きしめたい衝動を抑え、夢に出てきた鮮やかな赤色のイメージを意識の外に追い出した俺は、リカに笑顔を向けて無言でうなずいた。

* * * * *

相変わらず学校での時間はいつも通りに過ぎていき、そして相変わらず田嶋真由美は休んでいた。

「行ってみるか」

見舞いを口実に訪問してみよう。会えるとは限らないが、ウィルスナジアリストに名を連ねる生徒が学校に来ないのでは話にならない。

「あたし、田嶋さんの家わかるよ。一緒に行こう」

結局今回も、さつきとユウジの好意に甘えることにした。三人で見舞うなら、もう一人加えても——そしてそれが下級生でも——違

和感はあるまい。そう思つてリカも誘つたが……。

「ごめん。エアコンの修理を頼んでただけで、修理屋さん今日来るのよ。おじいちゃんいないから、今日はまっすぐ帰らないと」

たしかに、この季節にエアコンが使えないなんて地獄だ。

放課後、俺たちは三人で田嶋真由美の家を訪問することにした。

他愛もない話をしながら歩いていく。途中までは見知った景色だ。リカも一緒に歩いていて。リカと別れた後、割とすぐにさつきの足が止まった。

「どうした。迷つたのか」

さつきが立ち止まるのが早すぎて、俺はてっきり田嶋邸への道がわからなくなつたのだと思つた。

「違うよユーリ。ここさ」

さつきより先に、ユウジが答えた。彼が軽く掌を開いて指し示す方を見ると、そこには二階建ての一軒家があり、表札に「田嶋」と書かれていた。

「ここ、なのか」

「どうかしたの、ユーリ」

俺の様子を訝るさつきに、俺はようやくのことで「なんでもないと答えた。

そうさ、ただの偶然だろう。ここは、結城老人が俺をナジールに引きずり込んだ場所なのだ。

呼び鈴を押すため玄関に近付いていくさつきとユウジを見送つていると、突き刺すような視線を感じて俺は思わずぞくりと身を震わせた。

視線の主をさがして見上げると、そこは田嶋邸二階の窓だった。目が合った——と思つたのも束の間、田嶋真由美と思しき人影は部屋の奥へと引っ込んで、二階の窓に感じた視線も気配も消え失せてしまった。

田嶋邸の二階から気配が消えたまさにその瞬間、俺は強烈なプレ

ツシャーを感じて目を見開いた。九月の陽気のせいではない、別種の汗が頬を伝う。

強い殺気。後ろだ。

この感じ、覚えがある。あの日、結城老人によってナジールに引きずり込まれる直前に感じたのと同じ——まさにそのものだ。

——今度は何だ。やれやれ、今日は何て日だ。

唐突に肩を掴まれ——

「うわおっ!?!」

身構えていた。振り向かず、背後の気配に警戒してもいた。それなのに、心構えとは裏腹に、俺は情けなくも叫び声を上げてしまった。

振り向いた俺の視線が、そいつの視線とぶつかった。

「お前はっ——」

後悔

「おっと。また驚かせたようだね」

俺の肩に乗せた手だけでなく、両方の手を耳の高さに掲げて苦笑を浮かべる男と目が合った。

「原田。またお前かよ」

「やあ。最大限の親しみを込めた挨拶だと受け取っておくよ」
違う、こいつじゃない……。こんな近くから発せられた気配なんかじゃない。

殺気の主は、もっと遠くにいる。

「あれは、確か——柿崎？」

とくに隠れているわけではなさそうだ。三十メートル近く離れた交差点に立ち、それだけ離れていても長身であることが見て取れる男は、間違いなく同じクラスの柿崎だ。教室では一度だけ目が合ったことがある、茶髪パーマの寡黙な男。あの時に見た、鷹のように鋭い目つきを思い出したが、この距離ではこちらを睨んでいるのかどうか今ひとつわからない。

すぐに踵を返し、立ち去っていく柿崎の背中からは、すでに殺気と呼ぶべき気配が消え失せていた。というより、俺が振り向いた瞬間には、すでに殺気が感じられなくなっていたのだ。もっとも、殺気の主が柿崎であろうとなかろうと、奴の行動は充分に怪しい。奴も、ウィルスナジアリストに名を連ねる生徒のひとりなのだ。

待てよ。柿崎も気になるが、それよりも。

——原田の気配が全く感じられなかったぞ。

俺は疑惑の色を視線に込めて、原田を突き刺すように睨んだ。しかし、原田は全く意に介さず、涼しげな様子で話しかけてきた。

「ふむ、柿崎くんか。彼ももう少しクラスに打ち解けてくれば良いのだがな。しかし、女子生徒の取り巻きが落ち着いたかと思ったら、今度は柿崎くん。彼の自宅も学校から徒歩圏内だが……、たし

か、ここからだ学校を挟んで反対側のはずだぞ。男女問わず人気があるのだな、ユーリ」

「やめてくれ、嬉しくねえよ。……ってか、俺に用があるとは限らねえし。たとえば、俺たちと一緒に見舞いたかったけど恥ずかしくてできない、とか」

原田にはそう答えはしたものの、俺としても本気でそう思っているわけではない。

「ユーリ。柿崎って確かに無口だけど、そういうキャラじゃないと思うよ。どっちかというと、堂々としているというか」

そういうユウジの分析は、おそらく間違っていないだろう。柿崎のあの目つきは、引っ込み思案な者が身につけられる類のものではない。

そうか、柿崎。奴の強烈な殺気のせいで、無害な原田の気配が微塵も感じられなかっただけなのか。案外、そういうことなのかも知れない。

やがて田嶋の母親が呼び鈴に応じて玄関に姿を現すと、俺たちの最後尾にいたはずの原田がいつの間にか最前列へと進み出ていた。

「あらまあ、こんな大勢で。真由美が起きられれば良いのだけれど、生憎具合が悪くて……」

俺は思わず二階の窓を仰ぎ見た。そこが田嶋真由美本人の部屋とは限らないが、先ほどの人影、背格好からすれば本人である可能性が高い。起きられないほど具合が悪いというのは本当なのだろうか。「いいえ、ご連絡もせず突然押しかけてすみませんでした。二学期は行事も多く、電話連絡だけでは連絡漏れもあるでしょうから、真由美さんが休まれている間に配られたプリント類をお持ちしました」
「それはわざわざありがとうございます。暑いところ大変だったでしょう」

どうぞ中へ、とすすめる田嶋の母親に対し、原田は眼鏡をかけ直しながら辞退した。

「今日は僕ら、これをお持ちただけですから。真由美さんのお加減が一日も早く良くなるといいのですが、とにかくお大事に、とだけお伝えください」

「ご丁寧にありがとうございます。いいお友達がいっぱいいて、うちの子も幸せだわ。すぐに良くなると思いますから、伝えておきますね」

結局、俺もさつきも、呼び鈴を押したユウジさえも、ほとんど一言も発することなく田嶋の母親と原田との遣り取りを見守っていた。原田によるそつのない受け答えに軽く気圧された格好の俺たちを促し、原田を先頭にして田嶋邸を後にした。

「偶然、田嶋さんの家を訪問するというきみたちの話が聞こえてきてね。大沢先生に頼んで、たまっていたプリントを預かってきたんだ。それをきみたちに託そうとしたら、もう教室にきみたちがいないくて。ほら、純粋な見舞いってことにしたら、田嶋さんのご母堂に余計な気を遣わせてしまうだろう。……いや、それよりも、結果的に盗み聞きのような形になってしまって申し訳ない」

「それはいいけど、それならそうと大沢先生のところに行く前にあたしたちに言ってくれば良かったのに」

当然の疑問を口にするさつきに対し、原田は頭をかきながら応じる。

「いや、プリントがたまっていることに気付いたのが放課後でね。僕が職員室まで往復する間にきみたちがいなくなると思っていなかったのだが、思いの外時間がかかってしまったのさ」

原田の様子に不審な点はない。前回会った時は、原田が何を言っているのかよくわからない部分もあったが、それは単に話し方の癖のようなものなのだろう。

「今日は、後からしゃしゃり出てきた僕が、場を仕切ってしまったて悪かった。でも、長居すればするほど田嶋さんにもご母堂にもご迷惑がかかるからね」

田嶋親子だけでなく、俺たちに対してまで気を遣う原田に対し、

不満を表明する者はいない。

「いや、逆によかったよ。俺たちだけじゃ、田嶋のお母さんに気を遣わせるだけだっただろうからさ」

俺は本心からそう答えていた。それに、俺としても収穫が皆無だったわけではない。わがクラスのウィルスナジアリストふたり、田嶋真由美と柿崎繁はどこか怪しい。やはり要注意だ。特に、俺の中で柿崎に対する疑惑はこれまでに以上に膨れ上がっている。

「それじゃまた明日、学校で」

三人と別れた俺は、リカが待つロフトへ向かった。故障中だったエアコン、直っているといいのだが。

* * * * *

ロフトに帰った俺を出迎えたのは、『久松電気店』というロゴ入りのツナギを着た青年だった。

「ああよかった。この家の方ですか」

若い声だ。俺とそう歳が変わらないのかもしれない。アルバイトだろうか。心なしかそわそわした様子で、早口に話しかけてきた。

「はい。ホームステイなんで、居候みたいなものですけど」

「この家の方ならどなたでもいいんです。修理終わっているんで、確かめていただいた上でサインいただければ」

どうやらエアコンの修理に来ていた電気屋だろう。修理していたからには、リカが立ち会ったはずなのだが。

「リカ——家主の孫が立ち会っていたはずですが？」

「お嬢さん、途中までいらっしやったはずなんですがねえ。いつの間にお出かけになったのか、突然いなくなつて。申し訳ないけど、こつちとしても次の予定があるから焦ってるんですよ」

——要領の悪いバイト君だな。リカの携帯の番号くらい聞いとけつての。

表情には出さずに毒づいた俺は、さっそく部屋に入ってエアコン

の動作チェックをした。

「ご迷惑をおかけしました。しっかり直ってますね、ありがとうございます」

サインをしてやると、バイト君、ようやく思い出したように営業スマイルを顔面にはりつけた。

「ありがとうございましたー。またよろしく願いしまーす」

「今日のお支払いは？」

さっさと立ち去ろうとするバイト君を呼び止めると、首だけ振り向いて答えてきた。

「ああ、大丈夫です。こちらのお宅さんはお得意さんなので、いつも月末にまとめていただいているんですよー」

「あ、そ」

バイト君の日本語、正しいのかな——などと考えつつ、俺は適当に相槌を打った。

バイト君を見送ると、俺はリカの携帯に電話をかけた。

——おかけになった電話番号は 現在電源が入っていないか、電波の届かないところに……

受話器から聞こえてくるのは機械音声。俺は軽く嘆息した。

リカの携帯、電池切れか。それなら、たとえ番号を聞いたところで役に立たないな。バイト君、すまん。

だがまあ、きつと作業前にバイト君が長めの時間を見積もったので、リカは買い物にでも出てしまったのだろう。バイト君はそわそわしていたが、あれはただ単に早く終われば早く帰れるからに過ぎないのではないだろうか。

それからしばらく、俺は新たな手掛かりが得られないものかと、あの中国人エージェントのノートと格闘した。しばらく集中したもの、新たなキーワードは見つけられない。きつとまだ、他にも何らかのヒントが隠されていると思うのだが。

ふと気付くと日が傾き、夕闇が濃くなっている。

リカは、まだ帰ってこない。今度は、俺がそわそわする番だ。

ノートを閉じて窓の外を見ていたら、珍しく家の電話が着信音を奏でた。

リカだな。きっと公衆電話からなのだろう。

「もしもし」

日本語での電話応対に妙な気恥ずかしさを感じつつ受話器を取った。しかし――、

「おい、なんだと？ もう一度言え」

俺の耳に飛び込んできたのは機械で加工したような奇妙な音声だった。聞き取りづらい声に向けて低い声で促すと、今度はゆっくりと言ってきた。

「結城リカは、我々が預かった」

刺客

誘拐、なのか？

幻夢世界側の過激派。《監視機構》内のスパイ。あるいは、それらと無関係な人間による犯行。身代金。警察。

いくつかの単語が頭に浮かんでは消える。

相手の声が機械音声であることから、俺はまずアンドロイドを連想した。だが、これまで対峙してきたアンドロイドどもの声は人間の女性の肉声そのものだった。そもそも、幻夢の連中が誘拐犯なら音声を変えるなどして正体を隠す必要などあるまい。

——くそ、リカをひとりで帰したりしなければ。

いや、今は後悔している場合じゃない。

「我々、だと。てめえら、何者だ。リカに手を出すな」

俺は言葉を選ぶ余裕もなく、食いしばった歯の隙間から絞り出すような声で告げた。

「あわてるな。結城リカに危害を加えるつもりなど毛頭ない。むしろその逆だ」

相手の音声以外に、何か手掛かりとなるような音が聞こえてこないものかと聞き耳を立てていたが、受話器からは余計な音は一切聞こえてこない。そのせいで、言葉の内容に対する反応が少し遅れた。「……なんだと？ 逆と言ったのか。どういう意味だ」

「悪いが、詳しく説明している時間がない。結城リカは丁重に扱うので心配無用だ。今、きみのそばにいたら巻き込まれてしまうからな。それより、よく聞け。今からそこは戦場になる」

“センジョウ”——戦場？ 何を言っているやがる、この機械音声野郎は。

「本来ならきみを守るためのスタッフを応援によこすべきところだが、生憎戦えるスタッフが出払っているのだね。すまんが自力でなんとかしてくれ」

「言っている意味がわからない。ここに誰かが襲ってくると言うのか」

「その通り。一匹狼の殺し屋だ。現実世界の人間なのだが、幻夢の過激派どもに与している」

勘弁してくれ。殺し屋だと？

「口ぶりからすると、あんたはその殺し屋の動向を正確に掴んでいるようだな」

「うむ。殺し屋には尾行を張り付かせている。ああ、その尾行も非戦闘員だね。戦闘になれば……」

言いにくそうに口ごもる機械音声に、血の通った人の体温を感じつつも、俺はぶっきらぼうに言い放った。

「とっととケツまくるってわけか。で、その殺し屋、ナジアなんだな。俺の位置はとっくにロックオンされてて、逃げる時間もない、と」

忌々しいことに、幻夢の連中は俺たちナジアの位置を特定する手段を持っているらしいのだ。アンドロイドどもの襲撃が少ないのは、奴らの絶対数が少ないからだと聞いている。

「……察しがいいな」

しかし、このタイミングで、たかが俺ごときを消すために殺し屋を差し向けるとは。

待てよ。なぜ《監視機構》からの正式連絡ではなく、正体を隠した機械音声野郎が伝えてくるんだ。いや、まずはこの非常事態に対処しなければ。

「で、その殺し屋、あとのくらいでここに来るんだ」

「ナジアとしての能力には個人差があるが、その殺し屋は半径五十メートル以内にいるナジアであれば自分のナジールに引きずり込めるそうだ。それを計算に入れば、遅くとも数分のうちに——」

——キイイイン！

突然の耳鳴りに思わず膝を折った。だが、俺も少しは慣れてきたためか、受話器を取り落としたりはしなかった。

「ぐ！ くそ、時間切れみたいだぜ」

何が数分だよ、適当なこと言いやがって。

「ま、待て！ リモコン！ エアコンのリモコンを……」

ふざけているのか、この機械音声は。この非常時にエアコンがどうしたって言うんだ。

その言葉を最後に、俺の手から受話器の感触が消失した。

視界がぶれたと思った一瞬後には、予想通り床も壁面もグレーの空間——見慣れたナジール——の中に立っていた。

「ほう。今度のターゲットは腕利きのナジアと聞いていたが、どうやら本物だな。ナジールに強引に引きずり込んでやったというのに耳も押さえず平然と立っていられるとは。腕が鳴るぜ」

背後から男の声。殺し屋のイメージを裏付けるかのような、鋭利な刃物を思わせる冷たい声だ。

ゆっくり振り向き、睨み付ける。ナジールの内側は俺のステージだ。こっち側の人間の殺し屋ごときにびびってるようじゃ、リカを守れるわけがない。

「なんだガキか。だが、いい眼をしている。せいぜい、俺を楽しませてくれよ」

日本人か。中年で、スーツを着こなしている。背も体格も、俺とそう変わらない。普通に歩いていればそこのサラリーマンと見分けが付かないだろう。しかしこうして対面していると、瞳の奥に宿す剣呑な光と、まるで隙のない立ち姿——自然体というのだろうか、武道の達人のような雰囲気が見て取れる。

落ち着け。俺はアンドロイドともと互角以上に渡り合って来たんだぞ。しかし……。

男は、左右いずれの手にも銃もナイフも持っていない。懷に何らかの武器を隠し持っている可能性はあるが、武器がなくてもその威圧感アンドロイドともに勝るとも劣らない。体格以上にでかく見えやがる。こいつ、強い。

戦うと決めて振り向いた決意が早くも揺らぎそうになった。はや
る動悸を無理矢理抑えつけ、俺は努めて平静を装った。

「一応聞いておこうか。何の用だ」

「お前を殺しに来た」

男は余計な修飾もなく簡潔に答え、歯を剥いて獰猛に笑った。

「——金のためにな。ハハハア！」

「な！」

いつ間合いを詰められたのか、目の前に男の顔があった。

その顔が遠ざかる。少し遅れて腹に衝撃。

「が……はっ」

速すぎる。蹴りではない。俺は奴のパンチで吹っ飛ばされたのだ。

「なるほど。俺の一撃を食らっても立ち上げれるか」

男の笑みが深くなり、瞳の光が一層強まった。

「肉体強化。アンドロイドどもが敵わないわけだ」

言い終える前に回し蹴りが襲ってきた。ハイキックだ。

反射的に頭部を腕でガードして——、しかしなかなか衝撃に見舞
われない。

「っしゃ！」

加速状態だ。反撃。

男の背に回り込み、首筋に狙いを定める。

「卑怯な気はするが、大人しく殺されるつもりはないんでね」

遠慮のない気合いを込めた右脚を、男の延髄にぶちこんだ。

「っ——！？」

声にならない苦鳴。俺は右脚を抱えて転げ回った。

「お前さんが土壇場で加速能力を発揮することは調査済みだ」

あまりの衝撃に、加速状態が解けてしまったようだ。余裕に満ち
た男の声に、絶望的な劣勢を思い知らされる。

「肉体強化能力は、俺様の方が一枚上手のようだな」

よくわからないが、俺もこの男も戦闘に際して『肉体強化』なる
能力を発揮できるようだ。俺の蹴りは、たしかに男の首筋に命中し

た。だが、ダメージを受けたのは俺の方だった……。

「どうした兄ちゃん。もうおしまいかな。もうちょっと頑張ると思っ
たんだがな」

「くそつたれ」

痛みを無視して立ち上がった。

「そうこなくっちゃ」

嬉しそうに笑った表情のまま、男が間合いを詰めてくる。

俺は祈る時のような形に組み合わせた両手を振りかぶり、カウン
ターを狙って男の顎に叩きつけた。

「うお、ぐあつ！」

金属の塊を殴りつけたかのような音。今回もダメージを受けたのは
こっち。

「ぐ……ふ」

しかも、再び転げ回る結果となった。同時に脇腹を蹴られていた
らしい。

「ふむ。俺の蹴りをまともに食らっても、出血もしないとは驚異的
だな。無粋なことこの上ないが、依頼を確実に果たすためにも、こ
こは武器を使うとするか」

痛みを堪え、固く閉じていた目をなんとかこじ開ける。すると、

銀色の輝きが俺の目を射た。

「……！」

いつの間にか、男の手には武器が握られていた。

それは、いつもの夢の中で俺を斬り刻んできたものと寸分違わぬ、
銀色の剣。

劣勢

ほとんど飛び跳ねるようにして立ち上がった俺の肩口に、銀色に輝く刀身が振り下ろされる。

——左右への回避では手傷を負わされる。

そう直感し、俺は後ろに飛んだ。

「ほっほー、見事なバック転だ。まだまだ体力があるねえ、少年」俺の加速能力は、いつ発動するのか自分でもわからない。不確実な能力に頼らず、避けまくって勝機を掴む。それ以外の選択肢はない。

「うっ」

追撃の切っ先が銀色の軌跡を描く。フェンシングに似たその動作は、日本の剣術においては「突き」と呼ばれ、多くの場合相手の喉元を狙う必殺の技だ。

左脇腹あたりの服を引っ張られるような感触に肝を潰したのも一瞬、さらなる追撃を予測して、俺はがむしゃらに飛び込み前転をした。

起きあがる前に、男のふくらはぎを蹴り飛ばす。

「おっ」

意外にも男はバランスを崩し、その隙に俺は少し距離をとった。こいつはもしかして。

垣間見えた光明を分析する前に、俺は自分の左脇腹をチェックした。

大丈夫、服を浅く斬られただけ——

「——っ!？」

朱に染まるシャツが目飛び込み、俺は愕然とした。

「驚いたか、少年。俺の剣はそれなりの業物だぜ」

アドレナリンのせいかな、痛みを感じない。

足を止めて殺し屋と睨み合った瞬間、

「ぐ……っ」

襲ってきた激痛に反撃の気力が萎えそうになる。

——こんな所で。こんな奴に。

あきらめてたまるか。

「いいねえ、その必死な表情。お前さんはここ最近の獲物の中でも上位ランクだぜ。だがまあ、それだけ油断禁物ってことだな。あんまり遊んでいると逆転されかねん。名残惜しいが、そろそろ死んでくれ」

ふざけんな。

殺し屋の構えが変わった。

頭上から腰、時には地面すれすれに剣を振り回す。

この剣術は……。

「中国拳法かよ」

「ほう。わかるのか。まあ、俺のは見よう見まねだけだな」

このやろう。何が『油断禁物』だ。なめやがって。

俺の怪我は失血を心配するほどの深傷ではないが、それでも斬り傷をつけられたことや、必要以上におどけた態度を見せつけられたことにより、頭に血が上ってきた。

「おりゃあああ！」

不意打ちのつもりで突進したが、冷静さを失った俺の動きなど、殺し屋にはお見通しだったようだ。

二度、三度と軽くないなされ、すれ違うたびにひとつ、ふたつと斬り傷が増えていった。

「ふむ。遊んでいるつもりはないんだがな」

手に持つ剣と俺の傷口とを見比べた殺し屋は、そんな独り言をつぶやくと、頬に皺が寄るくらいに口を開けて笑った。

「最高だぜ、兄ちゃん。結構やるもんだねえ」

俺は突進しようとしていた足を止めた。まずい、完全に奴の術中に嵌っている。がむしゃらな突進は彼我の優劣を絶望的に広げる結果にしかつながらない。

ひとつひとつの斬り傷は小さくても、痛みと失血は確実に消耗を早めるのだ。

「おや。息があがってきたのかな。じゃ、こっちからも行かせてもらっぜ」

殺し屋が振り回す剣が迫ってくる。

静から動へと変化する日本の剣術も脅威だが、動から動へと立て続けに襲ってくる中国拳法まがいの剣術も——とくに体力を奪われ始めている今の俺には——大きな脅威だ。

そうだ、足を。奴のふくらはぎを狙えば。

この瞬間、俺は致命的なミスを犯した。下げた視線のせいで、殺し屋に意図を見抜かれていたのだ。

「ぐあっ」

——しまった！

噴き出す鮮血、火がついたような激痛。

右腿をやられた。

俺は無様に左足一本で飛びながら後退った。

「自慢していいぜ、兄ちゃん。最初のうちは見くびってたが、お前さんは俺を本気にさせたんだ」

だからどうだってんだ。ちくしょう、このままやられてたまるか。意志に反し、左足一本で支えていた俺の身体はバランスを失い、仰向けに転んでしまった。

痛みより恐怖が勝り、見開いた俺の視界を銀色に光る刀身が埋めつくす。

くそ、この右足が動けば……。

傷口を押さえようとした俺の手が、ポケットの中の異物に触れる。

——なんだ、これ。

なんでもいい、ぶつけてやれ。

ポケットから取り出した異物は、エアコンのリモコンだった。

殺し屋に投げつけようとして握りしめた指が、いずれかのボタンに触れた。

「ジャミング」

リモコンから、機械音声が聞こえた。

——キイイイン！

「な、なんだ」

俺と殺し屋は同時に何か叫んだようだが、耳鳴りのせいでほとんど聞こえない。

次の瞬間、視界がぶれ始めた。

仰向けに倒れていた俺は、回転するプロペラを視界に入れた。

ロフトだ。慌てて起きあがろうとしたが、できなかった。

「ひとまず、助かったのか……。いてっ！」

やばい、右足の出血が止まらない。

怪我の理由は後で考えるところとして、とにかく救急車を呼ぼう。幸い、この位置からなら電話機まですぐだ。少し這っていけば……。

「はい、残念でしたー」

視界に入れた電話機の傍ら、うずくまっていた影が立ち上がる。

さっきまで嫌と言うほど聞かされた声の主に、俺はうんざりと応じた。

「しつこいぞ、てめえ」

「そつという商売なのさ」

言いながら、殺し屋は電話機本体のポートからコードを抜いた。

「少し予定が狂ったが、これで仕事は完遂——おおっと！」

俺はさらなる奇蹟を期待して、手に持つエアコンのリモコンを操作しようとしたが、殺し屋に手首を蹴り飛ばされてしまった。

床を滑るように転がっていくリモコンは、壁にぶつかってようやく止まった。もう、手を伸ばしても届かない。

あのリモコン、機械音声野郎の仲間が用意してくれていた、せめてもの非常手段だったんだ。……ってことは、電気屋のバイト君も仲間ってことか。迫り来る殺し屋に怯えながら準備してくれてたんだな、あのバイト君。

ぎりぎりで殺し屋の襲来に気づき、現状でできる最大限の助力をしてくれた。どうやら、信用してもよさそうだ。だが、この絶望的な状況は……。

「じゃ、あばよ」

刀身を銀色に輝かせ、殺し屋は剣を振りかぶった。

抵抗

振り下ろされる切っ先は、いつまでたっても俺の頭上に留まっている。神速の剣捌きを披露していた殺し屋の剣は、今にも止まりそうなほど。

「加速？」

しめた。ナジール内にいなくても、加速能力が発動する場合もあるのか。

だが、喜んでなどいられない。加速状態の維持には限界がある。どうすればいい。——真剣白刃取り？　だめだ、奴の臂力は並みではない。取った刀を奪わない限り反撃できないのだ。仮に奪うことができたとして、右足に力が入らない状態の俺は、満足に刀を振り回すことさえできない。

「そうだ、この手があった」

俺は壁際まで這い進み、リモコンを拾った。

——キイイイン！

ひとまず加速状態でナジールに逃げ込んだので、時間稼ぎにはなつたはず。奴が現実世界で他のナジアを捕捉する距離は五十メートルだと言うが、ナジールという空間自体を移動させる手段があるのかどうか——多分あるのだろうが——、その方法は俺にはわからない。

偶然とは言え何度か加速状態を体験したことで、加速状態の解き方だけはわかってきた。俺の体力を温存するため、なるべく早く加速状態を解かなきゃならないが、解いた途端に奴は追ってくるだろう。

「ふう」

落ち着かなければ。俺は、声に出して深呼吸した。

このリモコン、どのボタンを押すと何が起きるのか、俺には全く

わからない。だが、奴が追ってきたら、とにかくなんでもいいからボタンを押す。

何もせずに斬られるよりは、ギリギリまで足掻いてやる。徹底抗戦だ。

こうして時間を稼いでいれば、あの機械音声野郎の仲間——出払っているという戦闘要員——が助けに来てくれるかも知れない、という期待をするのは虫が良すぎるだろうか。

「よし」

——キイイイン！

加速を解くのと同時に、殺し屋の姿が目の前に現れた。

ロフトでの、ついさっきまでの位置関係とほぼ同じだ。

覚悟していたというのに、俺は泡を食った表情を隠すことができなかった。殺し屋の奴、こうも正確に俺の位置を掴んでいやがるのは。

「往生際の悪い……。だが、驚いたぜ兄ちゃん。まだナジールに逃げ込む体力があるとはね」

迷っている場合じゃない。俺は殺し屋に向けて、リモコンのボタンを押した。

「エスケープ・ポッド」

リモコンが発する機械音声に続けて、濃いグレーの球体が殺し屋の身体を包み込む。

「おわ！　なんだこれは」

半輝度というより濃いサングラスなみの球体の内側で、殺し屋が球体の壁面を拳で打ちつけているのが見て取れる。

やがて球体は回転し、俺が発生させたナジールの壁面へと押し付けられた。

エスケープ・ポッド——脱出カプセル。使えるじゃねえか、このリモコン。

リモコンに目を落とすと、今押したボタンが点滅している。なるほど、もう一度押せば奴を放り出せるんだな。

だが、俺は奴のしぶとさを甘く見ていた。

「げえっ……マジかよ」

銀色の軌跡がスパークを生む。

ガラスを引つ掻くのに等しい不快な音が響きわたり、思わず耳を押さえた俺の視界の隅——真つ二つに断ち斬られたグレーの球体の中から、殺し屋が這い出て来た。

「おいおい、兄ちゃんよお」

立ち上がった殺し屋は、歯を剥いた。

「どうしてくれんだ、楽しくなってきたじゃねえか。ハハハハハア！」

全く、こいつは。

「何て野郎だ」

「あ？ 名前か。たかはしかんいち高橋貫一って言うんだ、普通だろ。イニシャルは

K・T。そう、アンドロイドどもの名前の由来だ。もともとあいつら、個体番号しか持ってなかったんだけどな。戦闘プログラムを組むにあたり、俺の基礎動作を参考にしたらしくて、そのプログラム名としてケイティって名付けられたのさ」

「なんだって」

しまった。奴の話術に嵌るわけには。

「ぐあっ」

突然、俺の手の中にあつたりモコンが弾き飛ばされた。

何だ。何をされたんだ、今。

痺れる手首をさすりつつ、弾き飛ばされたりモコンと殺し屋を見比べた。

破裂音はなかった。硝煙の臭いもしない。

「パチンコだよ。ハジキは俺の趣味に合わん。余程のことがなきゃ持ち歩かねえ」

いつの間にか、殺し屋はその手に剣を持っておらず、代わりにY字型の器具にゴムが結わえつけられた道具を握っていた。それを懐にしまうと、改めて剣を取り出した——パチンコをしまったのと同

じ懷から。

「どうなつていやがるんだ、てめえのスーツは」

「お前さんが時間の進み方をどうにかできるように、俺様は少しだけ空間をどうにかできるんでね。おっと、喋りすぎたかな」

殺し屋が歩み寄ってくる。まだこちらの手の内を探っているのか、その歩みはとても慎重だ。

俺はもう、何にも隠し持ってねえ。だが、せめて一矢報いてやる。どうすれば。考える、考える。

殺し屋は間合いの外側で慎重に剣を構えている。軽口を叩く気は無いようだ。

沈黙という名の糸がぴんと張りつめる。

「ええいいやああああ」

聞きようによつては女性の悲鳴のように聞こえなくもない、しかしそれは武道の達人が放つ気合い。

——カイン！

銀色の軌跡が、しかし緑色の螺旋に阻まれ、高い金属音と共に火花を散らす。

緑色！

待ちに待った援軍か。

まさに喜色満面といった態で、俺は振り向いた。

「リュ——！！？」

息を呑んだ。

そこには、大木の化け物が立っていたのだ。

「ウイルスにやられた、幻妖」

呆けたように呟く俺の横で、殺し屋は剣を振り回していた。

大木の枝が複数、鞭のようになり、殺し屋に襲いかかっていたのだ。

「なん、で、俺だけ。そう、か。武器を、持って、いる、から、か。くそっ、たれ」

俺を追いつけている時にはついに見せることのなかった、真剣な表情。しかし、殺し屋は今のところ、大木が繰り出す枝の鞭を完璧に捌いている。

「ちいっ。待ってろ、少年。お前さんを殺るのはこいつを斬り刻んで、からだ」

殺し屋め、本当にしつこい奴。だが、俺も安心してはいられない。殺し屋と幻妖、どちらが勝っても、その後は俺の番だ。ピンチであることには変わりがない。

その時、俺の手許にリモコンが転がってきた。幻妖の根——足というべきか——が、偶然リモコンを蹴り飛ばしたのか。

「？」

なんだろう。今、この幻妖と目が合ったような……。こいつ、本当は暴走していない？

——ざくっ。

枝が一本、殺し屋に斬り落とされた。本体から離れた枝は、生きている蛇のように苦しげにのたうち、すぐに動かなくなった。

この幻妖、味方？ ええい、ボタンを押せ。

「エスケープ・ポッド」

「封印！」

機械音声に続き、別の声が短く叫ぶ。

今の声——女かな。

思わず幻妖を見た後、殺し屋に視線を戻した。すると、殺し屋を包み込むグレーの球体の外側を、さらに緑色の螺旋——大量の葉っぱが包み込んでいた。

——カイン！

球体の内側で、殺し屋が剣を振り回している。螺旋状に包み込む葉っぱの影響なのか、殺し屋の剣は脱出力プセルに裂け目を入れられないようだ。

しばらくして、殺し屋は片膝をつき、腰ために剣を構えた。柄を前方に、切っ先を後方に向けている。あれは、居合い抜き構えだ

ろつか。

俺は手許に視線を落とした。リモコンのボタンが点滅している。

「ええいいやああああ」

脱出力プセル越しに、くぐもってはいるが鋭い気合いが轟く。

スパークが弾け、何割かの葉っぱが風に吹き散らされる枯葉のように飛び散って包囲網を緩めた。まだ、脱出力プセルは無傷のようだ。

「なにしてる、ユーリ。早くイジェクト！」

叱りつけるように叫びつつ、幻妖は新たな葉っぱを脱出力プセルに投げつけた。

「おっおう」

再び、同じボタンを押す。すると、球体は俺のナジールの壁面に吸い込まれ——、外側へと弾き飛ばされてしまった。

今度こそ、助かったのか。

幻妖の枝が、鞭のように殺し屋を襲った時とは明らかに違う動きで、俺の足に絡みつく。傷口に触らないように。そうか、怪我の程度を調べてくれているようだ。

俺はこの幻妖に助けられた。そのことは疑いようがない。

俺は礼を言おうとして——。

予告

どこだ、ここは。

ベッドの上か。

声が聞こえる。複数の話し声。そうか、実家。

フィリスよりも寝坊しちゃった。夢を見ることもなく――覚えていないだけかもしれないが――、泥のように眠っていたようだ。

母さんには悪いが、八月から日本に行くのでしばらくここに来られなくなるし、かわいい妹に会うのもここに来る目的のひとつなのだから、寝坊なんかしている場合じゃないぜ。だけど、何故こんなに身体がだるいんだろう。昨日のバイト、そんなにきつかったわけ。聞こえてくる話し声の中に、男性の声が混じる。そうか、ポールも起きてるのか。そうなると、この時間はもう朝とは言えないような相当遅い時間なのかも知れないな。

そうだ、ポールにはきちんとお礼を言わなきゃ。俺の日本行きに難色を示す母さんを、ポールは説得してくれたんだ。彼にはまだ電話でしかお礼を言っていないからな。

俺にとってポールは継父だが、彼と母さんが結婚したばかりの頃、俺は何のわだかまりもなく『ダッド』と呼んでいた。そんな俺に、ある日ポールはこう言った。

「ユーリ。君と私は、共にひとりの女性、ジリアンを愛する者同士だ。だから、私は君を一人前の男として扱いたい。そのためにも、私のことを名前で呼んでくれないか」

それはフィリスが生まれる直前。俺がまだ六歳になるかならないかという頃のことだった。

「そういえば、そんなこともあったっけ」

懐かしい記憶に頬を緩めつつ身体を起こした俺は、まだ眠気の残る眼をぼんやりと開けた。ベッド脇に誰かが立っている。きつとポ

ールだ。

「ポール」

ベッドから降りようとして――

「うっ」

右腿に電流が走り、完全に目が覚めた。

「君は右足に怪我を負っている。無理に身体を起こしてはいけない」
声を掛け、俺の身体を支えてくれたのは、ポールではない。眼鏡をかけた少年――原田だった。

殺風景な、白い部屋。どうやら病室のようだな。

ああ、そうだ。俺は殺し屋に襲われ、絶望的な状況に追い込まれたところを幻妖に救われたのだった。

あの幻妖はどこだろう。少なくともここには気配も感じられない。あの時聞いた声だけを頼りに判断すれば、女ではないかと思っただが。大木の姿をしていたものの、ウィルスに冒されている様子ではなかったな。

原田は眼鏡をかけ直し、気遣わしげな表情はそのまま、おどけた口調で言葉を続けた。

「大丈夫かい、ユーリ。それにしても、僕を渾名で呼ぶほど親しみを感じてもらえていたとは、光栄だよ。差し支えなければなぜポールなのか、その由来を教えてはもらえないだろ――おわっ」

「ほら原田。リカちゃんの邪魔しないの」

言葉と同時に原田を突き飛ばしたのはさつきだ。原田にしては珍しく、多少オーバーアクション気味に手を広げながら俺のベッドの足元側へと退場していった。

ふと見ると、さつきの後ろにもふたつの人影があった。ひとつはユウジだ。

そして、ユウジに優しく背中を押されつつ、最後の人影がこちらに近付いてきた。俺にとっては最も見慣れた日本人の少女だ。どこか夢遊病者のような足取りで……。

「やあ、リカ。おはよ――」

「ユーリ！」

俺が声をかけた途端、リカの瞳に光が灯った。

ほとんど飛び込むようにして抱きついてきたリカを受け止めた俺は、勢いもそのままベッドに押し倒されそうになった。しかし、そうはならなかった。ひとつの手が、背中から俺を支えてくれたのだ。リカをエスコートしてきたユウジが、さりげなく俺の後ろに回り込んでいたのだ。

「心配したんだから……。心配……。したんだ……」

それ以上は言葉にならないようだ。細い肩を震わせ、声を殺して嗚咽するリカ。

その艶やかな黒髪を見つめるうち、ただ撫でてやるだけではいられなくなった。俺は彼女の背に手を回し、黒髪に頬を埋めた。

「もう、離さない」

自分が何かを呟いたという自覚はなかった。ただ、今俺の腕の中にあるものは、かけがえのないものだという実感だけを噛みしめていた。

さつきが気を利かせ、男どもを連れて静かに病室を出て行くのが気配でわかった。

あいつらも全員、かけがえのない友だちだ。何の混じり気もなく、俺はそう思った。

* * * * *

その後、落ち着きを取り戻したりリカから話を聞いた。彼女の話は出だしから事実と違っていたが、俺が否定するところを万一さつきたちに立ち聞きされたら厄介だ。だから、俺は黙ってリカの話を聞いていた。

どうやら俺は、ロフトのすぐそばで轢き逃げ事故に遭ったことになっていられるらしい。しかも、事故は俺がロフトに帰り着く直前に起きたという。

しかし実際には、俺を轢き逃げした車など存在しないのだ。俺は事故の状況について、何も覚えていないことにするしかなかった。それにしても、さつきたちだけでなくリカまでもが、俺の怪我を交通事故によるものと信じて疑っていないというのはどういうことだ。リカには自分自身が誘拐されたという認識が全くなかった。それどころかエアコンの修理を見届けた後、近所の騒ぎを聞きつけて外出。倒れている俺を見つけ、既に誰かが呼んでくれていた救急車に同乗してこの病院に来たという。

何者かによって記憶がすり替えられている。待てよ。リカと俺の認識が違うということは、俺の記憶がすり替えられたという可能性も否定できない。そう考えたら、俺は本当に殺し屋に襲われたのかどうかわからなくなってきた。

腕組みをした俺の耳に、さつきの歯切れ良いアルトが飛び込んできた。

「ユーリは外傷だけだから何でも食べていいんだってさ。だから、差し入れだよー」

さつきとユウジと原田、三人揃って病室に戻ってきた。

そこでようやく気付いたのだが、今は朝ではなく夕方。俺は丸一日眠っていたようだ。

はたして殺し屋は、俺を助けてくれた機械音声野郎どもは実在するのだろうか。そして、あの幻妖は。

轢き逃げこそが事実で、俺はただ夢を見ていただけなのか。

いや、俺にはそうは思えない。突き立てられた刃の痛み、戦闘というより焦燥と屈辱にまみれた逃避行としか言い様のない、一瞬が無限に引き延ばされたかのような苦しい時間。あの感覚は、リアルなどという生易しい言葉では表現しきれない。

俺が目を覚ましたことにより、その日の内に入院祭の病院内で簡単な検査が行われ、俺は即日退院となった。

あまりにも簡単すぎる検査内容に拍子抜けしてしまった。この病

院、余程ベッドが足りないのだろうか。

すつきりしない思いを抱えたまま、俺とリカはロフトへと戻った。
「ただいま」

結城のじいさんもリユーフィンもないが、リカはそう言った。
ポストから封筒がはみ出しているのに気付き、取り出してみると、宛名は日本語で『ユーリ・ウィルソン様』と、割と几帳面な肉筆で書かれていた。

「へえ、俺宛てとは珍しいな」

言いながらドアノブにかけようとした手を、俺は一度引つ込めてしまった。

「どうしたの、ユーリ」

部屋の中は俺の血で汚れているかも、なんて言えない。

「いや、なんでもない」

開けて部屋に入った。綺麗に片付いていて、俺が襲われた痕跡など微塵もない。そもそも、昨日あれだけ血が噴き出したにしては俺の右腿の傷口は大したことがなく、包帯を巻いただけで普通に歩いているではないか。こうなると、轢き逃げこそが本場で、そのせいで悪夢を見たのではないかと思えてきた。

手に持っていた封筒を開け、便箋を取り出した。しばらく目を通した俺は――、くしゃくしゃに丸めてごみ箱に捨てた。

「なになに、ユーリ。何が書いてあったの」

「なんでもねえ。イタズラだ。“近いうちに、またやろうぜ”とか書いてないし」

嘘ではないが、とりあえずリカには黙っておいた。

差出人のイニシャル、“K・T”のことを。

鍛練

傷口が浅すぎる。普通にシャワーを浴びても平気だった。

入浴後、新しい包帯を巻き直しつつ右腿の傷口をチェックした。縫合さえしていないというのに、意外にもほぼ塞がっている。右腿以外の斬り傷も無数にあったはずだ。鏡を頼りに入念にチェックしたところ、確かにいくつか痕跡が残ってはいた。しかし、大半はきれいに消えている。

K・Tの奴、ご丁寧の手紙を寄越しやがった。昨日のあれは、悪夢なんかじゃない。だがそれなら、あの激痛は何だったのだろう。俺は本当に剣で斬られたのか。

そんなことより、あいつは再戦を予告してきたのだ。とりあえず、明日以降のことを考えなくては。

「なあ、リカ。明日から登校するけど、もう俺たち時間差登校する必要ないよな。一緒の時間に出ようぜ」

「うん！ またユーリが轢き逃げに遭ったら大変だしね」

おいおい。だからそれは違うって。しかし反論する言葉もなく、俺は引きつった笑みを返した。

リカは誘拐されたわけではなかった。だが、一緒にいる時間が少ないと、それだけ不安が増す。ただでさえ、学校では教室が離れ離れなのだ。

俺が殺し屋に狙われていることを告げたら、リカはどうするだろう。言ったところで有効な対策が講じられるわけではない。余計な心配が増すだけのことだ。

『公開するべきか、秘匿するべきか。僕なら後者を選ぶがね。ここはひとつ、慎重に検討することを提案しておくよ』

何故だが、以前原田が言っていた言葉が記憶に甦る。もちろん、いくら変わり者の原田といえども現在の俺の状況を洞察した上で発した言葉では有り得ないのだが。

それはそれとして。

「言えない」

現時点における、俺の結論だ。

その夜、お馴染みの耳鳴りを感じた俺は、ベッドの上で横になったまま目を開いた。

ベッド脇の置き時計に手を伸ばし、上部のライトスイッチを押す。午前一時だ。

この耳鳴りに不快感を感じないのは、慣れてしまったせいだろうか。いや、違う。それだけじゃない。

「殺氣がない。それが大きいな」

誰かが、ナジールの中から俺を呼んでいるのだ。そしてその誰かに、俺は心当たりがある。

一度目を閉じ、開く。

床も壁面もグレーの空間、ナジールだ。寝たままの姿勢だった俺は、身体を起こした。

「見事だな、ユーリ。ナジールを認識し、移動する能力に関しては、《監視機構》のナジアの中では間違いなくトップクラスだ」

昨日聞いたばかりの女の声。あの幻妖だ。

「どうでもいいよ、そんなこと。それより、昨日はありがとう。あんたのお陰で助かったぜ、ガラ。……あんた、ガラなんだろ」

俺は目の前にいる幻妖と正面から向き合った。今俺の目の前にいるのは、大木ではない。

高さと幅が約一メートルずつの細い身体をした、観葉植物のモンステラを思わせる全身緑色の生物。一見してリユーフィンと同種とわかるその幻妖は、リユーフィンよりもずっと精悍な雰囲気身を纏っていた。

「そうか、リユーの奴から私の名前を聞いていたんだね。ご明察だ」昨日、大木の姿をしていた彼女はとも鋭い目つきをしていたが、今の彼女はいくぶん和らいだ目つきに理知的な光を宿している。

「リユーみたいな役立たずが相棒で、あんたも苦労しただろう」

リユーフィンの言によれば、ガラは強いとのことだ。だが、彼女の歯に衣着せぬ言い方には、俺はリユーフィンの相棒として苦笑を返すしかなかった。

「ところで、リユーフィンの奴、大木の姿をした幻妖は暴走した結果だと言っていたぞ」

「半分正解だ。中には私のように、自我を失うことなく拡張戦闘モードに変身できる個体もあるということさ」

拡張戦闘モード。リユーフィンは、自我を保ったまま大木の姿に変身することはできないというわけか。

「昨日はユーリの位置をようやく捕捉したと思った途端、現実世界に移動したからな。手遅れだと思ったよ。しかし、戦闘に関しては素人のお前が、K・T相手によくあれだけ粘ったものだ」

K・Tの奴、昨日はずっと狩りでも楽しんでいるかのような態度だった。

「あのいかれた殺し屋、油断してたんじゃないのか」

「そうだとっても、あれだけの出血にもかかわらず、お前はショック症状を起こさなかった。驚異的な精神力だ」

待てよ。出血と言えば。

「病院じゃ、輸血はおろか点滴さえしてもらってないぞ」

「必要なかったからな。応急手当として、私の体液を少し“輸血”している。それにお前は――」

なんだって？ 話を遮ってでも聞き返したかったが、続きも気になる。俺は黙ってガラの言葉に聞き入った。

「K・Tほどではないが、微かに空間を歪め、攻撃によって受けるダメージを減らしているようだ。自覚がないように見受けるが、ねそれだけじゃない。さらに、自分自身の代謝機能を加速して自然治癒を早めているのさ」

「……………」

「その顔、心当たりがありそうだね」

凶星だ。言われてみれば、幼い頃から大きな怪我をしても他人より治りが早かった。ただ、骨折するほどの大怪我は未経験なので、さほど特別なことだとは思っていなかった。

「ユーリ。お前は自分で思っている以上に、幻夢の過激派にとって脅威なのさ。今や、排除すべき存在として認識されている」

そういえば、イギリスで対戦したアンドロイドのケイティもそんなことを言っていたっけ。

「K・Tは多忙だ。ユーリ抹殺の依頼をいつ受けたのかは知らんが、いよいよ順番が回ってきたというわけさ。日本への滞在期間はさほど長期間というわけではあるまい。おそらく、間を開けずにまた襲ってくるぞ」

迷惑な話だ。降りかかる火の粉が勢いを増したというわけか。

「ガラ、お願いだ。俺を鍛えてくれ」

束の間、ガラは目を見開き、そして呆れたような声で答えた。

「驚いたね。“助けてくれ”ではなく“鍛えてくれ”ときたか」

「昨日、俺を助けてくれた連中による非常手段の中に“ジャミング”ってのがあった。あれを使うとナジールが強制的に解除されるんだ」

そして、幻夢の連中の方が現実世界よりも進んだ科学力を持っている。^{われわれ}俺は言葉を続けた。

「K・Tにこちらの手の内を見せた以上、次に襲ってくる際には対抗手段なり、同種の装備なりを携えてくるだろう。奴のターゲットは俺なんだ。俺とガラが一緒にいるとき、奴がジャミングを使ったらどうなる。ウィルスの万延する現実世界に落とされるじゃねえか」

ガラは眼を細め、独り言のようにつぶやいた。

「リユウの奴、いい相棒に巡り会ったもんだ」

再び俺を見据えるガラの眼は、昨日の“拡張戦闘モード”の時のそれだった。

「OK！ お前に基礎体術と、ちょっとした“必殺技”を伝授してやる。だが、知っての通りK・Tは化け物だ。一対一で斃せる相手

じゃない。戦法の基本は、奴に追撃を思い留まらせる程度の手傷を負わせて離脱すること。いいな」

「はい、師匠！」

* * * * *

だるい。当たり前だ、思い切り睡眠不足なのだ。

「温いことを言うな、ユーリ。それもまだたった一晚の鍛錬で。前は昨日、丸一日寝ていたんだぞ」

ガラの声が聞こえてきた気がして、俺は思わず首をすくめた。今は登校中、近くにはリ力しかない。

「どうかしたの、ユーリ」

「ん、なんでもない。ちよつと寝過ぎた、かも」

実際とは逆のことを言って誤魔化す俺の声には当然、力がない。

「もう一日休んだほうがよかったんじゃない？」

「いや、いくら轢き逃げに遭ったからって、大した怪我もしてないのに丸一日眠りこけてみんなに心配かけちゃまったからな。鍛え方が足りないんだ、休んでなんかいられない」

「うん」

まだ心配そうにこちらを覗き込むリ力に、俺は笑顔に向けてやった。

「頭痛もないし、脳にも異常なし。要するに……、俺がドジでした、すみません」

立ち止まって頭を下げると、その頭を撫でられた。

「よろしい、以後気をつけなさい」

おっと、なんだかギャラリーの視線を集めてるぞ……。

「うふふ。でも怪我が軽くて本当によかった」

まあいいや、リ力に笑顔が戻ったのだから。

「おはよう、ユーリ」

教室にはいつもの二人がいた。他の生徒はまだだ。

「おう、さつき、ユウジ。見舞い、ありがとな」

次第に生徒たちで教室が埋まっていく。個々に挨拶を交わす彼女らを見てみると、無口な奴にもそれなりの社交性がある。田嶋真由美や柿崎繁ほどの怪しい生徒は見当たらない。

今日もまた、田嶋真由美は欠席なのだろう。柿崎も、今日はまだ来ていない。

そんなことを思っていると、遅刻直前になってようやく柿崎が教室に入ってきた。彼の鷹のような鋭い視線は――

「？」

柿崎の奴、今日は俺には目もくれず、何故か原田を睨んだように思えた。

原田に視線を移すと、特に気付いた様子もなく一時間目の授業の用意をしている。

俺もそれに倣って授業の用意をしつつ、昨夜の鍛錬の合間にガラが言っていたことを思い出していた。

ガラは、俺にK・Tの脅威を伝えに来ただけではなかったのだ。

恩人

大の字になって空気を貪った。肩で息をしているが、なかなか呼吸が整わない。

「こらユーリ。本気でやらないと鍛錬にならんぞ」

拡張戦闘モードに変身したガラが鞭のように繰り出す複数の枝。それを、木刀を使って捌く訓練をしていたのだが、開始五分でこの有様だ。

それにしてもK・Tの野郎、この猛攻を捌きながら俺に向かって話しかけていやがったのか。

「負けて……られっか」

立ち上がった俺に向け、ガラは容赦なく枝の鞭を揮った。

木刀の長さを利用して、複数の枝を同時に捌く。

“肉を切らせて骨を断つ”——集中攻撃にさらされた場合は、致命傷を受けそうな攻撃を正確に見極め、それらを優先的に処理しなければならぬ。そして、常に最小限の動きで対処しないと短時間でスタミナが切れてしまう。

「わかつちゃ……いるんだ……よっ！」

乾いた音を立て、木刀が転がる。

技量のなさを示す右腕のミミズ腫れを、俺は忌々しげに睨み付けた。

「まだまだ休ませないぞ、ユーリ。早く木刀を拾え！」

「お、おう、師匠！」

「本番では、敵は待つてはくれないぞ」

本番なら、武器を落とした瞬間にさらなる猛攻に襲われる羽目になる。それを自らに言い聞かせて木刀を拾うのだが、数分と待たずに新たなミミズ腫れが増え、木刀を取り落とす結果を繰り返した。

「K・Tの動きを目で追っていただろう、ユーリ。奴との違いをイ

メージしてみろ」

最初の休憩の時、ガラはそう言った。

剣を振る時、あいつは滅多に片手保持をせず、大抵は両手を添えていた。左手の軌道が正中線から外れることも、上体が地面に対して斜めに傾くこともほとんどなかったような気がする。それをガラに告げた。

「わかつているじゃないか。まあもつとも、あれほど基本に忠実でありながら自由自在に剣筋をコントロールできるからこそ、達人なのだな」

達人か。敵を褒めるのは癪に障るが、ガラの意見には賛同せざるを得ない。

「この訓練では、奴との格の違いが体感できればそれでいい。奴に真正面から剣で対抗するなど、どだい無理な話だからな」

お。いよいよ、必殺技とやらの訓練か。

言葉よりも雄弁な俺の眼を見た瞬間、ガラはこちらの意図を察したようだ。釘を刺されてしまった。

「慌てるな未熟者。中国には“生兵法は怪我の元”という諺がある。次は武器なしの体術だ」

どうやら、必殺技までの道のりは長そうだ。

「必殺技はいずれ教えるが、今日はまだだ。その前に、お前には加速能力という強力な武器がある。私が知る限り他に類を見ない能力だが、その発動は偶然に頼っていて実戦ではあてにならん。さっきも言ったが、お前は怪我を負った時、無意識に代謝機能を加速している。つまり、怪我さえしなければ余計な能力を使わずに済み、通常の加速能力が発動する確率が高まるのではないか。そうすれば、少しは使い物になるかもしれん。ま、それは私の推測に過ぎないので断言はしないが、な」

そう言っただけで口元を歪めるガラの笑顔に、どこかサディスティックな陰影を見たような気がして、俺の背筋を嫌な汗が伝って落ちた。

「じゃあ、もしかして体術ってのは……。さっき木刀で捌いたあの

攻撃を、丸腰で避けまくれとか言うんじゃねえだろうな」

「ふふふ。察しが良いな。全くもってその通りだ」

何故だろう。この時ガラが見せた素敵な笑顔と、日本の文化である般若の面が俺の脳内でオーバーラップしていた。

* * * * *

何度目かの、それこそ回数を数えることさえ億劫になるほどの休憩を全力で貪っていると、ガラが話を切り出した。

「私とリユーには、共通の恩人がいる」

俺は疲れでぼんやりしかけた頭を振り、ガラに顔を向けると話に意識を集中した。

「私とリユーが《監視機構》に手を貸し、現実世界で過激派どもと戦い始めたばかりの頃、奴らの罠に嵌って火攻めに遭ったことがある。人間にも幻妖にも何人も被害が出た。場所は、あの時も日本だった」

犯行声明のないテロだの放火だのといった事件のうち迷宮入りしたものについて、そのいくつかの事件の真相は幻夢側過激派による攻撃なのかもしれない。ぼんやりとそう考えた時、ふと疑問が湧いた。

「ちょっと待てよ。現実世界だと？ 幻夢の奴ら、こっちに入り込めないはずだろ」

「いたのさ、K・Tみたいな殺し屋以外にも人間の内通者が。スパイとわかっていた連中はあの時に全員潰した。だが、ああいう連中はそう簡単に根絶やしにはできないものだ」

あの中国人のノートを思い出す。組織の中にいるスパイ。昔から暗躍しているということか。

「どういうことなんだ。現実世界の環境を幻夢世界と同様に作り替えたなら、俺たち人間が住めなくなるじゃないか」

「うむ。なにも現実世界の全てを幻夢の連中に提供しようというの

ではないらしい。どうやら場所を限定して提供し、見返りを得ようということだ。どんな見返りかわからんが、ろくなものじゃないことだけは確かだ。それに――」

「確信犯か。自分達が正しいと信じ込んでいるから、戦いに殉じることさえ厭わない」

「そういうことだ」

なんてこった。まるっきりテロ集団じゃねえか。

「今さらだけど、そのスパイをあぶり出すのがガラ役目で、俺はそれに協力すればいい、って話なんだよな？」

「すまん、肝心なことを言っていなかったな。その通り。だから私のことは《監視機構》への定時連絡で報告しないでくれ。K・Tが動き出したので、今は何よりも奴への対処が優先事項だ」

ガラがここにいることを定時連絡で報告すれば、スパイにもわかってしまうのだろう。今は動いている幻妖が全くいないということにしておきたい、というところか。

「なあ、K・Tは幻夢の過激派とつながってるんだろう。奴を通じてガラのがスパイに伝わってるんじゃないかな。それに、奴のことを定時連絡で報告しなくていいのか」

「K・Tは金で殺しを請け負う殺人狂だ。依頼主に余計な義理を作らず、ターゲットの生死以外は報告しない。K・Tの性格が私の知っている頃と変わっていなければ、の話だが」

俺も戦ってみて――もとい、襲われて――わかったが、K・Tって奴はスパイだの誘拐だのといった回りくどい事には一切頓着せず、ただ強い奴や強そうな奴を叩き潰したいだけなんだろう、という感想を持っている。

おっと、話がずれているぞ。

「そうだ、ガラ。火攻めに遭ったって言ったよな。どうやって脱出したんだ」

ガラは一瞬遠くを見る目つきをし、「炎熱地獄だった」と呟いた。その単語に、軽い既視感が脳裏を過ぎる。

「私はリユーとふたり、燃え盛る建物の中に閉じ込められたのだ。自力での脱出は不可能だった。彼——恩人がいなければ、あの時点で焼け死んでいただろう」

“焼き討ち”された現場は、一般の人間も多く暮らす住宅街だったという。日本では珍しい、自然発火現象に端を発する大火災として報道され、家屋六棟の全焼と死者十一名という悲惨な結果を招いた。

「あんたほどの幻妖がみすみす罠に嵌るとはな。よほど巧妙な罠だったのか」

「人間の幼い男の子がいてね。ちょうど、ユーリみたいな栗色の髪をした子だった。私もリユーも、どうしても助けたくてつい無理しちまったのさ。結果、男の子を燃え盛る建物の外に出すことには成功したものの、私たちはその建物内に閉じ込められた。諦めかけたところを、人間の剣士が救ってくれた。燃え盛る壁を剣で両断してくれたのだ」

ガラという言葉音を音として聞きながら、俺の脳裏には鮮明な光景が展開されていた。

白昼夢とかフラッシュバックといった現象に近いのかも知れないが、俺は落ち着いていて、現在ガラと会話中だという認識はしっかりと持っている。

『うわあああ』

視界を埋めつくす炎の壁。逃げ場もなく、目を閉じることさえできな。

『いえええええいいい』

オレンジ色の壁の中央を、銀色の光が上から下へと一直線に走る。火の粉を撒き散らして左右に分かれる壁の向こう側に、人影がひとつと——顔を持つ植物がふたつ。

『坊や、大丈夫かい』

剣で壁を両断した男が話しかけてきた。長身痩躯で、日本人にし

ては彫りが深く、高めですつと通った鼻梁の持ち主——忘れかけていた記憶が、今この瞬間に像を結んだ。そして男が腰の鞘にしまった剣、あれはまさしくK・Tが使っていたもの。

植物の片方が話しかけてきた。

『ひどい怪我をしているね。でも私たちならすつかり治してあげられるよ。だから、強くなりなさい』

今ならわかる。ガラだ。ガラは今とほとんど変わらない容姿だが——、頭部にあたる部分に黄色いリボンがついている。

『名前、なんてえんだ』

リユーフィンだ。こいつは今と全然変わってねえ。

『ユーリ。ユーリ・シルベストル』

「それって何年前の話だ」

知らず、声が低くなる。

「十八年前かな。まだ、ユーリが生まれる前だ。……そうか、ユーリ。お前、偶然あの子と同じ名前なんだな」

偶然なんかじゃない。これは実体験だ。理屈ではなく、俺はそう思った。

「この話、K・Tも絡んでるんだろう」

「ふむ。なぜ、そう思うんだ」

「その恩人が使っていたのは、今K・Tの野郎が使っている剣なんじゃねえのか」

「……………！　なぜ、お前がそれを知っている」

今度は、ガラの声が低くなった。

「説明するよ」

結局、昨夜の最後に予定していた訓練は中止した。俺とガラはそのあとずつと話し込んだのだ。

俺が繰り返し見る夢の話を伝え終わると、目を閉じ静かに聞いていたガラは唸った。

「うーん。たしかに、偶然とは思えないね。K・Tの剣は、お前が

言う通り、もともと恩人が使っていたものだ」

「殺されたのか」

「いや、恩人はご存命だ。ただ、K・Tに敗けて瀕死の重傷を負い、剣はその時に奪われた。その時の怪我がもとで左腕が肩より上に上がらなくなり、戦士を引退した。その後《監視機構》幹部スタッフとなったことまでは聞いている」

もう間違いない。

「幹部は現場スタッフ以上に極秘任務が多いからな。一度イギリスに渡ったと聞いて以来、もう随分長いことお会いしていない。それこそ、十年以上」

絶対だ。俺は、心当たりの名前を口にした。

「佐々木慎吾」

「な!？」

初めて見るガラの狼狽した表情を見て、俺はなんとなくリ्यूフインとの共通点を見つけたような気がした。

「やっぱりね。俺の……、実の父親だ」

過去

眼を丸くするガラを無視し、俺は平坦な声で自分の推論を告げる。
「俺、あいつの実の子どもってことになってるけど、もしかしたら違うかも」

あの大火災で両親を亡くした孤児——それが俺。ユーリという名前はフランス人男性名として一般的なものだ。シルベストルという苗字も。

あのとき、現場近くをたまたま通りかかったフランス人旅行者。その気で調べたら、俺は多分当時の資料の中にフランス国籍の死者名を見つけることになるだろう。“ユーリ・シルベストル”という自分の本名を含めて。多分、そんなところだ。

俺にはフランス人の両親がいた。そして、強制的に忘れさせられた。

この時点で、ほぼ確信しつつある俺の過去。誰かを恨んで叫ぶべきか。でも、誰を。実の親を殺した奴か。俺の記憶をいじった奴か。

……あるいは、その両方か。

整理のつかない思いを抱えたまま黙っていると、ガラが反論した。
「しかし、ユーリ。それでは年齢が合わない。どう見ても、お前が二十歳過ぎだとはとても思えない」

俺も、自分でもそう思うが、それを異世界の幻妖に言われても、ね。

「何らかの理由で現実・幻夢両世界の“壁”を、幼い俺が何度も何度も超えているとしたら？」

実の親は佐々木慎吾とジリアン・ウィルソン。五歳頃までこの日本で暮らしていたとして、その後はずっとイギリス暮らし。その俺が、なぜこうも日本語を自然に操れるのか。

イギリスに移り住んだばかりの頃、両親は口論が絶えなかったが、常に英語で言い合っていた。その後すぐに両親が離婚し、日本人の

父親が出て行つて以来、ほとんど日本語に触れていなかったというのに。

「なんだ、もう気付かれちゃったのか」

ナジール内に唐突に機械音声が響き、俺とガラは揃つてのけぞつた。

「これを持たされているのを忘れていた」

先に立ち直つたガラが枝の隙間から小型の箱形をした装置を取り出した。機械音声はそこから聞こえてくる。

「やあ、我が優秀な息子よ。久しぶりだね」

「黙れクソ親父」

こいつ。ずっとモニターしていやがつたな。

「おお！」

機械音声のエフェクトを切つたのか、俺にとっては聞き覚えのある懐かしい声がスピーカーから聞こえてきた。クソ親父の声をまだ覚えていたとは、我ながら驚きだ。

「私のことを親父と呼んでくれるか。感動だよ」

「勘違いするな。俺の父親はポール。あんたはクソ親父だ！」

俺は思わずぞんざいな口調で返したものの、さほど腹を立てていないわけではない。

「……でも、これだけは言っておくぜ。助けてくれてありがとう。

ガラもだ。ありがとう」

ガラは声に出さず、眼だけで頷いた。

「正直に言うが、助けた当時からユーリにナジール能力があることはわかっていた。フランス人のご両親はいずれも《監視機構》スタッフであり、ご母堂はナジアであらせられた。お二人を救えなかったのは残念だ」

火災現場は住宅地であつて観光地ではないのだ。俺としても単なる偶然による被災とは思えなかったので、クソ親父の言葉を疑うつもりはない。

「私としては、幼いユーリを巻き込むのは本意ではなかったんだ。

ナジール能力を消す方法はないかと思い、何度も幻夢世界と現実世界を往復した」

「今なら大体、想像はつくぜ。結局俺のナジール能力が消えることはなく、俺がナジアであることを幻夢の連中に気付かれた……」

「うむ。私はお前を守るため、幻夢のアンドロイドが接近したらすぐに対応できるよう、職権を濫用して監視を続けていた。あの日、アンドロイドの動きを掴んだので大急ぎでガラとリユーフィンのふたりをお前のもとに送り込んだ。ふたりとも信頼できるからな。大いに頼るがいい」

何が“職権を濫用”だ。“頼るがいい”だ。本当に幹部か。患部の間違いじゃないのか。守るべきは俺じゃなくて、この現実世界全体だろうが。やることがずれまくっていやがるぜ。

「おい！ リカの記憶を操作したのは何故だ」

「その件については事情があつてね。できれば、彼女にはK・Tのことを知られたくない。今はそれしか言えないが、いずれお前には私から何らかの形で伝えるよ」

「絶対だな？」

我ながら、恩義ある親であり、所属する組織の上長でもある人物への言葉遣いとは思えないが、今さら改める気になれない。

「ああ、約束しよう」

「それなら、リカには黙っていよう」

「そうしてくれ。だがもちろん、状況によっては定時連絡で報告してくれていい。では！」

スピーカーが沈黙した。

「用件オンリー。信じられないくらい一方的だぜ。あんな風だから母さんと離婚したんだな、よくわかったぜ」

半目でスピーカーを睨む俺に、なぜだかガラがフォローを入れる。「お、お忙しい方だからな。それに、一般人の奥方と生活しながらでは、《監視機構》の任務に障りがあったのだろう」

困っているガラを見て、申し訳なく思えてきた。

「いや、ガラのせいじゃないし。別に怒ってねえよ、今さら」

俺がクソ親父と同じ立場だったとしたら、多分同じことをしただろう。そう思うと、かなり気分が治まってきた。

「クソ親父め。やることが滅茶苦茶なんだよ……」

でも、だからこそ俺は今こうして生きている。

ガラはひとつ頷くと、気分を入れ替えるようにまた厳しい眼を言った。

「今日はここまでにしよう。訓練の再開は明日の夜からだ」

「ああ。頼むぜ、師匠」

「その師匠っていうの、やめてくれないか。ガラでいい。ところで、この装置を肌身離さず持っている。もしK・Tに襲われるようなことがあれば、この装置のスイッチを押せ。一回くらいは逃げるなり時間稼ぎするなりできるはずだ」

そう言っただけ付いている。今時、防犯ブザーでももう少しそれっぽい外見をしているものだが、こいつはどうみても“スイッチの付いたマツチ箱”でしかない。なんとも心許ないが、こんな物でも《監視機構》の装備には違いない。何も持っていないより安心だ。

「睡眠時間は、そうだな、授業中にでも確保しておくがいい」

何てこと言いやがる、ガラ。……もつとも、俺としてもそのつもりなのだが。

* * * * *

今日の授業では、あまりに寝過ぎてさすがに先生に咎められた。さつきとユウジがうまく誤魔化してくれて、“事故の後遺症”ということで保健室に連れて行ってもらい、そこで惰眠を貪ることに成功した。

気付くと放課後だ。保健室の窓から外を見ると、もう帰宅する生徒の姿がちらほら見える。

「ユーリ、大丈夫？」

さつきとユウジが、リカを伴って保健室まで来てくれた。

「悪い。怠け癖が出ちまって。明日からはさばらないよ」

後頭部を掻いた。リカが疑わしげに見つめてくる。

「それよりさ、ちょっと剣道に興味があつて。誰に頼んだら部活、見学させてくれるかな」

「お。ユーリ、剣道部に入るのか。大丈夫、武道場に行けばいつでも見学できるよ」

そう言ってくるユウジに、俺は首を横に振って否定した。

「違う違う。日本の文化に興味があるだけだよ」

「日本の文化と言えば、茶道とか華道とか……」

そう言ってお茶や生け花のジェスチャーをしてみせるさつきに、リカが笑顔で突っ込んだ。

「それユーリの趣味じゃないです。って、わかってて言ってますよね、さつき先輩」

「もっちらーん」

なんというか。俺はこここのところリカに不安を与えっぱなしだ。さつきとユウジがいなければ、一体俺に何ができただろう……と、今さらのように思う。

「めええええん！」

「こてめんどううう！」

K・Tの気合いほどではないが、そこらの高校生とは明らかに一線を描く気合いが武道場に轟いていた。

重そうな防具を着け、隙間の浮いた頼りない竹刀を手に相対する生徒同士、驚くほどの素早さで交差し、押し合い、打ち込んでいく。「驚いたねこりや……。想像以上だ」

正直に感想を呟いた俺は、やがて生徒たちの足元が気になった。なんだろう、あの足の運び方。

「摺り足というのよ」

さつきは中学の時に剣道部にいたらしく、解説をしてくれた。

「足の裏全体を床につけていると移動が遅くなる。かといって爪先立ちしていると打ち込むタイミングを逃す。そこで、かかとに和紙一枚挟んでいくくらいのつもりで浮かしておき、重心を落として前後左右への動きに素早く対応できるようにするのよ」

聞きながら、俺はK・Tの動きを思い出していた。あいつのは、ここまで絵に描いたような摺り足ではなかったが、動きの基本は似ているように感じた。

「やああああ！」

竹刀を振っていない生徒も、気合いの声を上げているのが聞こえてくる。

「人間って、ああやって声出したり、息を吐いている時って割と動けるのよね。息を吸う時って、気合いを溜める目的とかもあるからどこかのタイミングでは必要なんだけど、その時はどうしても動きが止まっちゃうの」

ガラの攻撃を捌いたK・Tの動きは——なるほど。さつきの解説、ためになるぜ。

サンキュー、さつき。リカとユウジがいなかったら、俺は彼女に抱きついていたかも知れない。今の俺にとって、リカはもちろんのこと、さつきもユウジも家族だ。

しかし、日本人の奥ゆかしさは熟知している。このタイミングで俺がさつきに抱きつくべきでないことくらいは理解している。

「ユーリ、楽しそう。もしかして、剣道部入りたい？」

リカが言ってきたので、俺は慌てて否定した。

「そんなわけないって！ サッカーや野球と同じ。見るのが楽しいのさ」

——パアアン！

ある生徒の珍しい動きに、俺の目は釘付けになった。

「ん？ 今の技は」

「退き胴^ひよ。鰐^ひ迫り合いから身体を後ろに退きつつ、相手の死角を

つくようにして胴に打ち込む技なの」

「ほう」

これが剣道か。なかなか奥が深いぜ。

孤立

剣道を見学した程度で、俺の技術が上がるはずもない。

夜中の訓練が始まってから一週間が経つが、俺の両腕は相も変わらず隙間もないほどのミミズ腫れだらけとなってしまう。

これらが全て翌朝には消えてしまうので、毎度のように夢でも見たかのような錯覚に陥るが、鬼教官による特訓は紛れもない事実である。

「うむ。特訓の効果が思わぬ方向に作用しているようだ。木刀をほとんど落とさなくなったし、傷の治りが明らかに早くなっている」

「……はあ」

喜べない。通常の加速能力が発動する確率が余計に低くなったということじゃねえのか、それって。

何度目かの休憩の時、ガラはこう言った。

「感心したぞ、ユーリ。昼間も鍛えているのか」

ミミズ腫れの多さも、無様に転ぶ回数も、初日からあまり変わっていない。変わったのは、滅多に木刀を落とさなくなったことだけだ。俺は、ガラが嫌味を言っているのではないかと疑った。

「な、なんだよ。俺があんまり上達が遅いからって、嫌味かよ」

「ふふ。気付いていないのか。お前の上達が早いので、私の方が攻撃レベルを上げているのだよ」

なんだって。じゃ、剣道を見学したのはあながち無駄じゃなかったってことか。

「ああ、もちろんそれなりに手加減はしている。ただ、初日はあまりに無手勝流でどうしようもなかったお前の動きが、どんどん様になってきているのは確かだ」

えーと。これって、褒められているんだよな。そう解釈しておこう、うん。

「この分なら、そろそろ必殺技の伝授を始めてもいいかもしれん」
「待ってました！」

「だが、ユーリ。もし今日教えたことができるようになった程度でK・Tに襲われるようなことがあっても、戦おうなどとは考えるな。まだまだ、とてもじゃないが相手にならん。あの“マツチ箱”、ちゃんと持ち歩いているな？ あれを使うことを忘れるな」

くどいくらい念を押すガラに神妙に頷いてみせると、彼女はようやく必殺技についての講義を始めてくれた。

ガラの説明に従い、掌を上に向けて精神を集中した。

程なく野球ボール大の淡い白光が生まれ、蠟燭の炎のように儚げに揺らめく。

「まだだ。もっと凝縮させろ」

鉛筆なみに細くなつた白光はさらに頼りなく揺らめき、今にも消えそうになつた。

「やり直した」

再び野球ボール大の白光を掌の上に発生させる。小さく、小さく。白光はゴルフボール大となり、その輝きは強く安定した。

ガラは、俺が部屋から取ってきたジュースの空き缶を三メートル離れた場所に置いた。

「的だ。よく狙って当ててみる」

俺は腕をまっすぐに伸ばし、空き缶を狙った。

「行け！」

——カァン！

小気味よい音をたて、空き缶はふたつに割れた。

「思った通りだ。ユーリは微弱ながら空間を操る能力も持っている。そいつを応用すれば、こういう技も使える。もっと凝縮……：そうだな、ビー玉サイズにまで凝縮し、複数の光弾が連射できるようになった時点で初めて実戦で使える。今日からは、これを訓練メニューに加える」

空間を操る能力、か。ということは、K・Tにも使える技なんじゃないのか。

「私たちが対戦した時、K・Tは全力じゃなかった。あの時我々に見せていない能力を、隠し持っている可能性は高い。だがそれでも、クーリがその技を使えることは知らないはずという一点にのみ、この技を修得しておく意味がある」

見せていない能力？——待てよ、あのパチンコ！

「ガラ！俺、K・Tにリモコンを弾き飛ばされた。そのときあいつパチンコを使つて、俺の手が痺れていたけど、パチンコの玉みたいなのは全然見当たらなかったぜ」

「ほう。じゃ、奴は空気を圧縮し、それを玉のかわりに使っていたのかもしれない。他に何か、変わった能力を使っていなかったか」

俺は考えるまでもなく、すぐに思い出した。

「そういえば、K・Tの奴、めっちゃ身体が硬くなつてたぞ。加速状態の俺があいつの延髄を蹴っても、ダメージを受けたのは俺の足の方だった」

俺の言葉を聞いて、ガラは眼を細めた。

「硬化化か。それに対抗できそうな能力を持った奴をひとり知っているが……。あの役立たず、こつちに戦線復帰できるまでに、最低あと一週間くらいかかるだろうな」

「一週間、か」

俺は、俺とガラの共通の知り合いの顔を思い浮かべた。一緒にイギリスからやってきた相棒。あれだけ罵りあっていた奴でも、これだけ会えないとなると想像以上に心細いものだ……。

ガラが唸り声を上げたことで俺は我に返り、弱気な自分を戒めるため両手で頬を叩いた。

「他の幻妖の復帰も似たような時期だろう。ということはスパイども、それまでに何らかの行動を起こす可能性が高い。となると——」
その先は俺にも想像できる。ガラを遮り、自分で言った。

「それよりも先にK・Tとの再戦がある、ということか」

命の期限を切られたかのような緊張に、俺は思わず生唾を呑み込んだ。

次の休憩の時、ガラの要求に従って一旦ロフトに戻った俺は、リカが起きないかひやひやしつつ筆記用具を揃え、再びナジールに戻った。

ガラは定規やコンパスと鉛筆を器用に使い、紙の上に図形を描き始めた。

まず円を描き、それを五等分して円周上に小さな丸を書き込む。紙面上部にひとつの丸、中央上寄りの左右にふたつの丸、下端寄りの左右にふたつの丸。それぞれの丸を直線で結び、五芒星を描く。

そして、中央上寄り左右の丸を結ぶ直線の中央にも小さな丸を追加。

「あ、この五芒星……」

「なんだユーリ、知っているのか」

訝るようにこちらを覗き込んでくるガラに、俺は中国人ナジアが持っていたノートのことを説明した。

「ノートに五芒星が描かれていたんだ。六箇所丸と、それぞれを線で結ぶ五芒星——ちょうど、これと一緒だよ」

「もしかして、今回日本に派遣されたナジアのうち、行方不明になったナジアか？」

「ああ。暴走した幻妖に連れて行かれ、ワームホールの中に消えた。以後、何度も同じ場所に行っているが気配さえ感じられない。彼のノートには、“組織の中にスパイがいる”ってキーワードも示されていた」

ガラは杖状の両腕を腕組みした。

「暴走した幻妖。それにワームホールか。幻妖がスパイどもの操り人形になっているのか、わけもわからず元相棒を攻撃しているのか。いずれにせよ、その中国人ナジアの安否が心配だな」

「あ、あと、俺らが派遣されている六つの学校の位置関係な。まるつきりこの五芒星の位置関係と一致するぜ」

ガラ顔つきが一層険しくなった。

「ユーリ、それ定時連絡で報告したか」

責められているのかと思い、俺は冷や汗をかきつつ答えた。

「……いや、今初めて言った」

「よくやった。報告していたら、ユーリが情報を掴んだことがスパイにも筒抜けになるからな」

意外。褒められた。

「ハルダイン教」

「ハ……？ なにそれ、聞いたことないけど、新興宗教か」

「いや、戦神を祀ったと言われている古代宗教だ。ハルダインというのはその神様の名前。最強の力を示すシンボルとして、この五芒星を採用していた。だが現存していないし、資料もほとんどない。少なくとも、現実世界側にはな」

なんだか怪しい雲行きだな。

「じゃあ、幻夢世界側にもハルダイン教ってのがあって、そっちには資料があるってのか」

「その通りだ。私の意見だけで裏付けはないが、どうやらスパイの奴ら、とんでもないことを考えていそうだな」

ガラが説明してくれた内容に、俺は戦慄した。

この五芒星は、ハルダイン攻性魔法陣と言らしい。

その直径が、大人が手を広げた状態で端から端まで届く程度であれば、個人で扱える程度の武器がひとつ呼び出せる。

そしてそれこそが、対K・T戦に備えてガラが俺に授けようとしている切り札としての必殺技なのだ。

しかし、巨大なサイズの魔法陣となると……。

「過去に何度か、例があるらしい。現実世界側でも、幻夢世界側でも数回ずつな。相当な数の生贄を捧げ、巨大魔法生物の召喚や広範囲に及ぶ破壊魔法など、どれもろくな結果を招いた試しがない」

「あんまり聞きたくなえけど、どんな結果を招いたんだ」

「数人から数十人のナジアを生贄に、術者が魔法陣を起動。魔法陣の内側は一種の結界を形成し、術者が魔法陣を解くまで誰も出られない状態になる。結果として、ある時は巨大魔法生物が現れ、術者の制御を振り払って三日三晩暴れ回り、魔法陣の内側に生きて動く者がいなくなった時点で消滅。ある時は大爆発が起き、魔法陣の内側にいた術者を含む全ての生き物が消滅。幻夢側の記録に残ってるものは、どれもそんな感じだ」

冗談じゃねえぞ、オイ。

「何考えてんだ、くそスパイども」

「奴ら、ワームホールを通じて各校をつなぎ、巨大な魔法陣を形成するつもりだ。生贄はおそらくウイルスナジア。ウイルスナジアは幻夢属性のナジア……。おそらく、巨大な魔法陣の結界内は幻夢世界の環境に作り替えられることになる」

それはつまり結界内に暮らす現実世界の人間が全滅することを意味する。

「……止めねえと。今すぐ止めねえと！」

「とにかく、K・Tとの再戦に備える一方で、同時進行で魔法陣の起動を阻止しなければならない。しかも定時連絡での報告をせず、ナジール内では私が、現実世界ではユーリが動くことで」

「おいおい、コトがコトだぜ。間に合わなかったら洒落にならねえじゃんか。とつとと報告して、《監視機構》全体でスパイどもの動きを封じた方が得策じゃねえか」

「ところがそういう情勢ではなくなってしまったのだよ」

クソ親父の声がした。俺はもうのけぞらねえぞ。ガラも落ち着いて、スピーカーを取り出した。

「どういうことだ、クソ親父」

「つーかまっちゃったよーん」

……。どこから突っ込めばいいかわからん。

「日本支部は虫の息だ。スパイども、軍隊にたとえればクーデターでも起こすつもりで周到に準備していたらしい。《監視機構》を売

つて、幻夢の連中の犬として働くつもりのようなね、奴らは。私も結界魔法を施された部屋に軟禁されている。私の息がかかった逆スパイたちとも連絡がとれん。最早、奴らが把握していないのは、ガラのナジールに直接連絡できるこの通信装置のみだ」

俺は額に手を当てた。

「なんてこった」

「どうやら、幻夢の大ボス——アンドロイドもが“あの方”と呼ぶ人物が直接動きだしたようだ。魔法陣の内側を幻夢側の環境に作り替え、こっち側の人間が全滅。それをデモンストレーションして全世界の《監視機構》に本格的にケンカを売るつもりだな。我々の希望は、ユーリ、お前と、名細亜学園に潜り込ませたさ——」

回線が途切れた。

「なんだよ、最後まで言えよっ」

「心配ない、ユーリ。あの方は不死身だ。だからこそスパイどもも、戦士を引退したにもかかわらずあの方を殺すこともできずに軟禁しているのだ」

「あんな奴の心配なんかするか！ それより、俺たちの状況の方がよっぽど心配だぜ」

孤立無援、時間もない。いまさらウイルスナジアを狩っている場合ではあるまい。今俺がすべきことは——

「現実世界に潜む“術者”をひっ捕まえて、魔法陣の起動ができない状態にする！」

だが、俺には大きな障害がある。K・T。

「奴はぶっ倒す！ あと三日、いや二日で、奴と互角に戦えるよう鍛えてくれ、ガラ」

何か言いかけたガラは、俺の眼を覗き込むと、一旦開きかけた口を閉じた。

そして僅かな沈黙の後、「……いいだろう」とつぶやくように言った。

「すまない。リユーのかわりに、せめて一緒に戦ってやりたいが」

「何言ってる。こうして一緒に戦ってるじゃねえか」

ガラが差し出してきた枝の先端——葉っぱの形をした掌を、俺はしっかりと握り締めた。

皆伝

この状況では、リカに黙っている方が不自然だ。

次の日の夜中、俺はリカを連れてガラのナジールへと入っていた。

「ユーリ。恩人——シンゴは、結城老人の孫には黙っていると」

非難するガラの言葉を、俺はすかさず遮った。

「俺たちがしくじったらこの地域一帯に暮らす人間は消滅する。それにクソ親父が捕まった今、秘密もへつたくれもあるか」

「消滅？ 親父——捕まった！？」

リカにとっては全てが初めて聞く内容なのだ。彼女は目を白黒させ、こちらを見上げてきた。

全てを包み隠さず説明し終わると、リカは俯いたまま黙り込んだ。

「そんなわけで、俺は今日中にひとりの特訓を終わらせる。魔法陣の起動は、いつ誰がどうするのかまるでわからねえ。だがひとつはつきりしてるのは、場所は学校だということだ」

「——た。今週……、名……学園……屋上だ——」

「シンゴ！」

スピーカーから切れ切れに聞こえてきた親父の声にガラが呼びかける。どうやら、スパイどもには通信装置の存在に気付かれたわけではなさそうだが、通信自体はつながりにくい状況になってしまっているようだ。

「シンゴも、不自由な状況で可能な限りの活動をなさっている。我々も、できることをしよう」

「殺し屋だなんて！」

リカが叫んだ。

リカが気にしているのはその一点か。ふと、なぜ親父がリカにK・Tのことを伏せておきたかったのか気になった。

「なあ、リカ。その殺し屋、K・Tと呼ばれているが、本人は高橋貫一と名乗ったんだ。心当たりないか」

「高橋——！……っし、知らない」

明らかに顔色が変わった。

「ご両親の仇。そうなんだな」

リカは首を横に振るが、その表情は肯定の意を示している。俺は確信した。

「だめ、ユーリ！ 仇討ちなんて考えないで。そう言ったのはユーリでしょ。ユーリが、ユーリが……」

多分、“死んじゃう”と続けたくて、その言葉を言えないのだろう。俺は苦笑した。

「ほつとしても奴は来る。降りかかる火の粉を払うだけさ。今回はちよつとばかり、火の粉の勢いが激しいみたいだけどな」

なおも食い下がろうとするリカの肩を、ガラがやさしく包み込む。「大丈夫、ユーリは私が死なせない。そのための非常手段も持たせてある」

「非常……手段？」

「あ。“マツチ箱”のことか。これって、必殺技修得しても有効だったのか」

思わずポケットから“マツチ箱”を取り出してしげしげと眺めていると、ガラに突っ込まれた。

「当たり前だ。……というか、どんな想像していたんだ、ユーリ」

「う。ま、まあそれはそれとしてだ、リカ。別に俺は玉砕覚悟みたいな悲壮な決意で挑もうってんじゃないやねえ。K・Tの野郎はぶっ飛ばしたいが、俺は殺し屋じゃないからな。今さらどう鍛えても、奴の優位は変わらない。一発ぶちかましてケツまくるだけさ」

しばらく邪魔されたくないの、ぶちかます一発はできるだけキツいのをくれてやりたい。だがそんなことより、中学と高校あわせて六校に及ぶ区域の全住民が消滅するかも知れない事態をこそ、どうにかしなければならぬのだ。

* * * * *

「我、破邪の祈りを捧げる者なり。聖ハルダインよ、我が喚^よび声に応えたまえ。我が手に聖なる武具を授けたまえ」

声の大きさや高さについて、ガラには散々注意を受けながら、俺は何度目かの祈りを捧げた。順を追って、手を様々な形に変えては組合せ、遅すぎず、早すぎず……。

俺の微弱的な空間操作能力を応用すれば、虚空に魔法陣を描くことも簡単にできた。後はガラに教わった通りに祈り——ガラによれば祝詞でも呪文でもないと言う——を捧げ、順に六つの印を切ることで、ハルダインに認められた場合に武器を得るのだと言う。

なんだか眉唾ものだが、これが切り札だと言うのだから信じないわけにはいかない。

「真面目にやれ、ユーリ」

「うっせ。ふざけてるように見えるか」

それからさらに何度目かの祈りを捧げた時、五芒星の魔法陣の外側に二つの同心円が現れた。円に囲まれた内側に、一見して梵字を思わせる形の文字が浮かび上がり、それらの文字が時計回りに回り出す。

「来るぞ、ユーリ」

俺は右拳を軽く握り、親指側を自分の腹に押し当てた。すると、腹と拳の隙間から強烈な輝きが漏れ始める。

ゆっくりと右腕を前に出した。

今、俺の右手は、燃えるように紅く輝く炎の剣を握り締めていた。「やったな、ユーリ。ハルダイン神が応えたぞ」

だが、俺は浮かない顔でガラに聞いた。

「なあ、ガラ。たしかに強そうな剣だけどさ。これ、呼び出すのに時間かかりすぎじゃね？ 実戦じゃ使えそうにないんだけど」

「……………」

沈黙が訪れた。思わずガラの目を見る。げ、目をそらしやがった。「よし、ユーリ。今日中に第一の必殺技、ビー玉大の光弾を連射できるようにするぞ」

はいはい、やりますよ。……ってか、今思いついたんだよな、それ。

適度にすきまをあげ、等間隔に置いた十個の空き缶に狙いを付ける。

軽く開いた両手の指先に意識を集中。

程なく十粒のビー玉大の白光が現れ、輝きを放つ。

行け！

「七つ命中、三つ外れ！ 集中が足りないぞ、ユーリ」

「っしゃ！ もう一回だっ」

「だめだ。適度に休憩をとりながらやる。もう、いつ実戦になってもおかしくない。無駄に疲労を残すような訓練は逆効果だ」

ガラに制止され、リカのそばによると、彼女は呆けたように呟いた。

「ユーリ……。いつのまに、こんなことが……」

「ああ、よくわからないんだけどさ。これって多分、俺自身の能力ってわけじゃなさそうだぜ」

俺の言葉に、ガラが聞き返してきた。

「どういうことだ」

「中国人ナジアに出会ったあの日、とてつもない気配を感じて気が遠くなりかけた。今思えば、あの時点で魔法陣の下準備はかなり進んでいたんだろうな」

魔法陣が集めるハルダインの力。あの五芒星の意味を知り、作法を知る者であれば、この地域の巨大な魔法陣の中にいる限り、ハルダイン攻性魔法陣を活性化させやすくなっているのではなからうか。「十分に考えられるな。だがユーリ、空間を操る能力に関しては、お前の努力の賜物だ。七割の命中率ならぎりぎり及第点と言えなく

もないが、十発が十発とも当たるようになればK・Tの奴に一泡吹かせてやれるぞ」

言い終えた途端、ガラ表情が険しくなる。

「奴か！」

ガラが睨み付けるナジールの壁面から、何かが侵入してきた。

「紙……飛行機？」

リカが小首を傾げながら言う。それはたしかに、紙飛行機だった。測ったように俺の足元に落ちたそれを、拾い上げて開く。

「用意は整ったか、少年。明日夜十二時にやり合おうぜ。因みに、明後日は俺様の雇い主のイベントがあるそうだ。夜十二時、学校の屋上だそうな。俺様とやりあっても命があつたなら行ってみるがいさ。ま、そんなことありえないがな。K・T」

読み終えた俺は、口をへの字に曲げて半目で紙を睨み付けた。

「余裕っつーかなんっつーか。てめーは絶対ぶっ飛ばす。絶対だ」

とつくに消えてなくなっている炎の剣の影響がまだ残っていたのか、中指を突き立てた俺の掌の中で紙飛行機はめらめらと燃え上がった。

重圧

「ユーリ、それ……熱くないの？」

リカに言われて、初めて気がついた。

K・Tからの再戦予告状は俺の掌の中でまだ燻っている。だが全く熱くない。手を開くと、黒い煤が粉々に飛び散った。

ガラが俺とリカの間割って入り、いつもの訓練の口調で指示を出した。

「ユーリ。あちらを向いて、剣を構える姿勢をとれ」

言われるままにした刹那――

「おおっ」

先ほど消したはずの炎の剣が出現した。

「よかつたなユーリ。実戦で使えるぞ」

「便利じゃねえか、ハルダイン教。俺、出家しようかな」

「いや、現実世界側の代表的な宗教のひとつ、キリスト教のような洗礼はハルダインにもあるが、出家という概念はない」

「真面目に答えてんじゃねえよ、ガラ。気分だ、気分」

「ふふふっ」

おお、リカが笑った。ただそれだけのことが、なんだか大切なことのような気がする。

「約束よ。絶対に、無理しないでね」

俺は親指を立てて見せた。残念ながら、今のは自分でもあまり様になっていなかったと思う。それも仕方あるまい。この笑顔の前ではダイヤの輝きさえ色褪せて見えることだろう。そして俺は、リカの笑顔を守るためなんなんでも――そう、なんだってできる。

聞こえてきた咳払いのお蔭で、ガラがそこにいることを思い出した。ガラは遠慮がちに俺に目配せをすると、リカに向かって声をかけた。

「リカ、今見た通り、ユーリの手にはハルダインの武器が授けられ

た。おそらく、六校をつなぐ巨大な魔法陣がある限り、さつきまでユーリがやっていた祈りの手続きを踏むことなくいつでも炎の剣を呼び出せるだろう」

ガラはそこで言葉を切った。リカは黙ったままうなずき、続く言葉を待った。

「それはつまり、ユーリがハルダイン神によって選ばれたということだ。その彼が、殺し屋ごときに負けはしないだろう。いや、負けるわけがない」

初めてガラに本当の意味で褒められた気がする。しかし。

「嬉しいね、ガラ。でもプレッシャーきついぜ」

「自覚しろ、未熟者」

ありや。俺の方へ振り向いたガラ、いつもの口調に戻っちまった。「ユーリが選ばれた意味——それすなわち、巨大攻性魔法の発動はハルダイン神の本意ではないということだ。私はそう信じている」

「ああ、もちろん俺もだ」

「しかし、すでに巨大魔法陣は完成したと見ていいだろう。K・Tの予告状を信じるなら、スパイどもは明日“イベント”を実行するという。他の必要な条件も揃っているのだろう」

「ウイルスナジアだな」

「どういうこと？」

事態を知らないリカに説明してやると、彼女は少なからぬ衝撃を受けた様子だった。

「そんな……。生贄だなんて！」

リストに連なる名前のうち、何人の生徒がウイルスナジアなのだろう。二十人か、三十人か……。哀れな彼らは、魔法陣の起動にあたり、この地域に暮らす何万人かの人間たちよりほんの少し早く生命を奪われることになる。俺が間に合わなければの話だが。

「お前がキーマンだ、ユーリ」

その言葉にはっとして、俺はガラをまじまじと見た。

前に、誰かに似たようなことを言われた気がしたのだ。だが、微妙なひっかかりがあつて、記憶の隅から引きずり出すのを躊躇してしまった。

「まずはK・Tを退け、巨大魔法の発動を阻止するのだ。私に出来ることはとても少なくとも心苦しいが、できる範囲のことは全てやるなるべくサポートするから……」

リカはハンカチを取り出し、ガラに寄り添うとそれをあてがった。「ガラさん、大丈夫？」

「すまない。……ああいや、泣いてないよ、リカ。しかし、私の半分しか生きていない奴に、何もかも押し付けなければならないなんて……」

「勘違いすんなよ」

俺の言葉にふたりの女性は同時に動きを止め、そろって眉をひそめた。

「俺たちやチームだ。ガラも……、リカもな。チームにや前衛と後衛がいる。今回は俺がたまたま前衛を務めるだけのこと。好きでやるうつてんだ、任せとけ！」

「ふ。言うね、ユーリ。ああ、任せたぞ」

にやりと笑うガラに「お、おう」と答えつつ、ちよつとだけガラのペースにのせられたような気がしてしまう。

やっぱりプレッシャーだぜ。

* * * * *

翌朝、俺は学校を休むことにした。夜中の決闘に備えて爆睡を決め込むつもりだ。

自分も休むというリカを、俺は無理矢理玄関へと押し遣った。

「リカと約束した以上、無理なんかしねえよ。今夜とその次に備えて、寝られるときに寝ておくまでだ。だからリカも普段通りにしてくれ。日本支部は機能していない。だけど俺らには影響なし。こ

れってどういう意味だと思う？」

「……………」

「スパイどもにとっちゃ、俺達ごとき眼中にないって証拠だ。上等じゃねえか、目に物見せてやるぜ」

もつとも、殺し屋のターゲットにされた時点で、俺はスパイどもにとつての“邪魔者”の勘定から外されているのだからうけれども。

今はそんなことどうだっていい。俺はとにかくリカの笑顔を見た
い。

「じゃ、今夜はごちそうよ。……何か食べたいものある？」

リカは俺の心を読んだかのように素敵な笑顔を見せてくれた。望んだ以上の眩しさに、俺の口は勝手に動いていた。

「……君だ、リカ」

笑顔を凍りつかせ、耳まで真っ赤に染まったりリカは、視線を逸らすこともせずに数秒そのまま立ちつくし……、やがてぼそりと言った。

「ユーリの、ばか」

心臓がはねた。頬が熱い。

こんなこと初めてだ。恋は初めてじゃないし、正直な気持ちを言葉にただけだというのに。

俺は今どんな顔をしているのだろう。何か言わなきゃ。

でもこういう時に限って気の利いた台詞が浮かばない。

「ほら、リカ。学校に遅刻するぞ」

「たまにはいいもん」

言うが早いか飛びついてきたリカの細い身体を抱きとめると、俺の耳元で淡い息遣いと今にも消えそうな囁きが聞こえた。

「大好き。……あい——」

俺は自分の唇でリカの言葉を遮った。

——全ての重圧が氷解していく。

俺もさ、リカ。

俺はリカの腰を強く抱いた後、彼女の両肩に手を置いてそつと顔

を離した。

恥ずかしげに斜め下に視線を逸らすリカに構わずその眼を真正面から見つめ……、ゆつくりと両手を伸ばした。

一瞬だけ上目遣いに視線を合わせたリカが、小さくこくんとうなずく。そうだ、同じ気持ち。

この続きは、全部終わってからだ。

再戦

K・Tの腕時計が奏でる十二時の時報。それがゴングだった。

「まずは挨拶がわりだ！」

先制は俺。勿体をつけて剣を構えるK・Tに向け、十本の指を伸ばした。

俺の十本の指から発射したビー玉大の光弾が、尾を引いてK・Tを取り囲む。

着弾は——しない。

くわえたタバコを落とすことなく、K・Tは剣を華麗に振り回す。銀色の閃光が縦横に走り、俺の光弾が数発ごとまとめて両断される。

三発、四発。K・Tの周囲に爆炎の花が咲く。

「と！」

十発目の光弾がK・Tの脇腹を捉えた——はずだった。

確かに見た。俺の光弾が虚空へと吸収されるのを。巻き起こす爆炎と奴の脇腹の間に燐光が生じ、そこに爆炎が吸収されてしまったのだ。

空間をどうにかする能力……。K・Tの奴、あんな防御法も持つていやがるのか。

「嬉しすぎるぜ少年。今度はこっちだ、はっはあ！」

理屈などではない、脳内に鳴り響く警鐘に盲目的に従い、俺はがむしゃらに転がった。

ポケットから何かが落ちた。ガラが俺に持たせてくれていた“マッチ箱”だ。

床に落ちる硬い音が複数。ぎよつとして“マッチ箱”を見た。

「ちっ。真っ二つに割れてやがる」

緊急脱出手段を失った。退路を断たれた、ってわけだ。

奴が使う剣は、空間を扱う能力と組み合わせることで飛び道具に

もなるのか。

K・Tは剣を右上段に構えながら言った。

「言つたろ、俺の剣は業物だと」

よく言つぜ。てめえが使つてるのはクソ親父から奪った剣じゃねえか。別に俺が取り返す義理もないし、たとえ取り返したところで元の持ち主はもう剣を振り回すこともできないのだが。

「借り物の武器なら、俺だつて持つてるぜ」

俺の手から飛び出した紅蓮の炎が剣の形に収束するのを見て、さすがのK・Tも目を剥いた。

「少年。てめえ、ハルダインの戦士つてわけか。……こいつは最高だぜ」

「ほつ。おっさん、知ってるのか」

K・Tは答えるかわりに目を閉じて豪快に笑い、やがて目を開くと口元に獰猛な笑みを貼り付けた。その眼光は手に持つ刀と等質の、鋭利な刃と化していた。殺し屋の本領発揮というべきか。奴の眼光に呼応するかのように、周囲の空気が冷えていく。

「少年。身に纏う雰囲気から、お前さんが何かを手に入れたことは一目でわかつたぜ。だが、まさかこれだったとはな。遠慮なく、全力で叩き潰してやるぜ」

「受けて立つぜ」

冷えていく周囲の空気に抗うように、俺が構える炎の剣は一際激しく燃え上がった。

* * * * *

ナジールの中は紫煙で煙っていた。

「よお。早えじゃねえか、少年」

声の主は悠然とこちらに背を向け、丁寧な刀の手入れをしている。K・Tだ。背も体格も俺とそう変わらないが、この隙の無さと貫録は一朝一夕に身につくものではない。改めて眺めてみても、俺とは

格が違う。

「やかましい。好戦的な気配をぶんぶんにおわせやがって。こちらで爆睡の邪魔されて不機嫌なんだよ」

「けけけ。そいつはおっかねえな」

K・Tはこちらを振り向くことなく言葉を続ける。

「別に構わなかいんだぜ、俺は。あのお嬢さん同伴でも。俺はターゲットか、俺に牙をむく奴しか殺らねえからな」

「こんなタバコ臭えところにリ力を連れてこられるわけねえだろが」「そうかい。まさか禁煙だとか言わねえよな。おじさん泣いちゃうぜ」

「武道家の癖に愛煙家とは驚きだぜ。どっちかひとつにしときなよ」

K・Tは初めてこちらを振り向き、人懐っこい笑みを見せる。その表情は、素性を知らない者にとってはどこにでもいる無害なおっさん以外の何物でもない。

「そいつを素直に受け入れるような奴なら、殺し屋なんざやってねえって」

「けっ」

「違うとは思いつつも、俺は同意するかわりに毒づいた。K・Tは再び背を向けると、刀を手入れしながら世間話のようにのんびりと話し出す。

「久々だぜ、お前さんでふたり目だ」

「あ？」

「だから、ナジアとやり合うのがさ。ひとり目は殺し損ねたが、そいつは俺とやりあって以来戦闘不能になったことで報酬をもらった。もちろん満額もらうのはプライドが許さねえから固辞したけどな。お前さんはお前さんで俺の一度目の襲撃を生き延びやがった。怪我も治ってぴんぴんしてる。報酬は今回も減額だぜ。……だが、嬉しいじゃねえか」

俺は思わず生唾を飲み込んだ。声を低くして振り返ったK・Tの目つきは、まるで狂犬だ。まあ、俺は実際に狂犬を見たことがある

わけじゃないが。

いや、そんなことより。

ナジアは俺でふたり目、ひとり目がクソ親父。……ということは、リカの両親を殺したのはこいつじゃない。仇ではないってことだ。

「ナジアじゃねえ奴の中にも強い奴はいたけどな、物足りねえんだよ。ずっと待ってたのさ、お前さんみたいに、俺のナジアとしての能力までもフル動員してやり合える奴をよ。しかも、前回の“挨拶”から時間をおいてやっただけあって、いい目になったじゃねえか、少年。ゾクゾクするぜ」

この野郎ふざけやがって。俺がレベルアップするのをのんびり待っていやがったのか。

「気持ち悪いんだよ、殺人狂が」

「おいおい、そんなに褒めるなよ。照れるぜ」

たとえ仇じゃなくても虫唾が走る。このおっさんはやっぱりぶちのめさないと気が済まねえぜ。

猛攻

K・Tの神速の剣を半ば運と勘に頼って避け続けているが、あつという間に斬り傷が増え、血だか汗だかわからない液体が身体の表面を流れていく。

対して、飛び退るK・Tは相変わらず無傷だ。炎の剣でさえ、奴の身体には届かないというのか。……いや。

このおっさん、前回よりも明らかに運動量が多いぞ。

「タバコは控えた方が良かったんじゃないかねえか、おっさん。肩で息してるぜ」

「はあ、はあ。このやろうちよこまかと」

演技の可能性もある。迂闊に踏み込むわけにはいかない。

だが、もし演技でないとしたら。

空間歪曲能力。光弾の爆炎さえ飲み込むあの能力、炎の剣の前には無力という可能性がある。

「くらえ！」

踏み込み、炎の剣による突きを繰り出した俺を、K・Tは僅かな動きであっさりとかわした。

致命的な判断ミス。俺は今、伸びきった背を無防備に晒している。獰猛な笑いを含む勝ち誇った声が降ってきた。

「甘いわ」

振り下ろす刀が、俺の背に突き刺さる——その瞬間、奴の動きがスローモーションになった。

しめた。あの方法を試してやる。

魔法陣を描いたときと同じ空間操作能力を使い、その場に俺自身の絵を描く。

これは、自分自身にぴったりとしたフィルムを貼り付け、そこから脱皮する様子をイメージしたら簡単にできた。

そしてK・Tの剣の切っ先が狙う延長線上を中心に、剣筋を変化

させた場合も想定してゴルフボール大の光弾を十個ほど、俺自身の“絵”の中に埋め込む。

そのままK・Tの斜め後方に走り込んだ瞬間、俺の意志に反して加速状態が解けてしまった。

ガラとの訓練で怪我の治癒能力が強化された半面、加速能力の発動確率だけでなく、発動した場合の維持時間さえもが落ちてしまったということなのだろう。

「な……に!？」

K・Tの驚愕の叫びが轟音にかき消され、その姿を閃光が包み込む。

至近距離での爆発、このままでは俺も道連れだ。

俺は炎の剣を正面にかざし、バトントワリングの要領で回転させた。それで爆発の衝撃が受け止められるかどうかわからない。賭けだ。

頬や脛を熱波が掠る。ひりひりするが、炎の剣によるバリアを信じて爆発がおさまるまで回転させ続けた。

いまやK・Tが立っていた場所には黒煙がもうもうと立ちこめている。

「やったか」

忘れていたわけではないが、殺し屋のしぶときは並ではなかった。稲妻を思わせる光が、黒煙を左右に割る。

銀色の光が、黒煙を両断したのだ。

立ちこめる黒煙の向こう側に、ひとつの人影が現れる。無傷のK・Tが煙を踏み越えてきた。

「楽しい。楽しいぜ、少年。もっともつとやろうぜえ」

「ち。今のでせてめてスーツに焦げ目でもついてりゃかわいげがあるのよ」

俺は、こめかみに冷たい汗が伝うのを自覚した。

K・Tが一呼吸で踏み込んでくる。

まともな斬り合いでは分が悪い。俺は下がりながら奴の胸を狙っ

た。

「ぐあつ」

簡単に弾かれ、左腕を鋭い痛みが駆け抜ける。くそ、油断していなかったはずなのに。

「引き胴はなあ、実戦じゃなかなか体重が乗らねえからおすすめはしないぜえ。生兵法つてやつだ、素人さんよ」

傷は浅くはない。だが、剣を握れないほどでもない。これなら、戦っている間に治る。

素人は素人らしく剣術を無視してやる。俺は野球のバットを振るような格好で、K・Tを炎の剣で殴りつけた。

「うお！」

不意打ちとしては効果があつたようだ。銀色の剣で受け止めたK・Tだったが、そのまま真横へと吹っ飛んだ。

少し間合いが開く。K・Tは倒れてはいない。奴のスーツの裾から一筋の煙がたなびいた。

「喜べ、少年。俺様のスーツに焦げ目を作ったのはためえが初めてだ。超・全力でぶっ潰してやる」

笑顔の質が変わっている。獰猛なのは変わらないが、どうやら奴の怒りが沸点に達したようだ。

だがこちらに炎の剣がある限り、あんな奴には負けはしない。俺は冷静に剣を構えた。

視界の隅に、銀色の稲妻が奔る。^{はし}

何が起きたか、理解するのに時間がかかった。

K・Tの猛攻が始まったのだ。

俺はぎりぎりで奴の剣を捌いていたが、上段から振り下ろされる銀色の剣を受け止めると腹ががらあきになった。

どうやら、そこを蹴られたらしい。剣技と蹴り技とのコンビネーション。

「ぐ……ふ」

俺はなんとか立ち上がったものの予想外の攻撃に動揺し、上段の

攻撃を警戒するあまりつい無様に逃げ回ってしまっ

「どうしたどうした、もう終わりかあ」

まだだ。足を止め、奴を睨み付ける。

「そうだあ、そうこなくちゃなああ」

銀色の閃光が迸る。

迎え撃つ赤色が、真横へと流れていく。

奴の剣を受け止めたはずの炎の剣が――俺の手を離れ、弾き飛ばされてしまったのだ。

「それなりにヒヤリとさせられたし、まあまあ満足できたぜえ、少年」

K・Tは振りかぶった銀色の剣を頭上で止め、心の底から満足そうに呟いた。

「お前さんほどやり合える奴はそうそういないから名残り惜しい。

本当に、何度でもやり合いたいくらいだ。だが俺のスーツを焦がしやがったからな。せめて一息にあの世へ送ってやるぜ」

繰り返す夢の中で俺を斬り刻んできたあの剣が、今こそ本当に俺を斬りつけようと頭上で狙いをつけている。

そしてK・Tは宣言通り、容赦ない速度で俺の肩口へと袈裟斬りに振り下ろした。

諦めてたまるか！

訓練の時に一度描いた魔法陣。イメージをそのまま腹のすぐ前の空間に投影。

「寄越せ――俺の武器をつ」

相棒

祈りの手順は完全に無視。

だがあなたなら応えるはずだ、ハルダイン神。

白く輝く五芒星。その周囲に古代文字が浮かび上がり、時計回りに回転する。

銀色の剣が俺の肩口に到達するかというその刹那、肉を裂く鈍い音のかわりに高い金属音が響き、火花が飛び散った。

緑色の目映い光が幻惑を誘う。剣を弾かれたK・Tは体制を崩し、片膝について目をしばたいた。

俺の腹から尾を引いて輝く緑色の光——その正体は、俺の右手に巻き付いている剣。

「よう！ よろしくやってたか、相棒」

「うるせ。お前ばっかり休んでんじゃねえ」

「呼ばれて飛び出てジャ——」

「世代を選ぶギャグはやめてくれ」

立ち上がり、間合いをとったK・Tはすでに落ち着き、剣を構えている。

「幻妖か。この間の奴とは違うな」

薄笑いを浮かべて呟くK・Tに、俺は自分の右手に巻き付く剣の切っ先を向けた。すると、剣身の柄に近い部分に目が出現する。

「紹介するぜ、K・T……。俺の相棒、リユーフィンだ」

「なに、K・Tだと！？ こいつがああ殺し屋か」

「俺様、有名人だからねえ。サインは何枚欲しいんだ」

K・Tの軽口に対し、俺とリユーフィンは同じベクトルの氷の視線を突き刺してやる。わずかな間をおいて苦笑したK・Tは俺に向かって告げた。

「ふん。ハルダインの武器を拾わなくていいのか、少年。待ってやってもいいんだぜ」

見ると、俺の手を離れた炎の剣はおよそ十メートルほど後方に転がり、赤々と燃えている。

剣身に目を出現させたままのリユーフィンは、K・Tを半目で睨んで言った。

「わかつてねえな、殺し屋。俺とユーリのコンビは最強なんだぜ」

「そうかい」

それを合図に斬りかかってくるK・Tの剣を、俺は最小限の動きで捌いた。

加速状態になっているわけではない。だが奴の動きが見える。

リユーフィンが軽い——いや、どうやらリユーフィンが俺の無駄な動きを抑制し、K・Tの動きに対応するためにリードしてくれているようだ。

次第にK・Tの表情から笑みが消えていく。今や、ガラとやり合っていた時のあの真剣な表情に変わりつつある。

「て……めえ。いきなり……レベルアップ……しやがって」

K・Tが剣の柄から左手を離すのを横目に捉えた。

奴の剣を下から突き上げてやる。右脇腹がから空きだ。

今だ！

返す刀でリユーフィンを横薙ぎに払う。緑色の閃光がK・Tの胴体を直撃。

火花が散り、リユーフィンが弾かれる。

「っ……………！」

痛みは後から襲ってきた。俺も奴からの一撃を貰っていたのだ。

左肩から出血、とりあえず動くので痛みを無視。

「ぐう。なかなか効いたぜえ」

K・Tは薄笑いを浮かべているが、額に浮かぶ脂汗を隠そうともしせず右手で剣を構え、左手で右脇腹を押さえている。

俺は追撃を警戒して身体を回転させ、間合いを取ってリユーフィンを構えた。

「アンドロイドかてめえは。今のを弾くとは」

リユーフィンが呆れたように言う。

それには答えず、K・Tは軽口を叩く。

「ふん。このスーツ、もう着られねえな」

「なありユーフィン。あいつ、硬質化能力があるらしい。お前、奴より硬くなれるか？」

「誰に聞いてんだ。……ってか、そいつはユーリ次第だぜ。俺はお前を信じてる」

「オーケイ、リユーフィン。俺もお前を信じるぜ」

やってやる。K・T、覚悟しやがれ。

今度はこちらからK・Tに斬りかかった。

しかし、K・Tは先ほどよりもさらにスピードアップしている。下手に目で追わず、勘とリユーフィンのリードを頼りに捌く。

頭上で弾ける火花や背後で響く金属音に一瞬でも気をとられると、その瞬間にK・Tは死角へと滑り込み、見失ってしまうのだ。

K・Tの動きには、俺とリユーフィンのコンビネーションをもつてしてもついていくのがやっとだ。なかなか突破口を開けない。

「それなら、てめえの剣ごと―！」

リユーフィンは硬い。リユーフィンは硬い。

「リユーフィンは硬いっ」

右手を振り上げると、その軌跡に鮮やかな緑色の残像が描かれた。緑色の閃光は、俺の眼前に迫っていた銀色の閃光とぶつかり、大きな火花を散らす。

「行っけえ」

かまわず俺はリユーフィンを振り抜く。その刹那、銀色の閃光は輝きを失ってふたつに割れる。

高い金属音が響き渡り、長い余韻を引きつつ高く低く揺らぐ。

奴の剣が柄に近い部分で折れ、回転しながら切っ先が飛んでいった。

「終わりだ」

リユーフィンをいつもの姿に戻し、俺は右拳を強く握った。ハル

ダインの炎が俺の拳を包み込む。

気合いをこめ、K・Tの顔を殴りつけた。

手応えは——ない。俺の拳が止まっている。

しぶとい奴。K・Tの頬と俺の拳との間に、空間歪曲の燐光が生じる。

しかし古代神の炎は空間歪曲をじわじわと無効化し、拳は奴の頬に到達した。

「うおおおお」

鋼鉄を殴りつけたかのような重い衝撃に、俺の拳が悲鳴を上げる。

——ハルダインの炎が！　こんな奴に！

「負けるものかよ！」

強引に、右腕がまっすぐ伸びるまで拳を叩き込んだ。

吹っ飛び、背中から床に落ちたK・T。そのまま数メートル後方へと滑っていく。

見届けた俺は床に片膝をつき、肩で息をした。

沈黙が訪れる。

K・Tは大の字に転がったまま動かない。脳震盪を起こしたようだ。

K・Tには訊きたいことがある。そのためにも、今のうちに縛り上げておかなければ。

「ユーリ！」

リユーフインの切羽詰った叫び声に思わず振り向いた、その瞬間。

閃光と轟音。ナジールが真っ白に染まる。

視界が白一色に塗り潰される。

白濁する意識の中、白い世界が緑色に染まるのを確かに見た——

両親

熱い。痛い。

無理矢理目をこじ開けたら、倒れている人が見える。

燃え盛る建物を背に、路上に突っ伏したひと組の男女。

「ズマナ！ オギユステイーヌ！」

親父の叫び声だ。

「シンゴ！」

倒れていた男女のうち、男が叫んだ。見ると、男の周囲の路上には炎とは違う鮮明な赤色。それが何かを理解して、俺は慌てて目を閉じた。

「しゃべるなズマナ。なんとしてでもここから助け出す」

「聞いてシンゴ。私たちはもう助からない」

女の人。つい反射的に目を開けて、俺は再び目を閉じた。さっきは気付かなかったが、女の人の背には棒状の何か——焼け落ちた建物の建材か、爆発炎上した乗用車の破片か——が突き立っていたのだ。

「ユーリを、ユーリをお願い！ フランスに送り帰してはだめ。あなたが——」

「すまない。私の力が足りないばかりに……」

地面が遠くなる。俺は抱え上げられた。

待て。待ってくれ。お父さんとお母さんが……。

そうだ！ 待ってくれ、親父。ここに倒れているのは俺の両親なんだ！

熱い。痛い。

視界が炎の赤に染め上げられ、やがて白濁し——

「聞こえなかったのか、誠太^{せいた}」

声が聞こえる。この声、また親父か。

見ようと思ったが、目が開かない。

「ユーリは、私が育てる」

踏み込む足音。誰かが、親父に詰め寄ったようだ。

しかし“育てる”とは何事だ。今更何を言うやら。

「……んだと慎吾。あんたはもうすぐイギリスに行くって決まってるんだろうが」

この声、どこかで聞いたような。

「まあ落ち着けや、誠太。ユーリの存在は幻夢の連中に知られていく。比較的強力なナジール反応を示すから、連中ももう何度もちよつかいをかけてきた」

「わかってるぜ、慎吾。ユーリの外見がほぼ拾った日のままなのは、連中の襲撃をかわすために何度も何度も両世界を往復した結果なんだからな」

拾った日のまま？ そうか、これは俺の記憶だ。

おそらく十二年前、イギリスに渡る直前だろう。《監視機構》に操作され、鍵の付いた引き出しの中に隠れていた記憶。

「連中も馬鹿じゃないわ。この方法もそろそろ限界よ。それに、慎吾はもう——」

女の人の声。この声にも聞き覚えがある……ような気がする。

「私はもう戦えないってか。そうだな、だからこそ私は幹部になった。今やイギリスのスタッフだって動かせるんだよ、愛美^{まなみ}」

しばしの沈黙。

「今さら言うことじゃないけど……。いくら辛い記憶だからと言っても、実のご両親の記憶を消してフランス語まで忘れさせ、かわりに日本語を刷り込むなんて反対だったわ」

「またその話か」

うんざりした調子を声に乗せて言う親父を無視し、愛美は話を続ける。

「この子がユーリ・シルベストルとしての記憶を持ったままでは、フランスの親戚が引き取ることになる。でも親戚の中には《監視機

構》の関係者がいないから、この子をフランスに帰したら無防備になる。そこで、ユーリはここで両親と一緒に亡くなったことにする……。それが一番いい方法だったわよね、わかってる。わかってるの」

再び沈黙が訪れる。愛美の話をそれ以上遮る者はなく、皆黙って聞いている。

「ユーリ自身の意志も希望も全く考慮しない日本支部の独善的な決定に、最終的には私も合意した。そうである以上、私たちにはこの子を育てる義務があるわ」

「だーかーらー。何度言ったらわかるのかね。ユーリの母親が名指しで私に託したのであって、日本支部の独断ではないのだと。彼女との約束を守るためにも私に任せると言っているのだ。イギリス支部のスタッフは他支部と比べても数が多く、優秀なのが多い。ユーリを守るには理想的な環境なのだよ。そうは思わないかね」

溜息が聞こえた。女の人——愛美が「大事なこと、忘れてない？」と呆れたように問いかける。

「佐々木さん。あなた一人で育てる気？　いくら《監視機構》のサポートがあると言っても、シングルファーザーではいろいろと無理があるわ」

「愛美の言う通りだ。俺たちに任せなつて。ここには親父だっているんだし」

誠太が愛美を支持する。……そうか、このふたりは夫婦なんだな。「わからないのかね？　だからこそ心配なのだよ。お前たちは、おやっさん含めて三人ともナジア、珍しい家族だ。もつとも、おやっさんの強さは有名だから幻夢の連中も滅多なことでは襲って来なかったのだからね」

「だからこそ、ユーリにとってここは安全——」

誠太の言葉を皆まで言わせず、親父が溜息を吐く。

「ユーリが加わったら安全ではなくなる。格好の標的だ。……確かに、守るべきものがあれば人は強くなれる」

何かを言おうとして口ごもる誠太の様子が伝わってくる。言葉にならない音が彼の口から漏れたのだ。

「お前たちには娘さんがいるじゃないか。その子を守ることにこそ全力を尽くしたまえ。私は元戦士として全力でユーリを守る」

親父、結構いい奴じゃん。思えば、俺がリユーフィンと出会えたのも親父のお陰なんだよな。

俺にはフランス人の両親がいた。イギリスに帰ればそこにも両親がいる。そしてこの日本にも、親父のほかに俺の両親になろうとしてくれた人たちがいた。

恵まれている。素直に、そう思う。亡くなったフランスの両親のことは、いつか必ず詳しく聞こう。……親父に。

「しかし、慎吾。それではお前の負担があまりに――」

「イギリス娘に求婚してオーケーもらっちゃったのさー。連れ子でも構わないって。あっちで甘い生活が待ってるんだー、ボク」

……………。

「あ、ちなみに私、フランス女と死別した哀れなヤモメって触れ込みなんで、そこんとこよろしくねー」

……一瞬でも感動して損した。俺の感動を返せ、クソ親父。

* * * * *

ベッドの上だ。俺は、助かったのか。

両腕は――動く。

両足は――動く。

痛いところはたくさんあるが、耐えられないほど酷いものはひとつもない。

目を開く。眩しいが、ちゃんと見える。

なんだかリアルな夢を見ていたような気がするのだが、思い出せない。

上体を起こす。

「ユーリっ」

リカに抱きつかれ、俺の胸で微かに震える黒髪が視界を埋め尽くす。

その背に手を回し、黒髪に頬を寄せて「ただいま」と呟いた。

しばらくそのままの姿勢で、頬に触れる艶やかな黒髪の感触だけを俺の世界の全てにした。

ロフトだ。外が明るい。翌日になってるのか。

「K・Tはどこだ。いや、その前に今何時だ」

「時間は……六時よ」

リカはゆっくりと身体を離して時間を告げる。その背後で人影が動いた。

「最初の質問にはわしが答えよう。K・Tは抜け目のない奴だ。あれは自爆などではなく脱出手段の一つなのじゃろう。いささか迷惑なタイプの、な。仕事を失敗した場合の保険のようなものだと思う」

「爺さん！ 久しぶりだぜ」

青い作務衣が懐かしい。リカの肩を抱く結城老人を見て、俺は思わず頬を緩ませた。

ふと、ぐるりと部屋を見回す。相棒の姿がない。

「リユーフィン！ リユーフィンは無事かつ」

「おうよ、相棒。……無事とは言い難いな、満身創痍だし。俺たちを爺さんが拾ってくれなきゃ、正直危なかったぜ」

リカの部屋から声が聞こえた。リカが歩いて行って扉を開ける。

包帯だらけの観葉植物が、リカのベッドに横たわっているのが見えた。ベッド脇にはガラの姿も見える。リユーフィンの治療は終わってて、ワクチンも持って来たってことだな。K・Tとの戦闘中には、そんなこと全く頭になかったぜ。

「今夜の“イベント”には間に合うぜえ。幻妖の身体は頑丈にできているんだからな」

強がりを言いやがって。あの爆発の中でお前が俺を包み込んでくれたんだろっ、リユーフィン。

「ばかやろう」

俺の言葉に対し、リユーフィンは葉っぱの指でサムアップの真似をしてみせた。

ばかやろう。……………ありがとう。

「なんて顔をしているんだ、ユーリ。お前の怪我也、普通の人間なら入院ものの酷さだぞ。まずは自分の心配をすることだ」

ガラは俺を見ると窘める口調でそう言い、続いてリユーフィンを見下ろすと呆れた口調で吐き捨てた。

「リユー、お前という奴は。弱いくせに無茶すぎる」

「何だとお、ガラ！俺とユーリのコンビは最強だったの」

「ふむ。唯一私が嫉妬する点があるとすれば、リユーが最高の相棒に巡り会った点だな」

「ええっ、そこだけ！？」

「お前たちはふたり揃えば最高だ。だが裏を返せばひとりずつなら半人前ってことさ」

冷たい口調で告げるガラだが、その視線はさりげなくリユーフィンの巻かれた包帯の状態をチェックしている。やっぱり、ちゃんと心配しているんだ。

「リユーちゃんとガラさん、仲いいね」

につこりと笑うリカを見たガラは、こちらに背を向けてしまった。心なしか、頬が赤く染まっていたような気がする。

リカは台所へ歩きながら、俺に声をかけた。

「朝ご飯にしよう、ユーリ。今日も学校、休むんでしょ」

「いや、考え中だ。今日は休む理由がねえからな」

「じゃ、急いで支度するね」

そう言つと、リカは手際よく朝ご飯の支度を始めた。その様子を見届けると、俺は結城老人に目配せした。

——聞きたいことがあるんだ、爺さん。

内庄

俺は登校することに決め、いつものようにさつきとユウジがいる教室へと入った。

すると程なくあの田嶋真由美が入室してきて驚いたが、前後して登校してきた数人の女子が田嶋を取り囲んで話し掛けたのであまり様子をうかがうことができなかった。ただ、田嶋はどこか呆けた感じながらもものろのろと、取り囲む女子たちと二言三言会話を交わしていたようだ。

一方、いつものように背筋を伸ばして教室に入ってきた原田は、田嶋を見て小さくうなずいてから自席へと向かう。前から思っていたが、原田というのは高校生らしからぬおっさんじみた仕草が似合う奴だ。

ほとんどの席が埋まる頃、柿崎がやってきた。彼は田嶋にも俺にも興味ないかのように、例の鷹の視線で原田のことを睨み付けていた。その視線には、殺気が込められている。

例えば俺が柿崎に例の視線で睨まれたのは登校初日が最初だが、その時には殺気が感じられなかった。

その後、田嶋邸を訪ねた際にも柿崎に睨まれているが、その時は殺気を放っていたはずだ……、確認したわけではないが。そして今。

——奴が殺気を放つ時、その視線の先には常に原田がいたのでは。柿崎がなぜ原田を。劣等生による優等生への単なる逆恨みか。それにしても視線に込められた殺気が強すぎる。

マークすべきは田嶋か柿崎か、あるいはそのどちらでもないのか。いずれにせよ、今夜の“イベント”を控え、屋上が開放されるのかされないのか、されないのであれば鍵を入手する方法など、多少の非合法な手段を顧みず手を打っておく必要がある。

そんなことを考えていると、担任の大沢先生が教室に入ってきた。相変わらずの希薄な存在感だが、生徒たちは一応静まりかえり、朝

のHRが始まる。

「えー、本日放課後、屋上の改修工事が行われます。正午ごろから業者さんが入りますが、終業までは大きな音はたてないように作業するとのことです。正午以降、南舎東端の階段が一階以外閉鎖されますが、業者さんの邪魔になるので皆さんは近づかないように」

そうきたか。ひとまず、鍵を盗んでおく必要はなさそうだ。終業時間まで休息することに決めたリユーフィンがどこまで回復するか気がかりだが、間に合わなければガラと組むまでのこと。あれだけの特訓を受けたのだ、彼女とだって息が合わないわけがない。

K・Tによる予告の真偽については念頭になかった。

目を開けている時はそうでもないが、閉じた途端に瞼の裏にハルダイン攻性魔法陣が浮かび上がる。登校してからずっとだ。ちりちりと全身を焦がすようなプレッシャーに苛まれ続けている。

昼休みになった。いつものようにさつきとユウジを伴い、食堂へと移動した。先に四人分の席をとっていたリカは、俺の顔を見るなり前置き抜きで話し掛けてくる。

「今日ね、井貝くんが登校してきたの」

井貝——井貝泰造。一年四組、リカのクラスメイトにしてウィルスナジアリストに名を連ねる生徒だ。

「どんな様子だった」

「黙々と自分のことだけやってる。欠席前と変わらない……かな。もともとあんまり他の子と話さないタイプだし」

ユウジが俺の肘をつつき、視線で食堂の隅の方を示す。見ると、そこには二人掛けのテーブルにひとりで座っている男子生徒の姿があった。

「？」

視線で問うと、ユウジは小声で教えてくれた。

「二年一組の森田だ。あいつも今日は出席してる」

森田浩二。彼もリストに名を連ねる生徒のひとりだ。弁当ではな

く学食のカレーを黙々と口に運んでいる。

「話しかけないの」

さつきが聞いてきたが、今はウイルスナジア“容疑者”に興味はない。俺は曖昧に答えた。

「また今度にするよ。ほら彼、イギリス人の俺でも感じるほど近寄りがたい空気を纏っているし」

早めに食事を終えた俺は、南舎東端の階段へと様子を見に行った。校舎外側から一階階段へと続く下駄箱は外側からしか出入りできないように虎柵が設置されている。手書きで“一般生徒立ち入り禁止”と殴り書きされた貼り紙と共に。

校舎外側に設置された虎柵は駐車場まで続き、大きく解放された駐車場には建設会社のトラックが駐まっている。思わず感想が口を吐いて出た。

「おいおい、カムフラージュにしてもお粗末すぎんだろ」

駐車場にはトラックの他にも同じ建設会社の社名がペイントされたワゴン車も駐まっていたが、トラックの荷台には土砂だの折れ曲がった標識だのが積まれていた。校庭の工事ではあるまいし、一体屋上の何を改修するというのか。仮にどこかの工事と掛け持ちだとしても、わざわざ学校に土砂や標識を持ってくる意味など考えられない。

* * * * *

今日最後の授業は、担任である大沢先生の授業。そして今はその時間中である。だが、教室内に大沢先生はおらず、生徒の数もごくわずか。わずかに残る生徒たちも、そのほとんどは読書をしたりメーイルをしたりといった状態だ。真面目な生徒は図書館で自習しているのだろう。ひょっとしたら、すでに帰ってしまった生徒もいるのかもしれない。

「突然の休講。まるで大学だな」

俺はそう眩き、ユウジを見た。ユウジは自習をしている。意外と真面目なんだな、と感心していると、同じく自習中だったさつきが手を止め、振り返る。

「珍しいけど、他の科目でも先生が突然体調を崩してその日の授業を中止することがあるわよ」

一年生の時は年に二、三回だったけどね、とユウジが補足する。

俺は適当に相槌を打ちつつ、教科書も出さずにあらためて教室内を見回した。俺たちを含めてもひとけたしか残っていない。

「そう言えば大沢先生、朝のHRの時は居たよな」

俺は確認をとる口調でさつきとユウジに聞いた。

「えーと」

「居た……わよね」

居たのかどうかの記憶さえ曖昧になってしまっただけで影が薄い担任に少しだけ同情。

「ああ、自習の邪魔してすまん。俺、終業のチャイムまで寝る」

机に突っ伏して目を閉じた。すると、途端に襲ってくる不快感に顔をしかめる。

——ああ、気持ちが悪い。

違和感が俺の身体中を這い回る。まず、瞼の裏に例の五芒星が浮かび上がる。次いで、全身が火に炙られ、ちりちりと焦げ付くかのような嫌な錯覚に苛まれた。朝よりも具体的なイメージを伴う錯覚である。

不吉で巨大な魔法陣が活性化し、爆発直前まで内圧を高めている。K・Tによれば“イベント”は今夜十二時だというが、本当にそれだけの猶予があるのかどうか。

今更焦ってもしかたがない。とにかく、リユーフィンがガラと合流するまでは大人しく様子を見るだけだ。

魔法陣を起動させるべく準備している奴は誰なのだろう。学校内に潜んでいるのか、ワームホールでつながったどこかから“イベント”の時間に合わせてやってくるのか。

目を閉じていても眠れない。やはり、肌で感じる魔法陣のプレッシャーのせいだ。それもあるが、それだけではないな。昨日、K・Tとの決闘前には充分寝たし、その後は気絶状態とは言え今朝までぐっすり寝ていたのだ。そうそう寝られるものではない。

仕方なく、そのままの姿勢で考え事をした。

今夜の“イベント”の阻止。放課後からずっと学校内に潜んでいれば、魔法陣の起動を邪魔する機会がそれだけ多くなるはずだ。

しかし、事情を知らない職員や警備員に見つかる一旦は帰宅せざるを得なくなる。見つかる時間によっては致命的なタイムロスにつながりかねない。余計な騒ぎを避けるためにも、一度帰宅した上で考えつく限りの準備を整え、改めてここに戻ることにした方が得策かも知れない。

この件は一応そう結論づけ、俺は今朝のことを回想しはじめた。

クソ親父——クソ親父から親父へ昇格させようと思っていたが、はつきりした理由はわからないものの何故だか気が変わった——が、リカに対してK・Tのことを隠しておこうとした理由は何か。結城老人に筆談で尋ねてみたのだ。

——その質問をするということは、K・Tが仇でないことを知ったのだな？

結城老人はベッド脇に胡座をかき、適当に雑談しつつ紙の上にさらさらと文字を走らせた。意外にも英語だったので、俺にとっては読みやすく助かった。しかし俺のほっとした気分は、続く内容を読んだ瞬間に吹き飛んだ。

——リカの両親、セイタとマナミは生きている。

セイタとマナミ。頭の中で発音してみた。聞いたばかりの名前のような気がしたが、思い出せない。そんなことより。

生きている、だと？

——事情がある。すまんが、秘密にしておきたいのはセイタとマナミ本人たちの希望だ。わしが教えるわけにはいかん。いずれ慎吾

か、息子本人たちが明かすはず。それまで待つてくれ。

やはり、結城老人は最初から知っていたということか。

昨年、リカの両親の三回忌だったという。それだけの間、結城老人がリカに対して真実を黙っていたことになる。心中いかばかりか。俺は、結城老人をそれ以上追及するのを止めた。

終業のチャイムが鳴り、俺は目を開けた。

行動開始だ。魔法陣の起動、絶対に阻止してやるぜ。

最悪

鞆を手に立ち上がった俺にすぐ続き、さつきも立ち上がる。

「さつき、手際よすぎ！ ちょっと待って」

ユウジがあわてたように言い、筆記用具を片付け始めた時、小さな異変が起きた。ユウジの机上にあったノートや消しゴムが床に落ちる。校舎が振動しているのだ。

「地震？」

窓ガラスがビリビリと音を立てて揺れ、わずかに遅れて重い衝撃音が響き始めた。音は上から降ってくる。

ドン、ドン、ドドドド、ドン——と、小刻みかつ不規則なインタバルを置いて。

さつきは天井を指差し、嫌味のない笑顔をユウジに向けて言った。「朝、大沢先生が言ってたでしょ。……なあんで、あたしも忘れてたけど。大沢先生が居たこと自体」

どうやら“工事”とやらが始まったようだ。きっと過激派スパイどもによる魔法陣起動の最終段階に関わる作業に違いない。見に行きたいのはやまやまだが、このタイミングで俺が単身飛び込んだところで何の解決にもなるまい。

「思った以上にやかましいな。早いとこ退散しよう」

俺はふたりに向けてそう言うつと教室を出た。今この二年二組の教室内には田嶋真由美も柿崎も、そして柿崎に睨まれていた原田もいない。そんな場所に長居は無用だ。

一年四組の教室を目指して廊下を歩きつつ窓外を見下ろすと、既に多くの生徒たちが校門から出て行く様子を確認できた。

「校庭で活動する運動部にとっては影響ないけど、校舎内で活動する文化部にとってはこの音と振動、結構邪魔だよな」

「そうね。放送部や演劇部、それに軽音部や映画制作部がよくやってる録音作業なんかだともろに影響が出るし」

俺はユウジたちの会話を適当に聞き流し、腰を落として身構えた。
「どうしたの、ユーリ」

さつきの問いかけを黙殺し、上を振り仰ぐ。

——キイイイン！

すっかりお馴染みの耳鳴りを感じた瞬間、俺は叫びつつ勢いよく振り向いた。

「下がれっ、さつき、ユウジ！」

俺はふたりの胴体にタツクルし、真後ろに押し倒す。

直後、俺たちのいた場所に等身大の物体が落ち、どさりと音を立てて転がった。大の字に伸びている。人間だ。

くそ、これは予想していなかったぞ。まだ一般生徒が校内に残っているうちから動きがあるとは。

「いったーい」

「な、なんなんだユーリ、突然——」

意外に運動神経の良いさつきとユウジは、うまく受け身をとったようで後頭部を強打せずに済んだ。それよりも。

「お前、柿崎！？ 怪我してんのか」

廊下で大の字に伸びているのは間違いなく柿崎だ。両脚をこちらに向けて仰向けに倒れている。こいつ今、ナジールから飛び出してきた……。さつきとユウジは、奴が虚空から現れる瞬間を目撃したのだろうか。

俺は柿崎に呼びかけつつも慎重に、臨戦態勢を崩すことなく近づいた。

「ぐ……、くそ」

小声で呟いた柿崎の目が開く。軽く頭を振って状態を起こすと、近づいた俺と目が合った。いや、まだ完全に目の焦点が合っているとは言えない状態だ。口の端から一筋の血が零れているが、それ自体はどうやら唇を少し切った程度の軽傷だ。

「柿崎、お前何者だ。誰とやりあったんだ」

「ちょっとユーリ。いくら柿崎くんの目つきが犯罪者っぽいからって、どうしてそんな詰問口調なのよ。まずは怪我の手当してあげなきゃ」

さつきが常識に則って考えれば至極真つ当な意見を述べるが、俺としてはこの際構ってなどいられない。柿崎がナジールから飛び出てきた事実の方が重いのだ。

「言え。相手は誰——」

——キイイイン！

ふたつめの耳鳴りを感じ、俺は柿崎への尋問を打ち切った。柿崎のすぐ後ろの空間がぐにやりと歪む。やがて人型の影が像を結ぶより早く、声が聞こえてくる。

「待て、イギリス人。その日本人は半ナジア。自発的にナジールを作り出す能力はないが、我々の味方だ。もつとも、共闘するも敵対するもお前次第だな」

「その声——お前、中国人ナジアかつ」

俺の正面の空間から、はたして例の中国人ナジアが現れた。

「僕はシヨウキ。本名でなくて悪いがそう呼んでくれ。ああ、いつかは銃を向けて——あまつさえ威嚇射撃までして悪かった」

柿崎が味方だと。混乱するぜ、まったく。

後ろのふたりが静かだ。おそらくこの展開について来られないのだろう。ナジールのことも衝撃的だろうが、そんなことよりここを中心とした広大な地域に暮らす人々の命が危機に晒されているのだ。この現状を説明するのにやぶさかでないが、生憎今はそんな暇はない。悪いがしばらくそのまま我慢してくれ。

「俺はユーリだ。シヨウキ、お前幻妖に連れ去られた時大怪我してたじゃねえか。大丈夫なのか」

「ああ、あいつはアカスト——僕の相棒。残念ながら今は敵側の操り人形だ。正気を奪われる最後の瞬間に僕を……助けてくれた」

正気は最後の一語を絞り出す直前、かすかに唇を噛んだ。

操り人形だと。もしそれが俺の立場なら。リユーフィンがそう
なつてしまつたら。

「くそ、過激派スパイどもめ」

「ゆつくり話している暇はない、ユーリ。緊急事態だ。君の恋人が
――」

なんだ、何を言っている。

「リカが、リカがどうかしたのかっ」

シヨウキが答えた瞬間に屋上での衝撃音が言葉をかき消す。

「……………れた」

改めて聞き直そうとして……、しかしそれは再び中断された。

――キイイイン！

みつつめの耳鳴り、だと。予想外の連続だ。

「安心したまえ。これまでの状況を分析した上での単なる保険だよ。
絶対に危害を加えないさ。……もちろん、それは君次第ということ
になるがね、ユーリ」

この声、まさか。

「お前はっ」

一体なんだって言うんだ。まるで敵の大将のような現れ方をしや
がつて。お前もナジアだって言うのかよ。

「イベント”まではまだ時間があるからね。なるべく、邪魔をし
ないでいただきたいものだ」

「おい、これは何の冗談だ。お前が敵だなんて嘘だろ。悪い冗談は
やめろ」

「そのシヨウキくんも言ってたはずだよ。敵に回るも味方につく
も、全ては君次第なのだよ、ユーリ」

最悪だぜ。認めねえぞ、お前が敵だなんて。頼むから嘘だと言っ
てくれ、原田っ！

副官

「かえせよ」

俺はのろのろと原田の正面へと歩いていく。

「リ力を……かえせっ」

激情に任せて原田の胸ぐらを掴んだが、奴は涼しい顔で眼鏡をかけ直した後、俺の拳の上にそっと手を乗せて言った。

「なに。簡単な選択肢さ、ユーリ。魔法陣の起動にはキーが必要だ。三十名のウイルスナジアをハルダイン神への生贄に捧げるか、君が起動キーの役割を務めるかの二択だ」

「……んだとてめえ」

「K・Tと戦わせて悪かった。だが君は見事に彼を退け、ハルダインの戦士たることを証明してくれた。その君がキーを務めてさえくれば、三十名の生贄は不要だ。もちろん君自身も命を落とす心配はない」

「このやろっつ」

俺は胸ぐらを掴む拳に、さらに力を込めた。

だが原田は全く表情を変えず、俺の拳に乗せた手に力を込めるところとさえせずに手首を軽くひねった。

「——っ！」

気づいたら天井を見ていた。

次いで、呼吸を忘れていた肺が空気を貪る。

咳き込んで、背中全体が痺れていることに気づく。

身体を起こし、原田の名を叫ぼうとしたができなかった。替わりに呻き声が漏れる。

「ぐ……っつ」

背中 of 痺れは、徐々に痛覚と入れ替わっていく。

——投げ飛ばされた。

ようやく、理解した。いつの間に。

「合気道だよ。若干アレンジしているけどね」

ふたつの足音が俺に駆け寄ってきた。

ひとりめは、俺の背をさすってくれている。さつきだ。

ふたりめは、俺と原田の間に割って入った。ユウジだ。

「原田、何のつもりだ。なんとか神とか生贄とかって、お前わけのわからない新興宗教にでも入信したのかよ。リカちゃんをどうしようって言うんだ」

「ふん。鈴木。それに兵藤も」

原田は正面のユウジを見据えた後、俺の背後のさつきにも目を遣ると、蔑むというよりは哀れむような口調でゆっくりと話し出した。「目の前の空間から人が現れる。そんな超自然現象を目撃しても腰を抜かさない君たちには感服するよ。でも、他の人間たちは君たちとは違う。この素晴らしい現実世界を現実世界の人間たちに任せておくなど愚の骨頂。無駄でもつたいていなくて仕方がない」

「お……まえ」

さつきのお陰でなんとか声を出せるようになった。立ち上がって言葉を続ける。

「幻夢側の人間なのか。幻妖じゃないくせに、何故こっち側にいられる……」

俺の質問を聞いた瞬間、原田の目が吊り上がり、口の両端がV字型に持ち上がって顔面に濃い陰影が浮かび上がった。その表情のまま告げる。

「現実側の人間さ。原田くんは、ね」

「なっ」

「家族を人質にしたら快く受け入れてくれたよ、この私を。たまたま、原田くんという存在が宿主、というか容れ物として都合が良かったものでね」

言葉の意味を考え、俺は全身の血が煮えたぎった。

「乗っ取ったのか、原田の身体を……！ てめえ何者だ。一体、いつから入れ替わってやがるんだっ」

そんな俺を見下すように、原田はくっくくつと喉を鳴らして笑う。

「何者、ねえ。ま、幻夢側のそれなりの立場の人間ってことで。そして君は一度も、そう、ただの一度も本物の原田くんと会ったことはない。そしてこれからも、ね」

「……………」

噛み締めた奥歯がぎり、と音を立てる。唇のあたりから鉄の味が広がった。

俺の知っている原田は、最初からずっと目の前のこいつだったというのか。

絶句する俺を楽しげに眺め、原田は追い打ちをかけるように最低の言葉を吐いた。

「原田くんのご家族はさぞ寂しかろうと思ってね。一足先に、ハルダイン神の御許に送っておいたよ」

原田に飛びかかるうとした。だが、できない。

さつきが背後から俺にしがみついていたのだ。

「ユーリ、だめ！ 何がなんだか全くわけわかんないけど、リカちゃんが入質。それだけはわかる」

「賢いねえ、兵藤。ますます気に入ったよ。よし、鈴木も兵藤も“選民”に加えてあげよう。さあどうだい、ユーリ。もう《監視機構》日本支部は終わったも同然だし、無理して義理立てることもあるまい。君が協力すれば、鈴木も兵藤もリカくんも、みんな一緒にいられるよ。そうそう、ついでにウィルスナジアの三十人もね。そして争いも汚染もない、理想の世界が我々のものになるのだ」

——ふざけるなっ！

「てめえこの野郎。どっちにしても何万もの人命を犠牲にするつもりなんじゃねえかつ」

原田はわざとらしく溜息を吐き、胸を反らすと噛んで含めるような口調で話し出した。

「それでもできる限り合理的な、最小限の犠牲で済む手段を選んだ

つもりだよ。日本の地方都市を使って“デモンストレーション”することで、全世界に散らばる《監視機構》に抵抗が無駄であることを思い知らせることができる。今回、一体どれだけの現実側スパイが私に協力してくれたか知ってるかね？」

「黙れ。知りたくもねえ」

「やれやれ。十二時まではまだ時間があるし、私はそれなりに気が長い。それまで猶予をくれてやるから頭を冷やして考えなさい。私もリカくんもこの屋上にいるから」

言い終えるが早いか耳鳴りがした。

ナジール、だと。

「逃がすかつ」

俺はさつきをふりほどき、歪んだ空間の中に姿を消しつつある原田に向かつて手を伸ばした。だが――

「ぐあつ」

俺は蹴り飛ばされ、床に転がった。腹を押さえ、咳き込む。

「ふ。ハルダインの戦士、か。……さすがに頑丈だな、ユーリ」

「何をする、シヨウキ！」

何故こいつが俺を。味方じゃねえのか。

ふと見ると、シヨウキの脇に座っていたはずの柿崎が再び仰向けに倒れている。まさか、シヨウキにやられたのか。俺の視線を追ったシヨウキが吐き捨てるように言う。

「柿崎ごときを気にしている場合か。こいつは大した障害にはならないからな、殺してはいない」

その言葉を裏付けるかのように、柿崎はごそごと動き出した。

「そりやまあ確かに、この先この作戦を繰り返すにしても毎度のように三十名ものウイルスナジアを集めるのは大変だ。あの方は君に期待しているようだが、僕にはとてもじゃないが君があの方に協力するとは思えない。たとえ恋人を人質にとったところでね」

そう言つと、シヨウキは懷から拳銃を取り出した。

「……………。何挺持つてやがんだ、てめえはよ」

「あの方の副官としては、あの方が犯しかねない過ちを事前に取り除いておくのも仕事のうちだ。悪いが、君には今ここで死んでもらおう」

そう言いながら、シヨウキは拳銃を構えた。

まずい、まずいぞ。

すぐそばにさつきとユウジがいる。どうすれば巻き込まずにすむか。

加速能力が自発的にコントロールできない己を呪う。

ええい、一か八か、奴が引き金を引く前に飛び掛かってやる。

俺が両脚に力を込めた瞬間、シヨウキが冷徹に言い放った――くそつたれ。

「させないよ」

その言葉と共に、耳を聳する破裂音が轟いた。

牢獄

視界がぶれる。

ひやりとした。撃たれた——そう思い、目を閉じる。

だが、痛みを感じない。

耳朵を打つ耳鳴りは、銃声の余韻が……。いや、それだけではない。

冷静になって目を開け、ようやく気づいた。周囲がグレーのドーム状の空間だ。

「ナジール……！」

正面の人影がふたつに増えている。ひとつはシヨウキ。もうひとつはこの男子生徒の制服を着ていて、こちらに背を向けている。中肉中背といったところか。しかし、どこかで見たような。

「目を覚ませよ、シヨウキ。あの野郎が本気で副官を置くわけない。お前だってそのくらいわかってるだろう」

「うるさい！ こうしないとアカストが……」

銃口は天を向いていた。男子生徒がシヨウキの手首を掴み、真上に持ち上げているのだ。そして抵抗するシヨウキをあつさりといなし、掴んだ手首を勢いよく振り下ろすと自らの膝に打ち付けた。

シヨウキの手から銃が落ちる。足下に転がるそれを、男子生徒は遠くへ蹴り飛ばした。

「銃声、薬莢、弾丸に弾痕。学校で撃つてたらしみ消すの大変だったぜ」

「このあたり一帯の住民は今夜十二時までの運命だ。今さら気にする必要がどこにある」

男子生徒に羽交い締めになれ、大人しくなったシヨウキが毒づく。「あのさあ、シヨウキ。お前それ望んでいないだろ。それにその行為、アカストが喜ぶとでも？ 大体ユーリを殺すって発想自体、あの野郎の意向にも背いているわけだろ。自分で自分が何してんのか

わかって……ぐふっ」

男子生徒に——いや、それを眺めていた俺にも——油断が生じていたようだ。羽交い締めを振り払ったシヨウキの蹴りが男子生徒の腹に炸裂した。

よるめいて数歩退く男子生徒の横顔を見て、俺は思わず叫んだ。

「バイト君！」

その横顔はまさしく、エアコンの修理を装い俺にリモコンを与えてくれた《監視機構》の協力者に間違いない。

「沢沼先輩！？」

——この声！

さつきの声か。俺は耳を疑った。

声のする方を振り向き、居並ぶ面々を見て絶句した。

そこにはさつきと、半ナジアである柿崎の他、ユウジの姿までがあつたのだ。

呆ける俺に、バイト君——沢沼先輩とやらが鋭く声をかけてくる。「無自覚な半ナジアってのは結構いるんだよ、ユーリ。それよりシヨウキの奴、一見冷静に見えるが明らかに変だ。ふたりがかりで取り押さえるぞ。……」たく。俺は肉体労働向きじゃないってのに」「しかし、原田とシヨウキに裏切られた気分を引き摺っていた俺の足は棒のように硬直し、そう簡単に踏み出すには至らない。

この状況で、新たに誰かを信用して良いものかどうか。

俺の葛藤に気づいたのか、軽く舌打ちした沢沼先輩がシヨウキに向き直った刹那——

破裂音が連続で轟く。肝が冷える。

これは銃声だ。しかもふたつ。

硝煙の臭いがあたりに漂う。

「よせっ」

沢沼先輩が叫ぶのと、シヨウキが倒れるのが同時だった。

柿崎が両手で拳銃を構え、仁王立ちしている。どうやら、さつき沢沼先輩が蹴り飛ばした銃をいつの間にか拾っていたようだ。腕を

だらりと下げ、肩で息をする。その場に銃を取り落とした。

「シヨウキさん、信じてたのに……。俺の師匠が、敵だと思っていた原田の操り人形だったなんて！」

絞り出すように言くと、柿崎はその場に両膝をついた。

「よく……。やった、柿崎。これで……。いいんだ」

右腕と左脚を朱に染め、額に玉の汗を浮かべたシヨウキはそう呟いた。

わけがわからない。俺はシヨウキに詰め寄った。

「何がどういいんだ。おい、説明しろ」

荒い息を吐きながら、シヨウキは説明を始めた。

シヨウキによると、幻妖——アカストに連れ去られた後、シヨウキは原田による催眠暗示を受け、対外的には行方不明となった状態で名細亜学園周辺に潜んでいたという。しかし、中国支部における訓練において精神攻撃に対する防衛法も会得したというシヨウキは、暗示にかかったふりをして原田を追いつめる機会をうかがっていた。そして、俺や原田と同じクラスの柿崎を弟子にして、原田への逆襲に備えて訓練をしていたとのことだ。

「残念ながら、君たちと同じクラスの生徒を上手いこと弟子にできたのは、偶然なんかじゃなかった。原田は催眠暗示が不完全なことも折り込み済み。結局僕は、奴の手の上で踊らされていただけなんだ」

シヨウキが口惜しそうに呻く。

「しかも、二、三日に一度原田と接触するたびに、暗示の効果を強められていた」

気づいてはいたが、原田と接触しないわけにはいかない。シヨウキは必死に精神防衛を続けていたが、原田の方が一枚上手だったらしい。

「柿崎が撃ってくれなきゃ、僕は混乱状態から醒めることはなかっただろう。そのまま裏切り者として、当然原田からも切り捨てられて終わりだったはずだ」

「ああああ。シヨウキさんすみません」

声を上げて泣き崩れる柿崎に、シヨウキはただ一言「謝るなよ」と呟いた。

* * * * *

「卒業検定!？」

シヨウキへの応急手当を手際よく施すバイト君——沢沼先輩の言葉を鸚鵡返しに口にしたが、俺のその声はみつともなく裏返ってしまった。

すでに、沢沼先輩による応急処置は終わっている。処置といっても道具がないので、シヨウキのシャツを引き裂き、右肩に近い場所と左股に近い場所をきつく縛って止血しただけだ。

「ああ。原田モドキの真の目的は《監視機構》への警告なんかじゃない。幻夢側の過激派へのデモンストレーションだ」

つまり、原田モドキは幻夢側過激派の若きエリート候補であり、今回の作戦を成功させることにより幹部の椅子を狙っている——というのが沢沼先輩による推論だった。

「こう言っては何だが、《監視機構》全体にとって、日本支部など重要拠点ではない。潰れたところで痛くはないんだ。だが、他の拠点を攻撃した場合、《監視機構》上層部は全力で幻夢側へ攻め込む決定を下すだろう。だが、実のところそれはお互いに避けたい事態だ。両世界の穏健派同士による交流がもたらす恩恵の一端を、過激派の連中も享受しているのだからな」

「嫌らしい話だな。つまり原田モドキは、壊滅させても全面戦争にならない場所をターゲットに選んだってわけか。全面戦争に移るのは、お互いに相手のおいしいところを吸い尽くしてから、と」

「原田モドキはここで何らかの行動を起こすという情報を、あらかじめ《監視機構》のいくつかの支部にリークしていた。もしくは――」

俺と沢沼先輩の会話に、シヨウキが割って入った。

「現実世界のどこをターゲットにすべきか、《監視機構》側から原田モドキに対して指示があった」

「なっ」

気色ばむ俺を手で制し、沢沼先輩はシヨウキを見下ろすと穏やかに聞いた。

「そいつは初耳だな、シヨウキ。説明してくれないか」

「《監視機構》内には派閥がある。ひとつは、幻夢側穏健派と手を組み、これまでの棲み分けを重視した上で部分的な共存を目指す派閥。日本支部の幹部では、佐々木さんがそれにあたる」

言葉を挟もうとした俺を、沢沼先輩が制した。続きを聞こう、と言うので大人しくシヨウキの言葉を待った。

「もうひとつが問題だ。表向きは佐々木さんに賛同する立場を表明しておきながら、裏では幻夢側過激派と手を組む派閥。まるで、どこかの新興宗教のような選民思想にとりつかれた連中さ。日本支部には後者が多かったってことだな。佐々木さんは嵌められたんだ」

さつきとユウジと柿崎は俺たちとは離れたところにいた。大まかな経緯を柿崎が説明していたようだ。

一通りの説明が終わったようで、ナジール内はいったん静まりかえった。

「？」

ふと気づくと、全員の視線が俺に集まっている。

「で、この後の行動なんだがね」

口火を切ったのは沢沼先輩だ。

「ユーリとしてはどうしたいのかね」

考えるまでもない。

「俺は贅沢なんだ。助けるさ、リカも、この街の人々もな」

この場に居合わす全員がうなずいた。

「そして原田を、ぶつとばす！」

沢沼先輩は立ち上がると、俺の肩に手を置いた。

「よく言った。全面的に協力する。いや、したいところだが」

「なんだよ、奥歯に物が挟まったような言い方しやがって」

沢沼先輩は俺に背を向けるとこめかみに手を当て、天を仰いだ。

「どうやら俺たち、ナジールごと閉じこめられてるみたいだよ」

……やられた。くそ、原田の野郎め。

治癒

目の前で天を仰ぐ沢沼先輩の名前、唐突に思い出した。多分、沢沼裕一だろう。

「あんたもしかして、ユツチ先輩？」

「ほう。留学生にも名が知られているとは、さすがは俺だな」

こめかみを掴んでいた手を離し、やや上向き加減のまま流し目を寄越す。よく見ると百八十センチに届こうかという先輩の身長、俺より数センチ高いのかも知れない。

しかし妙に色気のあるその仕草、過剰なまでの自信がなければできるものではない。

日本人の中にも結構いるんだな、自信家ってのは。思えば、K・Tの奴も自信家だった。

「一学期、君の恋人が《監視機構》の関係者とは知らずに声をかけたんだがねえ。俺のことを知ってくれたから楽勝かと思ったんだが、ガード固いね彼女。“ユツチ先輩”と呼ばせるのには成功したもののそこから先に進めないわ、クラスメイトからは“ロリコン”呼ばわりされるわで散々だったよ」

「今ここでするような話じゃねえだろ、ユツチ先輩」

言いながらもほっとしている自分を自覚する。

「ところで先輩、エアコンの修理してくれたとき、何故あんなにそわそわしてたのさ。今の先輩、堂々としてるぜ」

「ふ。君のそれも、今ここでするような話ではないだろうが、よろう、答えよう」

高校三年生とは思えない貫禄だ。これをユツチ先輩はどうやって身につけたのだろう。

「俺だってナジアの端くれだからね。君と比べれば微々たる能力しか持ち合わせていないとは言え、あの場に長くとどまればK・Tに感知されていただろう。で、君と俺が接触していたことに気づかれ

れば、当然俺の正体にも気づかれる。俺はK・Tのターゲットにされるのは真っ平ごめんだぜ」

俺はナジール内を見回した。直径五十メートル、天井までの距離も十メートル以上あるつかというナジールの規模は、これまで俺自身が作り出したものや引きずり込まれたものと比べて明らかに最大だ。しかも、その内側に引き込まれたユッチ先輩を含むナジアと半ナジアの総数六名。

「これだけのことを成し遂げておいて微々たる能力と言われても説得力ないぜ、先輩」

「ふむ。これも努力の賜物ではあるが、この程度のナジールなど、君ならいつでも支配できるはずだ。それはそれとして。俺は努力によりナジール能力を強化したが、もともと戦闘要員じゃない。俺の戦闘能力などお粗末なものに過ぎないから殺し屋からは逃げ回る。当然の理屈だろ？」

納得。もつとも、堂々とした態度で言うべき内容かどうかは疑問だが。

「さて、何よりも今検討すべきはここからの脱出方法だ。シヨウキには応急処置しか施していないから、早めに医者に診せないと心配だし」

「ああ、そういえば俺、自分が怪我した時にほぼ無自覚に治癒能力が発動するんだが、それを他者に向けて行うこともできるかも。やってみよう」

横たわるシヨウキに近づいた俺が手をかざすと、その手をシヨウキの左手が掴んだ。

「よせ、ユーリ。お前は可能な限り力を温存するんだ。たとえ怪我が回復したところで、今の僕では戦力にならない。それより、お前ひとりだけでもここから脱出する方法を考えないと」

ユッチ先輩が言葉を挟む。

「弾丸が体内に残っていたら取り出さなきゃならないが、幸い二箇所とも擦過射創だ。お前さんもカッキーを通じてユーリのことを監

視してたんならある程度知ってるだろ。ユーリが治してくれるって
言ってたんだ、彼に任せとけ」

「力……カッキー？」

柿崎がユツチ先輩の方を向き、自分を指差して小声で呟くが、誰も相手にしない。

「おい、ユツチ先輩。俺の能力で治療できることに気づいてたんなら、何もシヨウキのシャツを破ることはなかったんじゃないか」

「原田に操られていたとはいえ、シヨウキはお前を裏切り、蹴っ飛ばした相手だぞ。俺なら放つとくね。そしてシヨウキの言う通り、原田とやり合うために力を温存するさ」

「シヨウキがいなきゃ、俺はスパイの存在にも気づかずじまいだった。ここで少しばかりの力を出し惜しみして、シヨウキに何かあったんじゃ寝覚めが悪いぜ」

シヨウキは焦れたように言い募る。

「よく考える。擦過射創なら今夜十二時まで放っておいたくらいでどうなるものでもない。リカと数万人の命を救うためには猫の手でも借りたいくらいだろうが。僕なんかに構っている場合か」

「お前の怪我を治す。そうすりゃ、猫の手なんかよりずっと頼りになる戦力が手に入ると思うんだがな」

俺は改めてシヨウキの傷口の上に手をかざす。最初は右腕。次に左脚。

シヨウキの傷口を見つめていたユツチ先輩が歓声を上げた。

「おお、すごい。火傷の痕までは消えないが、傷口が少しずつ塞がっていくぞ」

「……こいつは驚いたな。痛みが消えたぞ。ありがとう、ユーリ。もう大丈夫だ」

シヨウキは右腕と左脚を動かしてみせ、俺に右手を差し出した。

それまで黙って経緯を見守っていたユウジが咳払いしたので、全員の視線がそちらに集まった。

「ごめん、みんな。ちょっと聞いてくれ。原田がどんな手を使って俺たちを閉じこめたのかわからないが、脱出方法の見当がつく人はいないか。沢沼先輩、いかがですか」

「おっと。ここにいるみんなは仲間だぜ。俺のことはユツチと呼んでくれ。……脱出方法か。それがなあ。いつもだと、ナジールと現実世界を行き来するのに特に苦労した覚えがないんだ。誰か、もと居た廊下でも、それ以外の現実世界でもいいが、“見える”奴はいないか」

全員が否定する中、シヨウキが呟く。

「ナジール・プリズン……」

「なんだ？ 何か心当たりがあるのか」

勢い込んで聞くユツチ先輩に、暗い目をしたシヨウキが答える。

「他の四校に潜入していたエージェントと、もしかしたらその相棒の幻妖たちが、まとめて原田の操り人形になっている可能性が否定できない」

「んげ。そいつらのナジール能力を同調させ、俺のナジールを取り囲んでいるっていうのか。なるほど、それなら現実世界を“見る”ことができない理由の説明がつく……、厄介だな」

「出られないんですか」

さつきの質問に対し、ユツチ先輩は渋い表情で首を縦に振る。

あごに手を当て思案顔になったさつきが、今度は俺の方を向いて言ってきた。

「ね、ユーリってさ。殺し屋との戦いの時、武器を出したんでしょ。それを利用すれば、ここから外に出ることもできるんじゃないの」
「うーん。ひとりで祈りを捧げる場合、両手を広げた大きさの魔法陣が限界だって聞いているんだ。ガラって幻妖がそう言った。で、その大きさの魔法陣によって武器がひとつ呼び出せる。ああ、リユーフィンって幻妖も呼び出せたけどな」

自分でそう言うてから、はっとしてさつきと顔を見合わせた。

「サンキュー、さつき！ 今のはでっかいヒントだぜ」

本当、さつきたちには助けられてばかりだ。つい、俺はさつきに抱きついてしまった。目でユウジに謝罪すると、彼はサムアップで応えてくれた。

今、このナジールの中には六名のナジアがいる。もっともそのうち三名は半ナジアだが、この際細かいことは気にしない。

「幸い、ユツチ先輩のナジールは十分すぎる広さがある。俺たちが魔法陣の位置関係に陣取り、ハルダイン神に祈れば、あるいは」

全員がそれぞれに視線を交わし、俺に視線を集める。そして、同時にうなずいた。

「試してみる価値は」

ユツチ先輩の言葉を、さつきが引き継ぐ。

「あるわね」

何の根拠もない。だが、ここに居合わす者全員、ただ指を銜えて待つつもりなど毛頭ない。

大規模攻性魔法の発動。それがハルダイン神の意思に反するものである限り、ハルダイン神は俺に力を貸してくれるはず。

見てろよ。大人しく閉じこめられてなんかやらねえぜ、原田。

発動

先頭にユツチ先輩が座る。

その背を見る位置に俺が座り、互いに広げた両手の指先が触れない程度の距離をあげ、俺の左右にそれぞれシヨウキとカッキーを座らせる。

そして俺の後方左右にそれぞれさつきとユウジに座ってもらう。

——集中。

俺の視界は身体を離れ、六人の位置関係をナジールの天井近くから俯瞰する。初めての体験だが、不安も恐怖も感じない。思えば、リユーフィンもハルダイン魔方阵による呼び出しに際し、何の不安も感じていなかった。

一方、原田が準備を進めてきて、今まさに発動させようとしている巨大な魔方阵からは、不安と恐怖しか感じられない。

どちらがハルダイン本来の力なのか。確信に満ちた答えを思い浮かべつつ、俺は仲間たちの位置を微調整するために指示を出す。

「シヨウキ、一歩下がれ。カッキー、半歩右へ。さつきは一歩左。ユウジは半歩前だ」

奇妙な感覚だが、意識そのものは肉体を離れたわけではない。俺の声は床に座る俺の口から出ている。

位置調整が済むと、白色の五芒星がぼんやりと浮かび上がった。やがて五芒星は、霧となって俺たちの身体を包むかのようにして、ひとつの図形を形成する。

「我、破邪の祈りを捧げる者なり。聖ハルダインよ、我が喚よび声に応えたまえ。我、攻性魔法発動の阻止を欲す。疾く導き給え」

そう、俺からのハルダイン神への要求は、原田がいる場所への移動。それだけだ。魔法による天誅などではない。俺がこの手で、奴をぶちのめす。

発光。五芒星の輝きが強まり、六人の全身に濃い陰影を与える。

ふたつの同心円が五芒星を囲む。内側、すなわち小さい方の円周外側に沿う形で文字が現れ、それらが時計回りに回り出す。

「お……」

ナジールが振動しはじめ、誰のものともつかない声が漏れる。

「ぐ……っ」

額から汗が滴る。心臓が炙る。魔方陣は、俺たち六人の肉体に少なからぬ負担を強いているようだ。

だがここでやめるわけにはいかない。俺は全員に向けて言った。

「もう少し辛抱してくれ。うまくいきそうだ」

ナジールの天井近くを漂っていた俺の視界が自分の身体に戻ってくる。

しばらくして、視界がぶれ始めた。

「まだだ……、もう少し」

俺の脳裏に映像が浮かぶ。

初秋を思わせる涼しい風が俺の肌を撫でた……ような気がした。あつさりと移動に成功したというのか。いや、まだ俺の肉体感覚はナジールの床に座ったままであることを告げている。

一方、俺の視界はおそらく校舎の屋上と思しき場所を見下ろす位置へと移動している。だが、まるでブラインドを閉ざした室内を思わせるほど薄暗い。

屋上に複数の人間がいることはわかるのだが。視点の移動を試みる。空が見えた――

「月明かり……月か。もう夜だというのかっ」

視点を屋上に戻すと、そこには赤い光が満ちていた。

赤色の五芒星。校舎ごと振動させるエネルギーに満ちた魔法陣は、やがて周辺の大地にも影響を与え始めた。まるで地震を思わせる鳴動がこだまする。実際に揺れているのかも知れない。

上空にも複雑な紋様の光が出現し、彼方まで広がっていく。夜闇を薄暮の明るさに染め上げる光の色は、校舎の屋上で光る魔法陣と同じ、不気味な赤色だ。

狼狽えた途端、視界がぶれ始める。

俺の視界の中で、天井も床もグレーの空間と、つい今し方まで見えていた校舎の屋上とが二重写しとなる。まずい。

このままでは俺の肉体は校舎の屋上へ移動することなく、ナジールへと逆戻りだ。

待て。あと少しなのに。ここで集中を途切れさせるわけには――

「罨だ、ユーリ」

ユツチ先輩の声。それをきっかけに、灰色一色の世界が俺の視界の全てとなった。

目の前にユツチ先輩。彼は振り向きざま、俺を突き飛ばす。

「おわっ」

俺は尻餅をつき、同時に俺たちを取り囲む魔法陣が消滅した。

もう、屋上の様子が全く見えなくなった。完全に、ナジールへと戻ってしまった。

しばし呆気にとられた後、俺は抗議のために口を開いた。

「おい先輩、いったい――」

「言ったる、罨だ。あのまま続けてたら、攻性魔法陣の起動キ―として原田の奴に利用されるところだったぞ。君も感じたはずだと思うのだがな、巨大で禍々しい魔法陣が活性化していく様子を。それより、周りを見ってみろ」

言われる通りに見回した俺は啞然とした。ユツチ先輩と俺を除く四人全員、疲弊しきった様子で肩で息をしている。中でもカツキ―は深刻だ。四つんばいになり、滝のような汗を垂らして喘いでいる。まるで何かの発作だ。

「カツキ―、どうした！ しっかりしろ」

「だ、い……じょう、ぶ……だ。すこ、し……、つかれ……た、だけ……だ」

とてもじゃないが“少し”だとは思えない。

当惑する俺の横からカツキ―に近づいたユツチ先輩が、彼の背に手を置いた。

「ほらカッキー。俺の力を少し分けてやる」

青ざめていたカッキーの顔色が少し戻っていく。息をついたカッキーは、そのまま俯せに倒れ込んだ。眠ってしまったようだ。

「ものすごく嫌な感じがするんだ、ユーリ。現実世界と幻夢世界の間にある“壁”を越える時、大きな時間のずれが発生することは知ってるだろ。今、シヨウキが言うところのナジール・プリズンを破ろうとしたとき、“壁越え”と似た感覚がしたんだ。おそらく、ナジール・プリズンを形成しているのは他校のエージェントだけじゃない。ウィルスナジアたちも同調し、幻夢属性のナジールで囲んで“壁”と似た状態を作り出している――」

ユッチ先輩が言い終える前に、聞きたくない奴の声が割り込んできた。声は上から聞こえてくる。

「残念だよ。本当に」

原田の声。しかし、氷水さながらの冷たい声色だ。

文字通りぞくりと身を震わせ、俺たちは思わずナジールの天井を仰いだ。そこには、原田の顔が浮かび上がっていた。

「せっかく君たちを見込んで、“選民”に加えてあげようと思ったのに。午前零時まで、あと二時間を切った。やはり、ウィルスナジアの諸君とリカくんに“起動キー”――生贄となっていたかどうか道がないようだね」

真っ先に立ち上がり、鷹の視線を爛々と燃やして「黙れ」と叫んだのはカッキー。ふらつく足を気力で踏みしめている。これだけ疲弊しているくせに、原田の声を聞くだけで目覚めるとは驚きだ。

しかし、ユッチ先輩が柿崎を制した。軽く肩に手を置いただけのように見えたのだが、カッキーはあっさりと座らされてしまった。「吠えても無駄だ、カッキー。こちらからは見えなくても、奴にはこちらが見えているようだからな」

つまり、奇襲も小細工も効かないってことか。くそ、原田め。

苛立ち紛れに自分の膝を叩くカッキーの肩から手を離すと、ユッチ先輩が原田を促した。

「原田。君が問答無用でウィルスナジアを使って魔法陣を発動させず、こちらに語りかけてくるからには何か話があるんだろう。おとなしく聞くよ」

「さすがはユッチ先輩。ご指摘通り、僕はもう一度だけ説得しようと考えていますよ。あと、あなた方が強引にナジール・プリズンを破ろうとするのを見越して、そのエネルギーを巨大魔法陣の起動キ―として利用しようとしたことも見抜かれてしまいましたね。ところであなた、替え玉がいますね？　あなたがナジアだなんて今日の今日まで気づきませんでしたよ」

「替え玉だって。何を言うやら。俺様の真似をできる者など、俺様以外には有り得ん。気配を隠す特技、もはやあんただけの専売特許じゃないってことさ」

おかしい。ではなぜユッチ先輩はK・Tを怖れたというのか。ナジアとしての気配を消す消さない以前に、あいつがターゲット以外に手を出さないって情報くらい、親父から聞いていただろうに。親父は何と言っていたっけ。たしか、こう言っていたはずだ。

『我々の希望は、ユーリ、お前と、名細亜学園に潜り込ませたさ――』

“さ”は沢沼の“さ”だろう。ぎりぎりまで敵に存在を知られなくなかったということか。どの道、この段階で原田に知られてしまったのでは、この潜入作戦は功を奏したとは言い難いのでは？

そんなことを考えていると、ユッチ先輩はこちらを振り向いて言った。

「佐々木さんには間違った報告をしてしまった。何しろ、原田のことを“あの方”と呼ばれる大物だと思っていたのね。あいつが実は若輩エリートだってことに気づいたのはつい最近のことだ」

「素晴らしい」

原田が心からの賞賛――少なくとも表面上はそう見える――をユッチ先輩に贈った。ぱちぱちと拍手をし、続けて言う。

「有り体に言いますが、僕らの所属する組織にせよ、あなた方の」

監視機構』にせよ、組織としての綻びが生じ始めています」

「残念ながら、その意見には賛同するしかあるまい。日本支部はこの有様なものだからな」

ユツチ先輩の相槌ににこやかな微笑みを返した原田は、同じ表情のまま俺に視線を据えて言い放った。

「組織の上層部に居座る連中など、すでに保身と利権争いにまみれた“ロウガイ”に過ぎんよ。君の仮初めの父上にしても、ね」

ロウガイの意味がわからず、俺は一瞬固まった。しかし、すぐ気づいた。労咳ろうがいとは日本語の古い言い方で、意味はたしか結核のはず。原田は恐らく“労害”という当て字にして両組織の幹部を現実世界側の有名な病気に見立て、揶揄しているのだろう。

「ろ——」

不思議だ。俺自身、心の中では“クソ親父”と呼んでいた人物のこと、誰に何と言われても気にならないはずだった。だが、今の俺ときたらどうだ。さっきのカッキーと全く同じ勢いで立ち上がっている。

「まあまあ。まだ原田の話は終わってなさそうだよ」

そして、ユツチ先輩は、カッキーにしたのと同じように俺の肩に手を置く。その手からは全く力が感じられないというのに、俺はおとなしく座らされてしまった。

やっぱりユツチ先輩、ただ者じゃない。カッキーがあっさりと座らされてしまったのは、彼が疲弊していたからだと思っていたのだが、そうとばかりも言い切れないようだ。

「感謝します、ユツチ先輩。できればこの後ももう少し、ご静聴にご協力頂きたいものだな」

口惜しいが、今アドバンテージに立っているのは原田だ。こうしてユツチ先輩が俺をクールダウンしてくれなければ、リカの人質という最大の弱点を忘れ、感情だけで原田を罵倒してしまうところだった。

「考えてもみたまえ。現実世界側には人間が生活するのに理想的な

環境がこんなにも広大に広がっている。一方、幻夢世界側には生活できる環境が点在するのみで、それすら維持するために大変な努力が必要だ」

原田の演説は次第に熱を帯びてくる。

「それに比べて君たちはどうだ。大切な資源を浪費し、自分たちの環境を汚して憚らない。そんな愚かな隣の世界の住民どもを見て、僕たちが何も感じずにいられると思うかね？ 無理だ。だがまあ、生まれた環境を呪っても仕方がない。僕自身こちら側に生まれていたら、そんな愚民の一員であることを疑いもせず、日々のほんんと暮らしていたことだろう。そのことは理解しているつもりだよ」

原田はテンションを上げすぎることなく、冷静な語り口調に戻した。

「そう。君たちは数が増えすぎたのだよ。我々のような環境による個体数調節システムが希薄なうえ、レミングのような集団自殺システムもない。しかし広さの違いはあるが、環境が有限である点においては我々と同じだ。袋小路だよ。無駄に増え続ければ自滅するだけだというのに」

「原田。言葉を挟んで悪いが、君の言うレミングが我々の世界に住むネズミの仲間のことを指しているのだとしたら、集団自殺説は俗説だよ。彼らは集団移動をする習性を持つが、決して自殺するわけじゃない」

「ふむ、それは失礼」

ユツチ先輩の指摘に対し、原田は素直に謝罪すると話を続けた。

「本題に入ろう。我々若い世代が手を組み、共存の道を探る時期が来にいると思うのだよ。だが、穏健派が考えるような共存などでは数で劣る我々にとって不利なだけだ。圧倒的にね。僕が考えているのは“卒業検定”ではない。現状の組織における幹部の椅子になど興味ないのだ」

「ほう。それで」

「今回活性化させる予定の魔法陣内部は、僕の計算によると少なく

とも数年から、場合によっては十年もの長きにわたり一定の環境を保つことができる。その環境内で生きられる者の選定は、僕の裁量ひとつで決められるのさ。現実・幻夢両世界の人間にも、幻妖にも手が出せない。少なくとも数年。それだけあれば、両組織の幹部を従えるのも、殲滅するのも不可能ではないぞ」

「うるせえ、黙れ」

俺の口から自然に言葉が出ていた。もう、黙って聞いてなんかいられないし、言葉を選んで議論する気にもなれない。

「愚民を正しい方向に導くことができるのは選民のみだ。ごく自然な発想だとは思わんかね。僕に協力しさえすれば、君たちも選民となる。迷うほどの決断ではないと思っていたのだがね」

「ふざけるな！」

「ユツチ先輩と比べると、どうもきみは感情的だね。やれやれ、これ以上説得を続けても無意味か。どうしましょうか、ユツチ先輩。あなただけでも——」

ユツチ先輩は何と答えるのか。思わず先輩に目を向けた俺は、意外な光景を目撃して束の間呆氣にとられた。舌を出し、中指を立てて天井の原田に向け挑発的な笑顔を見せるユツチ先輩の姿がそこにあった。

「あなたほどの人も愚民の一員に過ぎなかったというわけですか。残念ですがリカくんもウィルスナジアも、そしてあなた方の命も今宵限りです」

明らかな不快感を声に滲ませる原田の映像にノイズが入り、天井がグレー一色に戻ろうとしたが、その原田の顔が驚愕で歪んだ。

強烈な光が俺の目を射る。天井に、白く輝く五芒星が出現した。

聖槍

ナジールの天井ではない。映像の向こう側——原田の正面に魔法陣が出現しているのだ。

「こやつはわしがおさえる。この魔法陣を的に、そこから出るのじや、ユーリ」

「爺さん」

原田の背後から、結城老人の姿が現れた。彼がハルダイン魔法陣を顕現させたというのか。

少しもがいたものの諦めたのか、原田は動きを止めた。

「くつ、先代ハルダインの戦士か。ご老人、あまり無理するとお身体に障りますよ」

「あいにく元気が有り余っておつてな。ただ、トシのせいか手加減は難しくなってきたておる」

「それなら遠慮は無用ですね。——やれ」

「うおっ」

原田の横から突然現れた大木——幻妖が、振り上げた枝を無造作に振り下ろす。

「避ける、爺さんっ」

一直線に振り下ろされる枝が、老人の脳天へと迫る。間に合わない——

天井の映像が消えた。

「く……っ、爺さん、爺さん——」

俺の叫びを、凜とした声が遮る。

「ユツチくん、ショウキくん、カッキーくん。同調しなさい。チャンスだ、ナジール・プリズンの包囲網が緩んでいる」

「ユウジ？ 何を——」

今の声、たしかにユウジのはずだが、別人ではなからうか。同一人物とは思えないほど、年上の男を感じさせる声だ。

「リカにはちゃんと私たちの言葉で伝えたかったけど、かわりに伝えてもらっわね、ユーリ。大丈夫、お義父様の魔法陣はまだ感じられる——健在よ」

「さつき？ どうしたって言うんだ」

さつきもユウジと同じくらい雰囲気が変わっている。

ユウジが俺の正面に立ち、告げた。

「聞いてくれ。俺たちは誠太と愛美。リカの両親だ」

「な……っ」

こんな時に冗談を言うとは思えない。だがそこに立っているのはどう見ても同級生のさつきとユウジだ。

「ユウジくとさつきさんを助けるため、我々が“寄生”している状態だ。我々の自我が表出している間、我々はナジアとしての能力を持つ。だが、まもなく我々の自我は消滅し、ユウジくとさつきさんの生命として吸収されることになる」

「言ってることがよくわからない」

「だろうな。事実だけ受け止めてくれ。過去、ユウジくとさつきさんは奴——原田に宿る過激派による攻撃のとばっちりを受けて、一度死んでいる。意図せず、我々の身代わりとなってしまった格好だ。我々は彼らを救うために“寄生”した。その後我々の自我は滅多に表に出ることはなく、君と話をするのもこれが最初だ」

「詳しいことは慎吾から聞いて。それより、これからすることをよく聞いて」

早口で捲し立てられても理解が追いつかないが、今優先すべきことはユウジとさつき——もとい、誠太と愛美の言葉を聞き返すことではない。

「俺たちはユーリ、君を武器に見立てて校舎の屋上へ送り込む。武器なら時間がずれることなくナジール・プリズンを突破できるはずだ」

「わかった。じゃ、俺は自分自身が武器だと思い込むつもりで、ハルダイン神に祈ればいいんだな」

「ご名答よ、ユーリ。向こうでリユーとガラ、そしてお義父様と合流し、力を合わせて魔法陣を止めて」

「そして、できれば」

俺はふたりにうなずいて見せた。

「ああ、わかつてるさ。リ力を助ける。必ずだ」

誠太と愛美の指示により、ナジール内に再び魔法陣が展開される。位置関係は先ほどと同じ。違うのは、五人は座っているが、俺だけ俯せに寝ていることだ。

「ぬ……う、うつつ」

五人のうち、ひとりだけ半ナジアであるカッキーは相当つらそうだ。だが、五芒星は強烈な輝きを宿す。俺は祈りを捧げた。

「我、破邪の祈りを捧げる者なり。聖ハルダインよ、我が喚^よび声に応えたまえ。我が身を武器となし、攻性魔法発動の阻止を欲す。疾く導き給え」

俺の身体を白銀の光が包み込む。光はやがて明確な形を表す。大きな槍だ。その槍こそが俺。原田を貫く武器だ。

「まだ足りない。ナジール・プリズンを突き破るパワーが……」

誠太の呟きを受け、ユツチ先輩が指示をとばす。

「ご夫妻、魔法陣の維持を我々三人にお任せください。あなたがたでユーリを押し出すんです」

「ごめんなさい、辛いだろうけどお願いするわね」

後方二箇所を担当する誠太と愛美が立ち上がった。

「ぐ……おお……っ」

「踏ん張れ、カッキー」

「命令だ！ 気絶するんじゃない、柿崎っ」

「シヨウキさん……こそ、今にも目が……閉じそうです……よ」

俺の身体が持ち上がる。誠太と愛美が差し上げた両手の上に載っているのだ。

——任せたぞ、戦士よ。そなたを“聖槍コーラスレイブ”となす。耳に残るはハルダイン神の声か幻聴か。

視界がぶれたと見た瞬間、俺の周囲を星々が流れていく。今、俺の身体は白銀の槍となり、夜闇を切り裂いて飛んでいる。やがて弧を描いて落ちてゆく。視線の先には校舎の屋上。

「リユーフィン、ガラ。リカの身柄を確保！ 最優先だっ」

確認するまでもない。校舎の物陰に潜む仲間たちの気配を俺は感じ取っていた。

「任せろ、ユーリ」

屋上がどんどん近づいてくる。大勢の人間が走り出す様子が視認できる。

原田。そこにいるんだな。背後には結城老人。無事だ。

原田たちの前で足を止め、こちらを見上げる集団がいる。

見知らぬ男女が四人、身長二メートル半ほどの木の形をした生命体が五体。他校に潜入していたエージェントとその相棒たち——シヨウキの相棒アカストも——だろう。

時間がない。できれば攻撃したくないが、彼らを蹴散らさなければ原田には届かない。

「うおりゃああああ」

叫びながら屋上に降り立ち、幻妖とエージェントたちへの体当たりを繰り返す。葉っぱが飛び散り、肉が裂ける音が響く。

——すまない、後で治療するから。

「ありがと、リユーくん、ガラさん」

リカの声だ。

「ぐあっ」

ほっとした瞬間、俺は幻妖の鞭を受けて転がってしまった。

「ぼっとしてんじゃねえ、ユーリ。ハルダインの戦士の名が泣くぜ」

「ちっ。来い、リユーフィン」

槍のままでは動きづらくて仕方がない。いったん身に纏う槍のオリを解いた俺は、右手にリユーフィンを巻き付けた。

幻妖三体、エージェント二名健在だ。幻妖はともかく、残っているエージェントは両方とも女子。しかも片方は中学生だろう。

「お前らも《監視機構》のエージェントなら操られてるんじゃない。攻撃するのは気が引けるが、遠慮してられる状況じゃない。

のばした足が女子中学生の腹に当たった。小さな身体が浮き上がる。軽い音をたてて屋上に転がると、動かなくなった。なるべく軽傷のまま気絶してくれれば良いのだが。

「っ……………」

間髪を置かず目の前に迫る脚。咄嗟に両腕でガードした。重い蹴りだ。痺れる。もう一方の女子高生は格闘技の心得があるのか。

その時、地響きとでも形容すべき重い音をたて、背後で何かが倒れた。

「背中ががらあきだ、ユーリ。特訓の成果が出ていないぞ」

「すまない、ガラ」

ガラが幻妖を一体、片付けてくれたようだ。

「魔法陣起動の邪魔はさせない。やああ！」

女子高生の気合い。手刀を繰り出してくる。

避けた先に幻妖の枝。

「甘いぞ、ユーリ」

リユーフィンが能動的に反応し、右腕の剣が枝を受け止める。

ガラは別の幻妖と対決している。くそ、思った以上に手強い。早

く原田のところへ。

「爺さ——！？」

原田がいるはずの場所へ視線を向けた俺は目を疑った。

「おい、爺さん」

倒れている。爺さんが。

原田は？

「僕はここだよ」

見上げると、屋上への出入り口の上にいた。

夜目にも赤い液体の滴る剣を手し、口元をV字型に吊り上げて笑う原田が。

「ユー……リ。おじいちゃん……が」

リカは、原田に後ろ手に締め上げられ、喉元に剣を突きつけられている。その目はこちらを見てはいるが、虚ろだ。

「原田。リカの目の前で、爺さんを――」

刺したな。刺しやがったんだな。……許さねえっ！

怪物

「まさか、君自身が武器となり、ここまで飛んでくるとはね。正直、計算外だったよ」

工事用の常夜灯と月明かり以外には光源のない屋上だが、そう言っ
て薄く笑う原田の笑顔にはくつきりと陰影が浮かび上がっている。
一方、喉元に剣を突きつけられているというのに、リカは呆けた
ような無表情だ。結城老人が刺されたという現実を、受け入れたく
ないのかも知れない。

「ハルダイン攻性魔法陣を利用することを計画した段階から覚悟し
てはいたが、ハルダインの戦士を敵に回すのは心臓に悪い。今ここ
でリカくんをこの手にかけても良いが、そうすれば君たちは実力以
上の能力を発揮して僕を追いつめることだろう。実のところ僕はま
だ迷っている。それほどに、ユーリの存在は貴重なのだ。だが、君
たちのことだ。いずれにせよ、午前零時を迎える直前までに何らか
の——僕に敵対するためのアクションを起こすに違いない」
「……………」

原田の話が終わる前に、俺の背後から女子高生エージェントが組
み付いてきた。全く動けない。俺より細い体格にもかかわらず、恐
るべき膂力の持ち主だ。

原田は俺を見下ろし、命令してきた。

「僕としてはリカくんという切り札を必要以上にあてにするつもり
はないが、最大限の利用はさせてもらわなければ。……幻妖を右手
からはずしたまえ、ユーリ」

俺が動くよりも先に、自らの意志で俺の右手から離れたリユーフ
インは、いつもの姿となって屋上に降り立った。

そのリユーフィンに、幻妖の枝が巻き付いた。

ガラの方を見ると、彼女も別の幻妖に組み付かれている。

「ふむ、十一時を回ったところか。こうして眺めると優位に立てた

ような気がするが、全然安心できないなあ。いつそ、いまずぐ魔法陣を起動してしまうか。ウィルスナジアたちの力が思いのほか安定しているからな、最短で五分もあれば起動できそうだな」

「なにを……っ」

もがいてみたが、さらに強い力で気道ごと締め上げられ、俺は呼吸さえ覚束なくなった。

まずい。こめかみのあたりで血管が脈打ち、視界が狭まってきた。冗談じゃない、このまま締め落とされてたまるか。今の俺は、ハルダインの戦士なんだ。

「おおおっ」

白銀の光が俺を包む。

拘束が緩む。そう実感するのと同時に、女子高生エージェントが弾け飛んだ。

次の瞬間、俺は原田の目の前に立っていた。高さ三メートル近い出入り口の屋根まで、無自覚のままごく一瞬で飛び上がったのだ。「止まれ」

リカを盾にしてこちらに剣先を向ける原田に対し、俺は半歩退いて身構え、両腕を真上に持ち上げた。俺の全身を包んでいたコーラスレイブの光が消える。

「降参かい、ハルダインの戦士。さっきも言ったが、僕は迷っている。だから、最後のチャンスをあげるよ。どれだけ自覚しているかわからないが、君の力は稀有なものだ。僕と協力すれば世界の全てが手に入るほどの。是非協力し、愚民どもが間違いを犯さぬよう、僕たちの手でコントロールしようじゃないか」

原田の笑顔を不気味な赤い光が彩る。出入り口の上に飛び乗ったことでしょうか、気づいたのだが、赤色の光源は屋上に点在している。屋上を見渡すと、五メートル前後の間隔を置いて六箇所ガラス製の円筒と思しきオブジェが配置されている。六つとも同じ大きさで、直径三メートル、高さ二メートルの円筒だ。それらの天井部分が淡い赤色に発光しており、それぞれに五人ずつの生徒が男女様々な組

み合わせで閉じこめられているのが視認できた。閉じこめられた生徒の中に田嶋真由美が混じっているかどうかまでは見分けがつかないが、彼らがウィルスナジアであろうことは最早疑う余地がない。

「君が間違いない僕に協力を約束するまでの間、ウィルスナジアどもを起動キーとして準備を進めさせてもらうよ」

円筒天井の赤い光がいよいよ強まり、各々の円筒を繋ぐ線状の光が出現すると、瞬く間に赤い光の五芒星を形成した。

見上げると、さきほど夜空を薄暮の如くに染め上げた複雑な紋様も再び上空に出現していた。目を懲らすと、複雑な紋様を仕切るかのように他より濃く光る赤色の筋が幾筋か伸びており、それらが巨大な五芒星を形成していることが見て取れる。

「ワームホールで繋がれたそれぞれの学校的位置まで、必要なエネルギーを飛ばしているのさ。屋上の魔法陣はそのための起動キーなのだよ」

大地が鳴動し、校舎が揺れる。

揺れる校舎が立てる軋み音に、合唱を思わせる男女の声が混じる。ウィルスナジアたちの呻き声だ。彼らの生命エネルギーが、魔法陣の起動キーとして使われているのだ。

「あと三分。君が協力すると言わない限り、起動準備は止めないよ。三分以内に止めないと、巨大魔法陣の内側は現実世界側の人間が生きていられる環境ではなくなる。もちろん、君の仲間も、君自身もだ。……僕には君たちの身体を幻夢環境に適応させる用意があるが、三分では少し時間が足りないな」

穏やかな口調だが、内容は明確な脅迫だ。俺は沈黙を答えに代え、原田を睨み付けた。

「この約一か月、僕は君を観察してきた。まあ、九割がた協力が得られるとは思っていないよ。それでも、君の性格もハルダインの戦士としての能力も、失うには惜しいと思っているんだ。残り一割にかける僕の気持ち、是非受け止めてもらいたいものだな。残り二分」
差し上げたままの俺の拳と拳を、白銀の光が繋ぐ。

「ユーリ？ 何を考えている。その槍でウィルスナジアを攻撃するのか。あのガラスケース、防弾仕様だからね。とても頑丈だよ。ハルダインの武器なら、何度も攻撃すればあるいは割れるかも知れないな。しかし、時間が足りるかな？ それに、中の生徒たちだって無事では済むまいよ」

白銀の光は輝きを強め、実物の重みを伴って明確な形を現し始める。やがて、俺の両手の上に長大な光の槍が顕現した。

「……………」

睨み合いの均衡。

俺はゆっくりと左手を前に出し、右手を後ろに引いて槍の先端を原田に向ける。

「正気かね、ユーリ。リカくんごと僕を攻撃するのか。あと一分だ」
原田は相変わらず冷静な口調だが、例の笑みは消えている。

大地の鳴動は激しさを増し、地震さながらの揺れが校舎を襲う。

「よかるう。やってみたまえ。震度三ほどの揺れの中、君の手元が狂わないことを願うよ。ああそうそう、仮にリカくんごと僕を斃せたとして、はたして魔法陣が止まるかな」

「ユーリ、このバカ！ 俺を呼べっ」

リューフィンの声は俺の耳に届いている。だが、あえて黙殺した。

「聖槍コーラスレイブ。破邪顕正」

投げつけた槍は、リカの身体ごと原田を貫く。

白銀の光が赤い光を駆逐する。

「ぐう……わああっ」

大地の鳴動が止まり、上空の紋様が消えた。

屋上の魔法陣から赤い光が消失する。

どさりと音を立て、原田が倒れた。

リカは立っている。全く外傷がない。

当然だ。コーラスレイブは破邪の槍なのだから。

「しっかりしろ、リカ。爺さんなら無事だ」

確かめたわけではない。だが、原田が言っていたことが本当なら。

結城老人が元ハルダインの戦士だったのなら。

「多少のことにくたばるわけがないさ」

リカを抱き寄せ、飛び降りる。一息に結城老人の側へ。

リユーフィンとガラには構うつもりはなかった。案の定、敵対していた幻妖たちは気絶している。

「うぬ。ぬかったわい。トシだな、わしも」

ほらやつぱり。

結城老人は笑顔を浮かべ、俺の手を借りるまでもなく自ら身体を起こす。

左肩から右腰まで袈裟斬りに斬られていて作務衣も裂けているが、驚くほど出血が少ない。原田の刀からはあれほど滴っていたというのに。

「ここのところ使ったことがなかったが、わしの治癒能力もまだ枯れたわけではなかったようじゃ。トシ食って新陳代謝がほとんどないから、その分治りが遅いかの。ほっほ」

無言のまま、リカは結城老人に飛びついた。

「さて、この頑丈なガラス容器からどうやって子供たちを出すか、じゃが……」

リカの頭に手を置いて呟く結城老人は、ふと顔を上げると目を細めた。

結城老人の視線を追うと、赤い光が俺の目を射た。

中空に、直立した姿勢で原田の身体が浮いている。その身体が真っ赤な光に包まれているのだ。朱色の陰影に縁取られた原田の口元が、例のV字型の笑みを浮かべている。

「K・Tなみにしぶとい野郎だ」

「オペレーション・セカンド」

原田の言葉と同時に、消えたはずの赤い魔法陣が再び活性化する。まずい。このままウィルスナジアたちの生命力を消費されたら、彼らは――

「そうだね。嫌なタイミングで止められてしまった。最初に考えて

いた魔法の発動はもう難しいだろう。彼らに残された生命力で魔法を発動するなら、やはりこれかな」

大地が鳴動し、上空からは稲妻さながらに赤い光が降り注ぐ。

赤い稲妻は校庭の中央に収束し、土塊を巻き上げた。響き渡る轟音に思わず耳を塞ぐと、土煙のカーテンをかき分けて禍々しいシルエットが浮かび上がる。

「おいおい、何の冗談だよこいつは」

リユーフィンが吐き捨てるように言う。

俺は内心で同意した。冗談でなければガキの見る悪夢だぜ。

校庭の中央に仁王立ちする禍々しい影。しかしそいつは、校舎の屋上に立つ俺たちを見下ろしているのだ。

重い一步を踏み出した怪物は、戦闘機による爆撃もかくやという爆音を轟かせて足と思しきものを校庭に叩きつけた。

土煙のカーテンが薄れていく。

「くそつたれ。悪い冗談にも……ほどがあるぜ」

そこに立っていたのは大木——暴走した幻妖の姿。その数十倍に及ぶ相似形の怪物だった。

破邪

赤い光が怪物——巨大幻妖めがけて飛んでいく。原田だ。

「破邪顕正」とは言ってくれるね。まさに笑止千万。ハルダイン教にはもともと破邪だの正義だのという概念は存在しないというのに」

遠ざかっていきつつも、しっかりと声が聞こえてくる。肉声というわけではないのだろう。

「見たまえ、この怪物。破壊と悪意の権化ではないか。これこそ、ハルダイン教の本質なのだよ。そして、そのハルダインに選ばれし戦士が君なのだ」

「……………」

「どのみち、いまさら理解してもらえたところでもうどうにもならん。一度生み出された怪物は、魔法陣の内側に破壊の限りを尽くさない限り消滅しないのだから」

赤い光は巨大幻妖の頭部へと吸い込まれていった。

次の瞬間、巨大幻妖の目と思しき部分が光り、上体を反らして巨体を振るわせる。どうやら笑っているようだ。

「止められるものなら止めて見せるよ、ははははは」

振り上げた巨大な枝を一本、校庭へと振り下ろす。

爆音が轟き、土塊が飛散する。俺たちの立つ屋上へも少量の土砂が降り注ぎ、その場の全員が両腕で顔をかばう。

「なんだかんだ言ってもためえ、単なる嫉妬の固まりじゃねえか。おとなしく自分の居場所に戻りやがれ」

俺は両腕を差し上げ、聖槍コーラスレイブを構えた。校舎の短辺、端から端まで届くサイズの光の槍だ。

「うお……………」

校舎が揺れる。

上空から複数の枝が降り注ぎ、そのうちいくつか校舎を直撃し

ただ。

「あははは。いくら強烈な武器でも、扱うのが人間サイズの卑小な存在では相手にならんよ」

一度巨大幻妖を呼び出したからには、もうウィルスナジアに用はないということなのだろうか。奴は容赦なく校舎に攻撃を加えてくる。このままでは校舎ごと、全員がやられてしまう。

「いくらガタイがでかくても、その槍をまともに食らえばただでは済むまい。わしが奴の注意をそらす。隙を見てそいつを投げつけるんじゃ、ユーリ」

「俺たちが手伝うぜ、爺さん」

言うが早いか走り出す結城老人に、リューフィンとガラがついていく。

「何するつもりか知らねえが、あまり無理すんなよ。トシなんだか

——」

校舎が揺れ、その先は言葉にならない。

結城老人が走り込む先に、巨大幻妖の枝が振り下ろされた。

「お——」

叫び声を吞み込むリカの目の前に、結城老人が降り立つ。

身体の一部を結城老人に巻き付けたリューフィンが、彼の身体を振り回したのだ。

「ぐえ。さすがにきつついぜ」

「うむ。わしも目が回る。長くは保たんぞ、ユーリ」

唐突に空気を叩く破裂音が響いた。

バスケットボール大のものからゴルフボール大のものまで、大小さまざまな光弾が巨大幻妖めがけて飛んでいく。

「ガラの奥の手だ」

言い捨てて結城老人から離れたリューフィンは、夜空を飛び去っていく。

振り下ろされた枝が、校舎の一角を崩す。直前までガラが立っていた場所だ。

次の瞬間、ガラの身体が俺の目の前に飛んできた。
「ぐ。まさかリユーの世話になるとはな。この私が」

巨大幻妖の身体に命中した光弾は、しかしいずれも何の効果も生むことなく煙となって消えた。ガラが舌打ちをする。

「ち。さすがに頑丈だな、化け物め」

「手加減してんじやねえよ、ガラ」

「黙れリユー。お前も硬くなるだけじゃなく、光弾のひとつでも出してみろ」

会話を聞き流し、俺は槍を撃ち出した。

「破邪顕正」

巨大幻妖へとまっすぐに飛んでいく白銀の槍。

雷鳴さながらの爆音が轟く。

俺は目を疑った。

コーラスレイブが軌道を変え、斜め下に落ちていく。そのまま校庭に突き刺さって止まった。

赤い光を纏った巨大幻妖の枝から、白い煙が立ち上っている。

「弾いたと言うのかっ」

「君の槍がハルダインの武器なら、この怪物もまたハルダインの武器なのだ。互角——いや、今となつては僕の方が有利だな。ふははははあ」

原田の声と共に、巨大な枝が上空から振り下ろされる。

奴の目的は明白だ。

槍を撃ち出し、丸腰となった俺を狙っているのだ。

「う……」

再び俺が差し上げた両手からは細い光が弾けるのみ。さすがにあれほど巨大な槍は、そうそう連続で出せるものではない。

風が唸り、複数の枝が屋上に迫る。それらが生む風圧は、俺たちの身体を屋上に押しつけ行動の自由を奪うほどだ。

——間に合え！

上空を睨み付ける俺の視界いっぱい、巨大な枝の大群が襲いか

かる。

全ての枝が赤い光を纏い、俺の世界を赤一色に塗り潰さんと迫ってくる。

あと四メートル。

俺の拳と拳を白銀の光が繋ぐ。

三メートル。

人間の身長ほどのコーラスレイブの形が顕現する。

二メートル。

これじゃ小さい。もっと大きく。

一メートル。

暗転。

きつく目を閉じる。

……間に合わなかった。

黒一色に塗りつぶされる視界の中、耳を聳する轟音が……。

「……………」

轟音も衝撃もない。閉じていた両目を、俺は再び開く。

暗黒の世界に、少しずつ光が満ちてくる。

俺の周囲を、星が流れている。

「なんだ？ 夜空を飛んでいるのか」

「ユーリ。あんなデカブツとやり合うんなら、是非俺たちも混ぜてくれよ」

この声はっ。

「ユツチ先輩。出られたのか……、というかどこだ？ 姿が見えないぞ」

「足下見てみな」

……………。なんじゃこりゃ。

「金色のヒトデ……かよ」

夜空を飛びながら、俺の目は点になっている。

「うはは、まあ、アレだ。ナジール内の五芒星を、そのまま乗り物

にしたと思ってくれ。リカくんも結城老人もリユーフィンもガラも、みんなここにいます。俺たち全員で、あのデカブツに一泡吹かせてやるぜ」

「後は任せる、イギリス人」

「頼んだ……ぞ、留学生」

「ユーリ、愛してる。どこまでも一緒よ」

「俺もだ、リカ。一緒に行くぜ」

「おお。妬けるぜ。ご老人もご夫妻もニコニコしちゃってさ」

俺はひとつ深呼吸し、地上を睨み付ける。

こちらを見上げる巨大なはずの幻妖が、今は酷く小さく見える。

「我ら、破邪の祈りを捧げる者なり。聖ハルダインよ、我らに加護を」

白銀の光が、金のヒトデごと俺たちを包む。

急降下する俺たちを止める者など、もうどこにもいない。

なすべきことはただひとつ。

「聖槍コーラスレイブ。破邪顕正」

秋晴

夜空を染め上げる白銀の流星。地上に突き刺さり、赤い光を高々と突き上げる。ほんの一瞬、わずか一度きりの赤い噴水があたりを照らす。

金のヒトデは、その内側に夜空を漂う俺と原田の身体を吸い込んだ。そのまま地面を目指して降下していき、静かに着陸した。着陸と同時に金のヒトデは消えてしまい、目を射る白銀の光が俺たちの視界を覆い尽くした。そのせいで互いの位置を見失ったが、気配でみんなが近くにいることはわかった。

光に目が慣れてくると、校庭では新たな現象が起きていることに気づいた。

ハンドボール大の虹色に輝く光球がひとつ、またひとつと夜空へ舞い上がっていく。それらはシャボン玉のように頼りなくふわふわと揺らめきつつ、しかし風の流れに逆らって校舎の屋上へと漂っていく。

俺は光球の発生源を改めて見つめた。

名細亜学園の校庭に突き刺さる白銀の槍。その槍が校庭に縫いつけているのは、冗談のような怪物。

大木の身体を持ち、根の形をした脚と枝の形をした多数の腕を持つ、暴走状態にある幻妖の相似形——その身長は四十メートルに届くのではなからうか。最上部には顔面と思しき部分があり、赤く爛々と輝いていた双眸は、今は光を喪っている。

ハンドボール大の光球は巨大幻妖の身体からはがれるように生じては夜空へと舞い上がっていき、そのたびに巨大幻妖の身体が薄く小さくなっていく。まるで日射しに晒されるアイスクリームのようにだ。

その様子を眺めていて、俺は唐突に気づいた。おそらく光球は、魔法陣を通じて吸い取られていた、ウィルスナジアたちの生命力な

のだろう。魔法が効力を失ったため、本来の居場所へと戻っていくのに違いない。

一方、巨大幻妖を脳天から真っ直ぐに校庭へと縫いつけている白銀の槍は、遮蔽物たる怪物が溶け崩れていくにつれて姿を現し、ますます輝きを強めていく。

今や太陽と見紛う強烈な光芒は、真夜中の学園を晴天の正午さながら隅々まで照らす。

直視するには眩しすぎる。槍に背を向けると、俺のすぐ後ろに結城老人が立っていた。

「さて。屋上へは若いのが二人向かったからな。わしが手を貸すまでもあるまいが、万一に備えて様子を見に行つてくるとしよう」

俺はうなずいたが、万一の事態が起きるとは微塵も思っていない。目の前で溶けていく巨大幻妖からも屋上からも、恐怖と不安をかきたてる気配が完全に消えているのだ。

「まあ、何も無いとは思うけどよ。気をつけてな、爺さん」

軽く手をあげ歩き去る結城老人。見送り、視線を下げると複数の影が見える。いずれも立ってはいない。ふたつは座っており、みつは横になっている。

まず、もつとも近い影へと歩み寄った。横になっている。

「ユーリ。僕は本当に、きみに協力してほしかったんだ。たとえそれが叶わなくても、負けることはないと思っていた。それなのに……。おかしいだろ、負けてほつとしているんだ」

「原田。巨大魔法陣はお前の発案か。それとも誰かの入れ知恵なのか」

答えようとした原田の胸が光り、ハンドボール大の光球が姿を現す。巨大幻妖からはがれて漂うものと同じ、虹色の光球だ。

「原田？　おい、原田」

いらえはない。光球が原田の身体を離れた瞬間、彼は気絶してしまった。

——その時、俺のすぐ頭上に新たな気配。

「っ……！ リューフィンっ！」

「あいよ、相棒」

相棒が緑の光を纏い、俺の右手に巻き付く。校舎の屋上に光の尾を曳き、白銀と虹色の世界に緑色の波を立てる。

「待ちたまえ、味方だ」

軽く見上げる俺の視線の先に、幻妖が二体浮いている。小動物を入れるケージに似た容器の中に、原田の身体から抜け出た光球が閉じこめられていた。

「なるほど、殺気がないな」

「ああ、こいつら顔見知りだ。穏健派だよ、ユーリ」

俺はリューフィンを巻き付けた右腕を下げた。リューフィンは俺の肩に移動し、通常の姿に戻る。穏健派の幻妖は挨拶を省略し、口々に話しかけてきた。

「加勢が間に合わず、申し訳なかった。ワクチンの量産に手間取ったのだ」

「佐々木幹部のところにも仲間を派遣し、ベルハ——ああ、こいつの本名だ」

ケージを持つ幻妖は言いながら捕らえた光球を示す。

「こいつに協力したスパイどもの退路を断った。佐々木幹部はスパイどもに捕まる直前、色々と準備をしていていた。大した男だよ、彼は」

原田——ベルハの光球を眺めながら、俺は幻妖たちに質問をした。

「その光球、どうするんだ」

「うむ。この光球、日本人の言葉を借りるなら“魂”とも言えるべき物だね。本来の容れ物に戻した上で、こちらで尋問する。我々の基準により、ベルハには相応の刑罰を与えることになる」

まあ、そうなるだろうな。俺が口出しすべきことでもあるまい。ただ、ひとつだけ聞いておかなければ。

「本物の原田はどうするんだ」

「専門の治療スタッフを派遣する。原田くんの家族も、ベルハの仲間に身体を乗っ取られていてね。連中の“魂”はベルハの本体ともども確保済みだ。原田くん本人もご家族も、本物の“魂”は眠らされている状態だが、治療スタッフの技術により問題なく目覚めるだろう。ただ……。いや、これは言うことではないな」

「何だよ気になるなあ。言ってくれ」

「うむ。通常、身体を乗っ取るためには宿主と波長が合わなければならぬ。本物の原田くんも、心の奥底で“世界のリセットと掌握”という願望を抱いていた可能性が否定できないんだ」

「何だ、そんなことか」

拍子抜けした俺に、幻妖たちは訝る視線を向けた。

「そんなもん、日本人に限らず、俺たちの年代の一部の連中なら夢想して当然だ。大したことじゃねえさ。問題は、ベルハの野郎がそれを実行に移したってことだろ」

「きみもそうなのか。世界のリセットと掌握に魅力を感じる……？」

「んなわけねえ。俺は今の世界が好きなんだ」

イギリスの両親。顔も知らないフランスの両親。リユーフィンとガラ。シヨウキ。そして日本の大切な仲間たち。無くなっていいものなんてひとつもない。

「ふ、即答か。安心した。我々は再発防止に全力を傾注する。きみにもいずれまた助力を頼む時が来るかもしれん」

納得の表情を見せる幻妖たちにうなずきつつ、俺はあわてて釘を刺した。

「ああ。《監視機構》がマトモならいつだって声かけてくれや。おいしいバイトならいくらでもやるぜ。ただ、俺がハルダインの力を使えたのはこの地域に巨大魔法陣が敷設されてたからなんだろ。んで、ハルダイン神の意志が、巨大魔法の発動を阻止する方向に働いた、と。つまり、俺がハルダインの戦士に選ばれたのは一時的なものに過ぎないんだから、この先もこの力をあてにしてもらっちゃ困るぜ」

「元幹部の結城さんからご報告をいただいている。きみたちはK・Tとの戦闘において、ハルダインの武器を使わずに勝利したそうじゃないか。戦力として、充分すぎるほど期待しているよ」

「わーってるじゃねえか、お前ら」

鼻高々のリユーフィンに、俺は思わず突っ込みを入れた。

「おいおい、威張る前に光弾のひとつも撃てるようにしておいたらどうだ。ガラにも言われてただろ」

「うつせー！ K・Tの野郎はいけすかねえが、俺と奴はひとつだけ意見が一致してんだ。飛び道具は無粋だ。剣こそ最強！ そこんところよろしくだぜ、ユーリ」

「……いいコンビだ。これからもよろしくな」

穏健派の幻妖たちはナジールへと消え去った。

「こら、リユー！ ガラスシリンドーからウィルスナジアたちを出す作業は終わってないぞ。そっちの用が済んだならとっとと上がって来い」

屋上からガラの大声が降ってきた。

「やれやれ。んじゃ、俺行くわ」

「がんばれよ、リユーフィン」

溜息をひとつつき、相棒は屋上へと飛び上がって行った。

視線を落とし、次の影へと近づいた。荒い息を整えようとせず、ぐったりと横たわっている。

「無事か、カッキー」

「ああ、留学生。疲れたが……気持ちいいぜ」

言いながら手をつき、カッキーは上体を起こした。

「あんたスツゲエな。あんな化け物相手にして、勝っちゃうなんてよ」

「カッキーやみんなが力を貸してくれたからだろ」

「シヨウキさんはこの後すぐに中国に帰るそうだけど、あんたは三月までこっちにいるんだろ？ 俺を弟子にしてくれないか」

人の話聞いてんのか、こいつ。いや、それより。

「何の弟子だよ。俺はシヨウキみたいな体術は苦手だし、ハルダインの戦士としての力なら、原田を止めたことで消えるはずだし。俺がカッキーに教えられるようなことなんて何もないぜ」

「……舎弟でいい。なんでもやる」

なんかカッキーって、日本の古い少年漫画に脇役として登場しそうな奴だなあ。まさか、誰かの舎弟になるのが生き甲斐とか言わないだろうな。

「舎弟なんかいらねえ。いいじゃねえか、仲間で」

鷹の視線はどこへやら、カッキーの目が大きく見開き、コーラスレイブの白銀の光を反射した瞳がきらきらと輝く。心なしか朱に染まる頬が……なんだかこれまで見てきたカッキーの印象にそぐわず、ちよつとだけ気味が悪い。

「な……仲間」

適当にうなずき早々に立ち去る俺の背を、カッキーの「ありがとう、ユーリ！」という大声が追いかけてきた。低くて渋い声しか出せない奴だと思っただけに意外だった。

残りの三つの影は固まった場所にいた。

横たわるリカの頭を膝に乗せているのがさつき。その隣に座り、さつきの肩を抱いているのがユウジだ。リカはぐっすりと眠っている。

「誠太と、愛美……だよな」

コーラスレイブの光が照らすふたりの頬に涙の跡。

「ど、どうした——」

「さつきさんと、ユウジくんが……」

続く言葉に驚き、俺はふたりの肩に抱きついた。

曰く、今日の放課後に誠太と愛美の人格が表出した後もさつきとユウジの自我が眠ることはなく、ここまでの経緯を傍観者として眺めてきたのだそうだ。その上で出した結論を、誠太と愛美に伝えた

のだという。

「お前ら最高だ」

命の恩人たる誠太と愛美に対し、身体を共有することを提案したのだそうだ。

「でも」

決然と顔を上げ、涙を拭った誠太と愛美は、コーラスレイブを真っ直ぐに見つめる。

「残念だけど、ひとつの身体にふたつの魂が、いつまでも共存することはできない。だから今夜この時点で、ふたりの身体をふたりに返す」

一際強い光を放つコーラスレイブ。その光を受けた誠太と愛美が――。

リカを囲み、座っているのはさつきとユウジではなくなっていた。太い眉と通った鼻筋。多少ごつごつとして男臭い顔立ちながらも、意志の強い顔立ち。ユウジは、おそらく誠太の姿となっている。

長く艶やかな黒髪と大きな瞳。共通点の多さから、間違いなくリカの母親と知れる顔立ちは、明らかに愛美のものだろう。

「ん……」

リカが半身を起こし、目をこする。俺に気づいて微笑んだので、精一杯の笑顔を返してやった。

「振り向いてみな、リカ」

「え……。夢……?」

嗚咽と歓喜の叫びを背に、俺はコーラスレイブへと歩いていった。

ひとつの身体をふたつの魂がずっと共有することはできない。それを知る誠太と愛美の決断に対し、ハルダイン神が一夜かぎりの奇蹟を叶えてくれたのだ。

「ありがとう。俺からも礼を言っぜ」

ハルダイン神の声が聞こえた気がした。

「今後もあるたの力、貸してくれるってのか」

ただ、巨大魔法陣の影響下にないところでハルダインの力を呼び出すにはガラから教わった手順が必要となる。

「ありがたいが、実戦ではあんまり使えねえな。それに」

俺にはリユーフィンという相棒がいる。ふたり揃えば最強だぜ。

やがて、コーラスレイブの光が弱まっていった。暗闇に戻ると同時に、幸せな奇蹟も終わりを告げるのだろう。

* * * * *

「イギリスに帰っちゃうの、ユーリ」

俺の胸にしがみついたまま顔を上げようとせずと言うり力を見下ろし、バッグを置いた俺は結城老人に視線を向けた。

「爺さん、ちゃんと伝えておいてくれなかったのか」

「ほっほ。お主の口から直接言いなさい」

瞳を潤ませてこちらを見上げるり力を見下ろし、俺はゆっくりと告げた。

「よく聞いてくれ。任務と一時的な帰省で、俺はイギリスに二週間滞在する。久しぶりに妹にも会いたいからね。そしてまたここに戻る。実は俺、正式に日本支部所属となったのさ。それで、こっちの大学を受けることになった。母さんはまだ納得してないが、今回もポール——父さんが味方だ、何も問題ない」

俺の胸の中で笑顔の花が咲く。……かわいい。いや、見とれてる場合じゃない。

「妹さんいるの。会いたいな。どんな名前」

「……フィリス、もうすぐ十二歳だ。髪は俺と同じ栗色で、り力より少し短いくらい。瞳は明るめのブラウン。近いうちにみんなで会える日が来るといいな」

唇を指差し促す爺さんが視界に入る。

——エロ爺いめ。

追い払うように手を振ることで応じた。

「んっ」

リカは一瞬驚いて目を見開いたが、すぐに閉じる。
お互いの手に背を回し、ゆっくりと身体を離す。

「リカ」

「なに」

「爺さんのこと、忘れてるだろ」

途端に耳まで真っ赤に染めるリカに歯を見せて笑い、俺は鞆を拾い上げた。

例によつて手形がつくほど背中を叩かれたが、この痛みもまた心地良い。……いや、俺は断じてMではないが。

「空港まで送つていくぞ、ユーリ。きちんとした見送りは空港でやりなさい、リカ。さっきの続きも、な」

「あれ以上の続きなんてないわよっ！ ……もうっ」

もうじき九月も終わりだが、この時期の日本はまだまだ暑い。

玄関を出て見上げた空は雲ひとつなく、抜けるような青空だった。見上げているだけで、俺の心をどこまでも解放する。

第二の故郷。俺は、日本の空が好きになった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7631m/>

ナジア・ハンター 2

2011年8月3日03時30分発行